

川柳塔

昭和五十八年十一月二十五日 印刷
昭和五十八年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十二年 通卷六七九号



日川協加盟

No. 679

十二月号

1984年

新春おめでとう会

日時 昭和59年1月15日(祝)午後一時開会

会場 大成閣

大阪市南区大宝寺町中之町二六

(心齋橋大丸とそこの間を東へ約百メートル)

電話 (06) 271・5230

挨拶 西尾 梨

兼題

「緑」 野村 太茂 津 選

「ねずみ」 黒川 紫 香 選

各題三句

懇親宴

会費 五千元

◇同人・誌友の皆さん大勢のご参加お待ちしています

川柳塔社

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘 高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺 正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(一首)以内(川柳・俳句・短歌と

明示すること) 投稿随時

自由課題・秀句には掲載紙贈呈

〈投稿先〉

〒532 大阪市北区中之島二丁目二番 朝日新聞

ビル6F・電波新聞大阪本社「字芸部」あて

選句と巻頭

西尾 栗

昭和五十六年四月から同人吟の雑詠の選をつづけている。

題詠の選は、その題にぴったりの句が最上級の句として戴けるが、雑詠となると焦点をどこに合わすかが問題である。

個人個人の力量、キャリア、識見、環境、職業、情趣等色々と知悉していて、句の善悪、伸長、想像等を勘案して戴くことにしている。

何時か、K氏と選のことについて対話したことがあるが、K氏は作者名を見ず句を先に見てチェックすると言われたが、私は反対で先ず作者を見て、顔を思い浮かべ、環境を知り、柳歴をたずねてこの一句を尊くも得られたのだなと欣こんで戴くことになる。それで私は、地方に出かけられる機会があれば、出かけ

て成るだけ同人の方と話をしてお顔を覚えるよう努力している。曾て私は、同人吟を選するにあたり、年齢、職業を書いて戴くようお願いしたこともある。

それによつて、その人を少しでも知りこの句の生れたことを欣ぶ。

また巻頭の句について、色々と質問を受けることがある。先ず六句なら六句、七句なら七句が揃っていること、唯一句だけ上手でも困る。そして毎月同じ人が巻頭でも精彩がない。これには少しテクニクが要することも否めない。然しうまい具合に、巻頭吟が替って現われるものである。

次に二句目以下の順序であるが、何しろ何百人の句であるから、そう簡単にリンクづけるわけにもゆかないので、十五人から二十人位まで、多少句の佳吟をもつて順序をたて、柳歴によつて前後する場合があるが、あとは順序不同である。

A誌のように府県市別に揃えたこともあるが、うまくゆかないので、これも一回でやめた。

ある有名な俳句誌によると、四句組三句組二句組というランクがあつて、四句組の誰かが、或いは三句組の誰かが歿くとなると、三句組の又は二句組の一人が上ることになっているそうである。それで上がった人は「私は今月から何句組になった」という喜びに一席を設けて披露するという話も聞いた。これでは佳句をものしても、良句を詠しても楽しみのないことである。この点、当誌には五句組四句組ときめていないことはたしかだ。

毎月十五日〆切で、本社から同人吟が回ってくると、今月はどんな佳句があるかと、楽しみで楽しみで、フツ気がつくくと、夜中の三時四時になっていることも、しばしばである。初めに丸をつけてチェックし、二回目に赤線をもって消してゆく時にもう一度、読むことにしている。皆さんの一カ月の大切な収穫の句であるから、心して読ましてもらっているどうぞ、今月は如何だ、如何だとチャレンジして下さい。

御健吟、御越年をお祈りする。

座右の句

ふるさとの道が曲っていてたのし

(久米雄)

私の句

情性の日つまずいて知る愛の鞭

岩道 博友

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

選句と巻頭

二人の同人

川柳塔(同人吟)

自選集

■川柳太平記(7) 川上日車

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十四丁)

水煙抄

秀句鑑賞

「同人吟」
水煙抄

愛染帖

河村日満氏を悼む

西尾 葉：(1)

橘高 薫風：(2)

西尾 葉選：(4)

東野 大八：(34)

黒川 紫香選：(38)

阿部 柳太：(33)

白岩 文衛：(53)

橘高 薫風選：(54)

(57)

二人の同人

橘高 薫風

昭和五十八年十一月十三日、岡山県英田郡大原町笹岡にある笹岡公会堂の庭に土居耕花さんの句碑が建ち、句碑建立記念の川柳会が大原川柳社の主催で行われた。句碑には、

次の世があつたら妻よまた逢おう

の句が彫られてある。宮本武蔵の生誕地に近い山間で、道行く人に暖かい耕花さんの心を語り継いでくれることだろう。当日は、大原川柳会だけの内輪の会だったが、本田恵二郎氏の祝電、「石よりも固い約束石に彫り」が披露されるなど感銘の深い和やかな除幕式だった。耕花さんは、昭和四十五年十一月に句集「笹の花」を出版されている。

孫だからおむつのそばで飯が食え

扇風機止まって空気ホッとする

好きな物言わせて医者皆禁じ

など、ユーモアの味をふんだんに盛つた温厚なお人柄が各頁ににじみ出た句集である。

記念句会では兼題「妻」の選をされたが、

その軸吟は、夫婦ともに喜寿を迎えた感慨を詠まれたものであった。

五十年妻とトボトボトボと

米沢曉明氏は四国は伊豫の大洲の驍將だ。

梨と酒／東野大八 日満さんの死を悼む／小林由多香

日満さんのおとむらい／八木千代

■随想 師走の思い出／布施サチコ 60 湖北の秋／栗合春子 61

川柳折々のうた／なにお川柳この一句……………中尾藻介…(68)

「花道」……………川口弘生選…(62)

一路集「妻」……………河内月子選…(62)

「測る」……………浜野奇童選…(63)

初歩教室……………本田恵二朗…(64)

柳界展望……………(66)

香川酔々追悼本社十一月句会……………(69)

各地柳壇(佳句地10選／恒松町紅選)……………(73)

編集後記……………薰風・鬼遊・史好…(83)

座右の句

愛情となる斐の川の空と水

私の句

人生のドラマもすでに深い秋

(緑之助)

石倉 美佐子

長野文庫・月原宵明氏らとともに、戦前から

「川柳雑誌」に拠り川柳道を歩まれて来た。

昭和十二年のそれを見ると、

木魚へふと冷たさを感じたり

教壇に十年児童変るだけ

よく出来た案山子地主によく似たり

などの句が見える。その当時の「近作柳樽」

欄(今の水煙抄にあたる)には、文庫・宵明

の両氏のほか、正本水客・大坂形水・浜田久

米雄・北川春巢・黒川紫香・大森千代香(風

来子)・丸尾(若柳)潮花・弘津慶一(柳慶)

という錚錚たる名がひしめいている。半世紀

に近い川柳雑誌から川柳塔誌上での活躍ご

支援ぶりなのである。

このように土居耕花さんも米沢晩明さんも

ベテラン中のベテランといえる方で、その間

それぞれ路郎先生をその地にお迎えもしてお

られる。不朽洞(路郎居)の庭にあった棗の

木は、耕花さんの庭の水師営の棗の木の種類

から育てた棗の子孫で、今は故八木摩天郎氏の

家の庭に移されて大きくなっている。

この鮎は藤樹先生の喰べた鮎

水郷大洲と前書のある句集「旅人」に掲出

のこの一句は路郎先生曾遊の折の作品である。

このたび相次いで同人に迎えたお二人は、

川柳塔の栄誉だと言っても言い過ぎではな

かろう。ありがたいことである。



西尾 葉選

美祿市

安平次 弘道

さて気がかりは香川家の犬と猫

堺市 高橋 千万子

知恵の輪がとけない父で雑兵で
峰打ちの慈悲へ男は墮落する

適材適所不満は持たぬ枕木で

胃袋を満たすと思はけてくる

秒針が進む地球よ廻らねば

眼をそらしていて真実が語れるか

自動ドアためらう客へためらわず

愛よりも金に傾くヤジロペー

松原市

谷 垣 史 好

乱気流君は魅力ありすぎる

町内に仏が一人鬼一人

尻尾つかまえたぞ おや胴がない

五百円の寄附で勿体なや氏子

ゼムピンも箱に入ればからみ合い

悔いありとすれば今年は海を見ず

鼻の向うに水平線がある昼寝

人格もバツジも今夜は裏返し

和歌山市

西山 幸

妥協した日から続いている微熱

モザイクの一片ずつの合言葉

髪を切る痛みを誰のせいにしよう

朝夕の鏡へかける自己暗示

鉄瓶のさむいジョークを聞いている

衆目のなかの確かな眼の怖さ

穂芒も運命論を持っている

八尾市 宮西弥生

かけ込み寺男が泣きに來るところ
柿落ちて男も女も里ごころ

1DKで松茸たべている誤算

涙して愛の讃歌を聴くも秋

サンマ焼くわたしに貞女らしきもの

秋の実のひとつに約束を果たす

銭湯で出会った情だから温い

岸和田市 高橋操子

老人にされ度くはなし杖が要り

チャンネルを国会にしておばあちゃん

中曾根さんのおしゃれエンジの胸ポケット

調子よい返事で二男笑わせる

空振りのバットへつなぐ明日の夢

夢を抱く老いにむなしさよぎる秋

桜井市 岩本雀踊子

勇退という名で首になりました

借り傘を干す豊かさが妻にある

即答をさける男の洗面器

人形になる女に悲しい鳩時計

足音をすかす闇にある深さ

相談が小声になってくる怖さ

八尾市 高杉鬼遊

酔々を待っても来ない忘年会

弱中強郵便局の老眼鏡
妻と子と嫁もつながる烏瓜

秋の山妻もち帰るもの多し

夫婦とは支え合わねば砂の上

老残に何を慌てる十二月

倉敷市 野田素身郎

教育的配慮とやらで甘えさせ

曼珠沙華こんな道まで舗装され

名月の句はできたが夜になって雨

ワイングラス持つ妻の指とみに荒れ

演歌の世界から出て来たような作業長

タイガース狂のホステスが居てのめり込み

大阪府 川口弘生

生姜糖五十鈴の川の半世紀

食文化お好み焼も変遷し

本能は悲しカマキリの身構える

中堅に白髪が目立つ交代期

原爆鳥居一本足でやがて冬

姿見にただ漂漾と秋の雲

米子市 八木千代

母の褓もう力むなよ割れるなよ

寂しくてすこし濁る豆腐汁

バラソルをたたんで秋の眉となる

不用意に刻んだ像に裁かれる

旅人を追うてほとけは風になる

芒野を月には本場と決めて出る
大阪府 中川滋雀

コンパスを広げて自我を丸くする

生きのびた蠅もありけり十二月
カレンター単衣になって悔いが無い
家系から妻が先立つ恐ろしさ
地下鉄を上ると思案になる音痴
ブラインド検査庁は窓明り

岡山県

時 末 一 灯

千鳥足ながら続編書くとする
損と知ることへ昂ぶり止らない
幾人の自分と出会い秋たける
制ガン剤夢も買われてタウあがる
偏屈もすじ金入りの爽やかさ
幸せか不幸か派手に爪を染め

岡山県

嘉 数 兆 代 賀

まっすぐに歩きつまずくことばかり
執念や三度転んで又歩く
さわやかに敗けて年齢など考えず
この判を押せば他人の風となる
真実はひとつ振り向いたりしない
土句う母で一生終りたし

伊丹市

榎 谷 寿 馬

何かを信じたくてじっと見るメザシ
灯明がゆらぐ信心揺らぐとき
母はきつとひじきを炊いて待っている
蛙の子は蛙と信ずるのはよそづ
募金箱人を信じる風をする
ひた走る信ずるものがなく走る

松原市 玉 置 重 人
生き字引意外にしぶいノドを持ち
万歩計今日のノルマがまだ足らぬ
ともだちの計報にリズム狂いだす
十二月何する人ぞ戎橋
十二月ノルマだんだん重くなる
十二月慌てはしない老夫婦

富田林市

岩 田 美 代

遠い日のやさしき浮ぶ秋灯下
耳鳴りに罪のひとつが貌を出す
友だちも善人の貌して鈴を振る
寄進してひびく御利益待っている
耳染まることもあり安らぎぬ
三泊の妻が戻って灯が明るい

米子市

林 瑞 枝

それなりに生きた私の曼陀羅絵
おぼろ夜の笛は天女を酔わせたい
お豆腐の好きな米寿の小町です
桐灰の匂い確かに母の冬
匂い袋から情熱を小出しする
水鏡女神うっとり世辞を聞く

島根県

堀 江 正 朗

掌の広さで新居見て廻り
正座してみんな知ってる顔もして
幸せな日は幸せを指に折り
あきらめていても音音の中

妻と子の引いたレールの幸に生き
雨の音ニュースのたぎに聞く恐さ

大阪市 津守柳伸

仕事追う女に金のはなしなど
どっちでもいい四十肩五十肩
働けるうちは生きてく恋愛論
釘打って不吉な予感抱いた秋
愚痴言わぬ女が日記つけている
あたためる片道切符秋のうた

吹田市 藤村メ女

あつて無いシルバースhirtというルール
別れても風の噂を気にかける
意見より母の涙を眩しくみ
なだらかな女の肩に秋匂う
坂道のドラマ峠に埋めておく
冷凍の鯛でも嬉し誕生日

大阪市 本間満津子

金色のスカート銀杏が踊り出す
うしろから来る足音に急かされる
澄んだ瞳に問われてすこしうろたえる
母の顔私の刻んだ皺もある
率直な返事が出ない胸算用
人の持つ慾全部持ち老けて居ず

竹原市 森井菁居

鬼の面剥ぐと優しい父の貌
土曜日を育ち盛りが振り回し

秘密持った日から酒量が増えはじめ
木枯しへ挑む四十路のど根性
僕だけの世界が広がる夜の底
踏まれても弱音は吐かぬ父の靴

和歌山市 浦野和子

弱気にはおなりでないと鱗雲
種を播くやさしい土のあるかぎり
首塚や血よりも赤き彼岸花
行列の中にわたしの貌が無い
歓声を反芻ばかりするピエロ
大根を洗うやさしい川の詩

和歌山市 福本英子

まだ出番来ぬ実印を抱いている
合せ鏡の死角で虫歯痛みだす
急いではならぬ師走の置時計
行きつけのお店を避ける暮れの街
避けている言葉をずばり聞く他人
病名を聞けば医学書めくりだし

和歌山市 松原寿子

黄の絵の具かなしみ少ししほり出す
青信号の視野をしずかに蝶の舞い
流れにはのれずに地味を押し通す
追い越さず生きていくさの壺を持ち
雨しきりなぜか愛しいやぶれ傘
発信地をまわれ右して翔ぶ噂

大阪市 西森花村

運命の重さに耐える二枚腰

気立てだけほめられ娘淋しがり
読書力立川文庫で鍛えてる

孫の守り孫は加減をしてくれず

ド忘れの老人焦らす受け答え

天守閣何処にも押入れ付いて居ず

藤井寺市

吉岡美房

どの薬きいたかわからぬまま癒る

Vサイン男をねらう罠がある

年輪を一ぱいつめて負けられぬ

遠まわりして木犀の香を見つけ

着任の微力ながらにある自信

戦友会俺だけ残る日のこわさ

島根県

堀江芳子

白杖になりきれなくて悔いばかり

おめでとうその感激をもらう幸

青畳匂うて心豊かなる

まだ馴れぬ夫へはらはらする新居

引越して空も澄みきる物干場

さよならは言わない逢う日また逢う日

寝屋川市

江口度

ひととこに集まるお金の悪いくせ

ローカル線ならんで走る月見草

古里の池を埋めると雨になる

天狗の鼻が自叙伝を書いている

まつたけの短い戦はじまりぬ

風呂洗う妻さかだちがうまくなる

平田市

久家代仕男

味噌を擗る時は確かな母の脇

学校も職場も弱者いじめ抜く

築地松欠けて櫛の歯抜けたよう

川風のひとりとなって野火を消す

翳のある人が好きよと慌てさせ

添寝する乳房豊かな母の海

八尾市

大路美幸

酔々の電話今夜もかからない

忽然と消えた星あり秋深む

やさしさを秋の夕焼けから貰う

新しい考えはない雨やどり

ロボットのようにな田中手を上げる

父の修羅母の情けが嫁にゆく

八尾市

飯田悦郎

時計屋の主人律儀と思わない

昼下り小雨が誘うのか眠気

持ち家の幸福遠くなる市場

突き放す勇気がなくて子を背負う

赤信号無視して恋の曼珠沙華

人妻と変な話をして別れ

八尾市

納糸葉

新築の灯りへ通夜の客として

友達のその友達も泡立ち草

私で糸図の切れる血の薄さ

噂から噂へ炎高くなる

狂いたい狂いたくない帯の芯
軽はずみな女を論す秋の雨

八尾市 高橋 夕花

絆とや妻も夫も入院す

姿見の中に女の冬がある

やさしさに負けた紅茶が醒めている

散ってゆく花よあなたは倅せか

伏目がちに私の秋が去ってゆく

女ひとり煮込みうどんにする夕食

呉市 林野 甦光

小走りに街の趣向も冬の風

庭の花愛でる茶菓子置いてある

わらべ唄聞きたく電車北を向く

糞虫の揺れてる天地当にせず

かんざしの菊が女将を若うする

汽車の止まらぬ駅で女がくだを巻き

倉敷市 稲田 豊作

喋りたいだけ喋らして馬の耳

男だつたらなアと腕を組む女

結婚は自由の抛棄ということか

少女の目母のおんなを盗見する

話合いやはりお金が突き刺さり

抜けられぬ迷路で亡父のみちしるべ

大阪市 天正 千梢

「かまえる」から余計な所に力入りすぎ

彼岸花熟年の恋をもてあまし

過保護の湯船で酔うている眼

条件つけて立派なコース出来上がり

「どうせのたれ死にさ」と恰好つけている

だんだんに山近くなり旅はずむ

桜井市 河合 茂雄

拓いたら拓いた通りの道になる

明日はもう泣かずに暮らす夢を追う

評論は渦の外から見ても喋舌る

残り火があるから白髪染め変える

富士山の裏を見て来たひとり旅

生きるのに理屈はいらぬめしを食う

兵庫県 辻 文平

追伸の涙なんぞに騙されぬ

赤い緒の下駄の歩幅にある演技

綾取りに心の傷を癒やされる

つまずいた石の重さに泣く示談

己惚れがあるから狂い出す定規

ここまでは許せる線で終る愛

西宮市 杉浦 婦美子

不渡りになるかも知れぬ愛である

法善寺ぬくい情話がまだ残る

駄菓子屋で幼な心を三つ買う

三代目嗣ぐ根性がもの足らず

聞き捨てにならぬ言葉もでた酒席

煩惱を消すスイッチが見当らぬ

高石市 牛尾 緑 良

自分にはいつもやさしい砂時計
避けきれぬ明日へひとつの石を積む

核心を避ける女の言葉尻

友情の皺を伸ばしにゆくハガキ

一滴の血で計られている余生

手の内を見せると逃げてゆく仲間

出雲市 板垣 夢 醉

待てども給料日がない退職者

末期の水さえカルキ臭し都市砂ばく

漬物の重石風味へ力貸す

迷惑な好きだといやな人が言う

無理押しをすれば六法ものをいい

ノーという返事もあって恋告げぬ

浜田市 中川 幸 一

元予科練孫と遊んでいる平和

反戦を非国民とは言うまいな

倒産の噂ちらほら秋の風

買う気はないがちよつと気になるアデランス

物忘れ呆けの始めの哀しさよ

士農工商嘘をつくから下座にいる

大阪市 中西 兼治郎

握っても女の拳たかが知れ

元のさやなどと浮気が帰つて来

女より男びっくりする妊娠

大阪でびわ湖の汚れ心配し

愛情の渴きつっぱり子が育ち
祭見る外人さんは写される

交野市 山本 テルミ

ほおずきを鳴らして嫁も若くなる

忠実に鳴って目覚し叱られる

出まかせの童話で孫のいい寝顔

荷造りの紐へ父親の几帳面

孫見つけそうなどこへかくれんば

汗拭いてひとまず仁王さん仰ぎ

大阪市 岡田 ふ み

孫の婚色留袖の彩を選ぶ

天気予報信じる夫で真面目すぎ

宇治川原木の葉落しの燕見る

飴一つ舐めても肥えるかと思ひ

共通一次厳しい冬がやってくる

やっと見つけた止り木にさえ刺がある

西宮市 藤村 宏 子

わだかまりグラスに指紋ついたまま

オルゴール秋の想いを秘めて鳴る

流れ弾初心すこうしぐらついて

お互いの本音はいわぬ栗のいが

好意みな裏目に出てる細い道

恋のうた金平糖は幼なすぎ

寝屋川市 柴田 英壬子

器量よい新米炊いて弾むもの

サラ金とエアロビスクの有卦の顔

ふさぎ虫五歳は老けている鏡
ふさぎ虫お退きご主人かえりはる
よい肌の大根土井勝に掛かり
反響をすぐ知りたがるボランティア

藤井寺市

児島与呂志

新春を待つ娘二人はまだ嫁かず
嘘ついて男はすぐに忘れとく
来年の事に気疲れなどしない
一日を追いかけられてる妻が良い
妻案じ娘を心配してるとは見えず
悩むこと止めると幸せ逃げそうで

兵庫県

遠山可住

恩給でお茶など点てるメドがつき
まだましな方で別居に得心し
頂点に一つしかない優勝旗
コンピュータに叱られソロバンやり直し
頼もしい孫でお金の音が好き

柳井市

弘津柳慶

反対の火花散らして多数決
スーパ―が近くに出来て消費ぐせ
罰金ヘネズミ取りを悪く言い
別居して六法全書繰って見る
不況風再起の策を練りなおし

島根県

小砂白汀

冬空へ落書きしている風の糸
ジエンドをいくらか延ばす竹を踏む

カリカチュア防弾チョッキの裏側に
逃げ腰でフェンシングは跳ねまわり
悠然と子のゆきぶりを受け流し

高槻市

傍島静馬

木犀のにおいにジョギング迂回する
カレンダー印したまま忘れてる
大風呂敷いまさら引込みつかずなり
芯の細い男をばろ口素通りし
懺悔録書いても書いても切りがない

倉吉市

奥谷弘朗

えらそうに見せる無口の裏がばれ
ご意見がまっすぐ過ぎて煙がられ
満腹の鳩は雀に餌を取られ
パパ役所子は保育園ママテニス
下積を妻の笑顔に励まされ

下関市

国弘半休門

音たてて改札掛の空鋏
暴力の縄張りピストルをかくし持つ
行動の美学へ秋の娘等跳ねる
ロボット化人員整理の紐をひく
倫理学苦手なこともやりたまえ

鳥取県

鈴木村諷子

食卓で茄子ひと色の陣を取り
居酒屋に日銭の端をおいて来る
先祖の遺産で家を建てたが何ぞいや
花を売るくるまに娘乗せて来る

電線の稲雀誰が号令かけたやら

米子市

小西雄々

離れまで建てたに同居してくれず

同居して一つの風船ふくらます

隙間風位は気にせぬ夫婦舟

理想とは逆に目減りする暮し

年上の女と虚構の橋渡る

出雲市

原独仙

忍従の美德外人不思議がり

縁談はとんとん拍子木犀匂う部屋

尼氏の祝賀句会(三句)

大阪弁双手に受けて久し振り

晩年の路郎師に似て緑之助

大会を果たし目覚めが午前九時

松江市

恒松叮紅

少年Aの心に宿る秋祭り

廃線の運命に炎える曼珠沙華

白寿まで生きる気迫の爪を切る

無差別の弾怨念の北の海

倫理地に墮ち金権が大手振る

松江市

小林孤呂二

あかね雲あそび足りない子等が居る

政治家には軽井沢があり箱根あり

コレクトコール使い生きている知らせ

だから凡夫大地をせまく生きたがる

妻と娘の血はだませないほど笑う

松江市 柳楽鶴丸

昔なら停年ですメザシ焼く

余裕が出来ると罨が見えて来る

僕のページをめくってくれる娘が二人

妻曰く夫は大きな子供です

日本列島大きな不発弾

松江市 舟木与根一

俺の血が流れる息子と衝突し

温泉の効き目も入れるフルムーン

民謡の宝庫貧しい歴史持つ

世の中へ地団駄踏んでいるディスコ

名刹の落葉悟りが開けそう

竹原市 小島蘭幸

動物園の広さ二人の子を放つ

古いレコードばかり聞いているひとりの秋

仏さん昨日の夜は飲んでいた

結婚式と葬式結婚式へ行く

哀しくて父の笑顔はもう見ない

京都市 松川杜的

算術の答のようにには出ぬも義理

三時間の生命に悔いなし月下美人草

アルペンの旅に

旅立ちの朝まで妻の洗濯機

黒四の映画黒四の宿で見る

今聞いた山の名前をもう忘れ

富田林市 和田維久子

相槌を打つとこちらが負けになる
紅い糸ではほころびを縫えぬかも
遠くなる人へ書きたい絵封筒
言いたいこと明日の胸の中で言う
降りて見たい駅で迷っている女

鳥取県

川崎 秋女

大匙いっぱい愛を盛付けている夕餉
静座する膝から光見えて来る

この笑顔見たくてくぐる修羅の門
内緒ごとすこし持っいい夫婦
明かされぬ話がひとつ母娘住む

豊田県

安藤 寿美子

自己主張女はだまってふくれてる
自分でも可愛くないとわかつてる
木犀や秋はかなしいものと知り
欠け茶碗わたしが悪いんとちやう
内へ内へ自分を捲いて行くも秋

諫早市

原田 明春

妻の前電話すげのう切るつらさ
ホステスを誘えば条件先に聞き
トイレの長さ案ずるのも夫婦
寝台車「気をつけ」のまま寝かされる
俺を無視して女房と娘は話し

鳥取市

小林 由多香

定年へまだまだやれる日を刻む
漁火と地酒に旅をいたわられ

米の味賽銭箱も知っている
三浪の合格家中踊らせる
戦盲へ突撃ラッパ鳴る夢も

東大阪府

斉藤 三十四

戦友会爺チャン除州で帰って来
角栄の皮は千枚張りらしい
次の世も夫婦になろうねと妻が
人生の余白は正論もっている
孝行という修身科は見当らず

鳥取県

清水 一保

大往生したカマキリの死がきれい
置き去りにされそう今日もする自転
其の馬鹿の中の一人の僕を見る
日めくりをめくってドラマ一つ消え
古くともよし孝行の二字を選ぶ

京都市

都倉 求芽

熱い茶がおいしい湯呑みに換える秋
低く低く鳥が舞うて墓初冬
磨かれておのれに戻る姫鏡
地球まだ熟年でない三宅島
定年のもう逆さまにせぬ砂時計

奈良市

森田 カズエ

浪曲をギターでこなすコメディアン
遺失物係も拝むお骨壺
二人だけになると厳しい妻の顔
百聞は一見に如く秘宝展

月とすっぱんのちがいだなんてむごいこと

奈良市 宮口 笛生

冬型の気圧配置に秋せわし

丹精の菊へ明るい空が澄み

月二斗米食う猫の数を飼ひ

酒うまし胃も肝臓も異状無く

決着がついて男はのみに行く

奈良県 村上 春巳

又今日も残業でつかとラーメン屋

たわいない話背に聞く満員車

発車ベルいつも一人が駆けて来る

むきになるだからゴキブリ馬鹿にする

法隆寺枯野を走る雲がある

岡山県 直原 七面山

抱きつけば女は火

句碑訪えば亡師のお声

啄木の涙を吸いし浜の砂

試歩一步一步に男の意地を見せ

思い切り派手なネクタイ締めて老い

倉敷市 小幡 里風

木屋が鼻をくすぐる四季巡る

松茸の匂は嗅いだと自慢する

足音を殺して派手な猫の恋

台風が腕をまくってやってくる

ソロバンを弾き返して妥協する

綾瀬市 大山 と金

銀杏のなる樹ただ一本並木道

座ってる者は眠ってる通勤車

独断と我見ばかりの話すき

抱きしめてやりたいほどの素直さよ

歴然と仏は在ます神の留守

岸和田市 植山 武助

老夫婦今日の漬物よく漬り

老妻の無口へしやべりたい無口

ドラマにはならぬ私幸せかも知れぬ

マッサージナツメロテープ聞き乍ら

ジーンズに若さ求めている五十路

貝塚市 行天 千代

樟脳がほのかに匂う初給せ

痛む手に良く効く注射の副作用

誕生日かわいい松茸買って来る

裏切りの風が背中で泣いている

過ぎし日の夢を抱いて今日を生き

島根県 西村 早苗

カレンダーのここ逢引きというチエック

下戸あわれビールのをばで飲むジューズ

五つ六つ派手に着て見る寡婦の柄

学歴を自負縁談に遠く生き

語り合う笑顔敵視を腹にもつ

呉市 楨田 英詩

難聴へ星がひかつて語りかけ

流れ星宇宙の落伍者かもしれぬ

想い出の火を恋う老母の火消壺

俄雨男は潔ぎよく濡れろ

間違つても酒はやめない友が減る

神戸市

仲 どんたく

木犀に女の影の添うごとく

戒名へ話しかけても寡婦の秋

破調の詩歌うマグマへ島爛る

敬老日去年は歌うていた位牌

逝くという仕事のほかはみんな済み

守口市

羽 原 静 歩

キャプセルの中で葬めく幼稚園

春夏秋冬宮城まり子の子どもたち

パチンコの穴の数ほど愚痴があり

コーヒーの中に約手が沈んでる

会者定離リングの皮を剥きながら

大阪市

河 井 庸 佑

控えめな言葉を真に受け白を持つ

親を見てこの縁談はと考える

出しゃばりがおつて会議は回り出し

押し返す秘策があつて一步退き

最終の昇進勇退は同じ椅子

今治市

越 智 一 水

看護婦に冗談が言え回復期

春泥の汚れも女嬉しがり

春泥へ女が迷わない歩幅

女心ゆれてる水へまたゆれる

ふる里で縊が戻つたまつりの灯

等岡市

松 本 忠 三

雑談で終る会議に飯が出る

労力の奉仕を金で肩がわり

紫を着こなす女をふりかえり

踏台にされても友を恨まない

横槍を正面きつて突いてくる

島根県

榑 原 秀 子

強がりを知るか知らずか土踏ます

ラフカディオハーンの六十回忌へそそぐ雨

楽茶碗なでて豊かさを貰う

貼り替えてみればたのしいことばかり

ちり紙交換歌で来るもの喋るもの

島根県

錦 織 文 子

表札に生きる意欲がかけてある

堪忍袋をまた縫うている姑で

そう言われるとだんだん善人に見えて来る

今更などと伴せつかみたいのも女

赤だすき女の素顔が染めてある

島根県

大 森 孝 華

潮時へ遺産相続練つて見る

積み木積む日々の重味へ生きて母

農に生く親子の対話鍬光る

情熱を賭けた打算の裏話

素晴しい本場の味よ夫婦箸

島根県

榑 みどり

パズルとけ余生にあわい夢ひらく
本場大島祖母 母 孫へとゆずりうけ

よりそって生きる門出の角かくし

彼岸客噂をのせる膳の上

りんどうの紫秋の使者となる

香川県 岡田 拳法

降伏もよしとは社党無責任

俺たちを守る気がない非武装論

核廃棄しても平和だとは言えず

識別は強いが弱いかなだけソ連

信じられぬまさかまたかのソ連では

岡山市 川端 柳子

その先は風にまかせて眠ろうよ

無事済んだ橋を渡ろう十二月

向い風人の心が見えてくる

真心のひそむ怒声のありがたし

自信まだいざという時馬鹿力

大東市 土岐 トク子

念願の二重橋を背にハイポーズ

秋ですネ日射しやわらか老夫婦

いのち溢れ日々幸せの聖書手に

外人さんオゲンキデスカ How are you

敬老の娘と息子にもてなされ

仙台市 川村 映輝

やる気充分朝一番のバスに乗る

要領がよくて責任者になれず

東大を出てサラ金の取立屋

部屋割りにいびき一人をもてあまし

非武装に台風恣意のまま暴れ

倉吉市 渡辺 独歩

ロボットにホームシックと言う或る日

もの思う秋に言葉はいらぬもの

コスモスの好きな男に豆腐買う

目に余る男に遮断機潜らそう

彼岸花男鰥夫に内緒する

鳥取県 森田 布堂

服装の自由女性化し男性化し

店舗拡張それから客が減りはじめ

銀行に目潰しという新兵器

そんなにポンポン言わんとときで仲直り

万引を見張る鏡のふしあわせ

和歌山市 内芝 登志代

秋くれば秋の着物のあたたかさ

人生の午後へふたりの歩を揃え

金持たぬ夫婦がいちばん朗らかで

白寿への夢をつないだ顔の艶

末っ娘もおしめ干す手が母である

米子市 石垣 花子

金婚のお粥の味に近くなり

日の丸をたてる仲間がまだ残り

心臓を動かすだけの匙加減

強運のチャンスへ風も味方する

棒グラフ追いかけて来る月の末

玉野市 小谷仙山

余生まだ柿の苗木を買って来る

無いと言えは無い神様に助けられ

金の事になって心が風邪を引き

影法師沼に沈んで秋が来る

泣けば済むそんな渚は許せない

神戸市 中村ゆきを

だぶだぶのサンタはしゃいで知恵おくれ

木枯らしへ老犬ゆっくり立ち上り

年の瀬や妻子を背負うピエロの眼

踏切を渡ると我が街ぼくの影

十二月あつさり人を裏切りぬ

大田市 藤田軒太楼

さりげない話に無心句わせる

ごね徳と言う強引な徳もあり

同居した当座は円満らしく見え

古稀を生き街の善意に涙する

遺産とは名ばかり思わぬ負債額

大阪市 江城修史

九月十五日恩師逝く(二句)

再会の約束空し古都の秋

面影は生きて心の中に住む

生きる掌の十指に余る願ひごと

福耳の相もち幸せうすき妻

忍従のすべなき妻の瞳がきれい

子等にどう報らせよう妻の熱
和歌山市 若宮武雄

思わぬ妻と信じていた不覚

妻の熱下って気付く鉢の水

妻病んでさっぱりわややで明け暮れる

争いを避けて負け犬とも言われ

岸和田市 福浦勝晴

政界のアラを肴に飲む屋台

みそ汁の醍醐味入れ歯で物足らず

老人を立たせて漫画読むヤング

核論議熾烈のんびり秋の魚

呼び方を変えても所詮ボケはボケ

大阪市 神夏磯道子

義妹逝く

若死が一入悲し髪艶

ガン細胞つかみ出したい腹さず

種子溢れ一年草は子知らず

秘しきれぬ性ふくろがすぐ破れ

欲捨てて尾花の揺れにのつてみる

京都市 山本規不風

オーストラリアの旅

キャブテンクツク現れそんな生家訪う

シドニーの名月に逢う船の宴

シドニーのときめきに逢う京の女

触れば語る語れば深くなる情け

握手した掌を離さないカンガル―

宇部市

平田実男

檀山の駅とも知らずまだはしゃぎ

本当の氣くばり痛いところも突き

特級も二級も同じ舌でよし

お祭りを日曜にかえた神の愚痴

ワースト線駅員あくびをうつし合い

大阪市

西出楓楽

アンテナは明日へ向けて立てておく

やせる本あるけど肥える本がない

十二月わたしは軽い失語症

充電と称しなまけておくことに

十二月欲しいと思う十二月

兵庫県

大江秋月

内職も忙しいけど立話

人間は良いが内緒は言えぬ人

有りふれた顔一時間化粧して

体重計孫が日付けと共に増え

救急車着いて病舎の窓も開き

倉敷市

藤井春日

やるせなく水割り飲んでる細い肩

つまずいて近道歩いた愚を悟り

心配無用吾が子は器用に生きて行く

社宅族課長夫人が一人居り

敬老の日の親切の淋しくて

堺市

大道美乙女

窓により遠い記憶の虹をあむ

飾るだけ飾っておんな自閉症

忍従の母が渡ったおんな橋

一坪へ夢咲かせてる老いの趣味

口紅をふいておんなの小休止

松江市

梅本登美也

悩みある人を拾った占い師

嫌われているとゴキブリ知っている

抱き上げた母の軽さの骨が鳴る

OKと返事して切るいい電話

妻ふっと思いつき過ぎだとも思

守口市

野呂右近

電気代残暑のつけが来た初冬

大切な時季もあったに粗大ゴミ

妻不在爪楊枝さえ見当らず

余生とは思いたくない尊い日

老眼へさす目薬も冬の冷え

大阪市

北勝美

石橋を叩き過ぎかも平和論

町が街に変わって人情薄くなり

皺の手が今日もパートの袋詰め

箒目が心を洗う寺の庭

頬かむりされる箒の不仕合せ

大阪市

藤田頂留子

まっすぐな道など無理な日本地図

変りなしめくり忘れたカレンダー

プレゼントセールににわクリスチャン

毛皮ショー旦那ほとんど甲斐性なし
十二月のために働いたよな月日

松原市

北野久子

待っていた秋は哀しい事ばかり

菊植える夫も折れたなと思う

よく見るとビリで走る子うちの孫

残り物食べる嫁との壁はない

イヤリング付けても此の耳死んでいる

鳥取県

林露杖

毛糸玉ころり転がり童歌

ふるさとや心の恥部を濯ぐとこ

人生の裏を見すぎた眼の渴き

張りつめるものなく老いの十二月

実刑は建前保釈で散歩する

新宮市

川上溪水

悪友が手みやげ持って来た不安

儲かって敵も味方も増えてくる

さがされる顔でかくれるかくれんぼ

役一つ終って一つ老いてくる

結局は我が身可愛い十二月

高知県

松岡三吉

下町のなさが通う勝手口

怖いものの一つになった空の旅

袋ごともらって夫にない不信

どう言えば許してくれるお月さま

誰よりも遠く嫁いだ子のやさし

秋の風不調和音をつれてくる

想出があつてコースを変える旅

赤い羽根皆善人の顔をする

美しい想い出だけは取っておく

墓参り小さい悔いを一つ抱き

東大阪市

崎山美子

花街の朝はむなし風音

シャボン玉やさしい風とたわまれる

伝説をひとつ土産に旅を終え

伝説がひそと生きてる過疎の村

戻らない愛だと風の噂では

羽咋市

三宅ろ亭

遅い雲速い雲あり秋淀む

リーダーの合図か鵜群さつと退く

良心の疼きに堪えず仰ぐ雲

僥倖を当てにしている今朝の靴

一杯の盃が知る今日のこと

和泉市

西岡洛醉

着実な今日秋晴れの胸に住む

堅実な牛歩を積んで善の日々

電話口内緒話が洩れている

生命線今日も伸びて天高し

吉日を走って見ようか子と孫と

米子市

桑原伊都

運動会賞にもれるも親に似て

つゆ草の藍を信じてかたつむり

まがり角のお肌で縁もせかされる

廻り道もある檜山の地図を買う

満月の森へ小びとは誘い合う

米子市

雑賀美世

暗やみで確かに聞いた亡夫の鈴

菊薫る今日の誓いをいつまでも

肩寄せて仲間が眠るおもちゃ箱

限られた命を生きるしつけ糸

老母の舟運命と知って波に揺れ

米子市

菅井とも子

情熱を溜めて出番を待っている

礼服を着て幸せを分かちあう

動いている大地科学を信じよう

生きざまを子等が見ていて振り向けぬ

鬼ごっこ追われて萩が散っている

米子市

野坂なみ

三本の矢よがっちりと手をつなごう

大草原の仲間たちにもある綻

ゆきひらの余熱に粥のまろやかさ

杖ついた人へ言葉がまるくなる

髪二本秋の畳に落ちている

米子市

青戸田鶴

一樹一樹たどって海が近くなる

冬の音まっさきに母ききつける

消え去った地図に消えない灯がひとつ

財産と云うではないが墓地を買う
束ね髪亡母の背からぬけられぬ

米子市

政岡日枝子

ハングリーな絵だから答は複数で

愚痴を聞く壺の病いがなおらない

鬼の子も母には無理を言うてみる

月の夜は亡父に逢えそな母子舟

満天の星が重たい村八分

米子市

寺沢みど里

残されたインコ一羽の朝を鳴く

知恵の輪をとけば仲間が増えそうで

目標を天にあずけた杉木立

おだやかな犬で押売りにも鳴かぬ

表札の裏から亡父が抜け出せぬ

米子市

田中亜弥

ちちははの願いの数の砂の数

山と積む薪に険しい冬の音

なだらかな砂へぼっかり落とし穴

平凡に暮し妻の座くずさない

荒波をともに母子強うなり

福岡県

横地雅風

浄め水蛇口の文化が味気ない

くもの巣が西陽に光るローカル線

宿借りのとんぼを放つ朝の窓

長生きをしなくちゃ田舎の無駄時間

柵などは要らぬ田舎の大広間

唐津市 久保正敏

混浴の湯気半盲となる眼鏡

パトロンをかえて預金に手をつけず

媾曳は出来ぬ廊下の二条城

長生きで廻し続ける走馬灯

すらすらと読めば値打のない弔辞

唐津市 浜本義美

聞き飽いて見飽いた顔の妻とい

飲めるだけ飲んで臓腑のストに会

無為無策六十路の秋を持て余し

待つ母が亡くてふるさと遠くなり

出稼ぎの父を待ってる田の稔り

唐津市 浜本久仁於

ゆびきりの嘘を信じた子が眠り

さよならが素直に言えて秋深む

嫁が来て娘がきて城の姦しさ

子の受験邪魔な灯りは消してゆき

曳山が済めば夕陽も落ちてゆく(唐津くち曳山)

唐津市 木塚素石

入念に粧う時を夫の咳

腹立たしばかり落ちつく救急車

校長が負けてやったのへボ将棋

連れ合いを亡くした彼の背の曲がり

金切れ目さんまの煙味あわん

唐津市 仁部四郎

病床の妻へ秘密を分けてやり

病床の妻アラジンの灯をつける

例えばが多く結論消えていき

ことわざにくわしい人のムダ話

教員の帰宅が記事になる恐怖

唐津市 田口虹汀

褒められて今朝もうれしい茄子の色

僕ん家にや金はないけど父がいる

イヤリング保母も女であるしるし

妻がいる只それ丈の事なれど

浄玻璃の鏡に嘘が大写し

町田市 竹内紫鏑

音楽の解説永き声が錆び

日焼けして都の公園をハシゴする

齢を感じさせぬとほめて後続車

悠々自適する兄弟の無沙汰かな

弟子ありて墓地に貸切バスが着く

神戸市 山口美穂

きれいな嘘ききたい小さなイヤリング

束の間のしあわせワイングラスおく

紅葉を散らす雨わたしの心にも

しあわせの余韻テールライトが遠ざかる

到来の松茸思案をめぐらせて

七尾市 松高秀峰

一枚のハガキで夢を見るクイズ

五十過ぎ父の三猿思い出し

顔よりも心の嫁にいじめられ

他人より憎しみ合うも反抗期
医院出てゲートボールして帰り

大阪市 長谷川 春 蘭

故郷の祭り笛から亡母憶う
茶柱で今日の暗示を喜ばせ
失せ物が深すともなく出た不思議
二枚舌使えぬままの純朴さ
宝くじ若しやよもやで欲にぼけ

吹田市 西 川 景 子

いいところばっかし見せて逝つたひと
雨に立つ煙見守る六地藏
泣けるだけ泣いて落とした目のうろこ
追憶と夕陽に染まるえりの湖
仕事の鬼はつとする時孤独なり

大阪市 黒 田 真 砂

強がりを言つて女の独り酒
亡父の咳未だ耳にあり一周忌
強がりの最後は金のいる話
ゆるされて心のひびき取りもどす
実力の差を見せられた日のあせり

鳥取県 森 田 熊 生

腹立てて出た秋風に意見され
弁解の弁解うそがばれてくる
うそ一つ心のすみに置く別れ
雑念を捨てて紙すく瞳がきれい
古々米になるとも知らぬ稲の出来

木犀の一途男を弱くする

西宮市 林 はつ 絵

疑いの視線も受ける善意の掌
固いことは言わない鼻丸し
切り札を出さずにすんだ茶の香り
マンシヨンの秋はさんまの臭いせず

西宮市 妹 尾 春 江

虫すだく過疎のこだまが消えていく
遠ざかる人を見送る傘しずく
寄り添える夫あり旅の景も佳し
一芸に秀でてうすい人間味
もつれ糸女の意地が崩れそう

寝屋川市 稲 葉 冬 葉

祖母が来て秋の夜長に弾む声
詐欺師からもらう言葉は私の計
信じてた風は気儘な人が好き
叱られるつもりのお話器握ってる
目には眼ともぐら叩きに興じてる

岸和田市 島 崎 富志子

おだてられうつかり本音も出てしまい
ジャンボくじ夢が一夜で消えて行く
ピラミッド スフィックスよと夫の旅
鍵かけて尚も不安と共にいる
テレビからいらざる知識得てしまい

岸和田市 原 さよ子

雄大な山並みこも日本なり

抄らぬ夜なべへ虫の声が冴え
お祭り寄付はちよっぴりはずんどく
うっかりと教師口調がでてしまふ
愛犬へ心を開く自閉症

岸和田市

清野こう

子の意見聞いて再婚考える
二人目に同居の姑の有難さ
調子よい言葉に乗った日の不覚
クラス会に誘う電話の国訛り
アンカーの吾が子に母の力こぶ

岸和田市

古野ひで

中国旅行(四句)

機上から一日遅れの月見する
夕映の北京に何故か胸疼き
恩讐を越えてふれあう手の温さ
群峰のそれぞれ生きる美しさ
花嫁の父の涙は愛の彩

岸和田市

吉水照江

家族とのふれ合いのない世の変り
お月さま今年もタンゴ食べられず
根性で生きて根性は捨てられず
山噴火それでも村は捨て切れず
雨風の日には渡れない歩道橋

和歌山市

堀端三男

秋深し個展の梯子して帰る
易少しかじって女まだ嫁かず

残り香に振り向いて見る擦れ違い
フィナーレはどうあれ今を大事にす
気分屋と言わず名人気質とか

和泉市

岡井やすお

規矩準繩破られる為にあるらしい
年金で酒やめ医療費で煙草やめ
大国になって悪者多くなり
警官の拳銃どっち向いて撃つ
車置くためか公道の白い線

兵庫県

藤後実男

ネックレスやせた鎖骨へぶらさがり
入れ墨が祭囃子をかきたてる
罪残し女素顔の始発駅
年輪の家風に染まる嫁がおり
幹線に乗り換えてゆく気のあせり

大阪市

欄蘭

古里で余生の柳友がうらやまし(雅風氏)
黙禱が済めば十二時震災忌
御時世は長寿日本築き上げ
小言だけ人には負けず病んで居る
拾い屋はりやカー一台持つて居る

富田林市

中村優

候文恋の炎の母の文字
ふる里のお墓で燃えるまんじゆしやげ
ハンカチを魔術のように持つ女
まだ世情鬼面のままの社会記事

掌の線へ素直になれぬ意地

富田林市 藤田 泰子

血の絆信じて公園墓地を購う

ありのまま好きで染めない白い髪
ハネムーン見送った日の夜の長さ
黄昏れて仕残したこと二つ三つ
乗り換えの切符一枚買っておく

出雲市 園山 多賀子

尼先生喜寿記念句会に因んで(三句)

花束の香りに融ける師の笑顔
キラリ光る師の感激を見逃さず
さよならの握手温かい人だと思ふ
秒読みのデジタル私の意に添わぬ
離婚歴女が女取り戻す

出雲市 吉岡 きみえ

日傘くるくる女のころ計りかね
腹八分自戒を破った秋の空
手弁当瘦せた夫の背を拝む
長い廊下年増女中にみちびかれ
脳軟化優等生の影哀れ

出雲市 石倉 芙佐子

チャンスまだ男は背負う命綱
大地から明日に賭ける虹は立つ
嫁姑生きる戦の果てしなさ
対角線の向うに消えた虹の橋
石仏理屈に合わぬ恋もする

岡山県 井上 柳五郎

柿八年やつと実った十年目
あがらないズボンのチャック肥馬の秋
酒が出て下戸御馳走の気にさされ
囑託の位置が薄給強いられる
身の上のその後も話す戦友会

大阪府 大野 武太

防災の頭巾家族の数をもつ
ヘルメット被ると背筋伸びてくる
欲しいものないかと老婆の市場竈
稼げない事情税務署サマに届け出す
申訳ないが赤字の申告書

倉吉市 野中 御前

うす味に馴らされ退院許される
別れるのが面白そうに週刊誌
葱坊主蝶の内緒は秘めておく
貝割れを洗う平和な朝がくる
生真面目な男の嘘にだまされる

和歌山県 天満 三千代

帰り待つ柱時計が慰める
投函がポトン淋しい音をたて
不意の客二本の手足うろたえる
丁重な言葉ではだかの電話口
結び目が解けない背なの児の重み

八尾市 山下 みつる

舞扇持つて老師は冴えて来る
土地太り二世は汗を知らぬまま

京都貴船にて

雨上りもやに浮かんだ貴船菊
鉄輪持つ女貴船で時参り

尼崎市 春城年代

酔々先生を悼む(二句)

おそすぎた出会に訣れが早過ぎる

台風の目の中で逢うある度胸

本心を言えは意外や四面楚歌

一期一会花と会う指みなやさし

あらたかなお不動さんも散歩道

浜田市 佐々木 裕

邪魔せずに若い夫婦の蔭に居る

標札に亡夫を残して操立て

スポンサー原価に入れるコマーシャル

見えすいた嘘に親馬鹿乗ってやる

カタカナの英語が並ぶコマーシャル

橿原市 岩井 本蔭棒

もの忘れ昔の事は憶えてる

逮捕また逮捕逮捕で今日も暮れ

土耕す身には不要な万歩計

稼ぐ尻からサラ金に持ってかれ

のりばまで送って行くと聞かぬ母

姫路市 大原 葉香

合掌をすれば背中がかゆうなり

柳禪一如十七文字にある命
順不同序列の影がひそんでる

車椅子同士語らい秋の天

日曜日面会人来ぬまま日の暮れる

枚方市 稲葉 星斗

車中にも読書が見えて秋来る

良縁の日も近づきて菊薫る

秋晴れに白菊買って立ち話

敬老会親しい顔がまた減った

大原女の手拭白し逢餅

枚方市 栗林 光夫

考えても考えても矛と盾

独房の壁は無実を知っている

尾頭が皿を溢れて秋刀魚焼け

まつすぐに降る雨だから憎めない

雇用保険貰う口惜しさ有難さ

大阪市 橋元 美恵

美しい女は涙を拭かぬもの

情熱が足りない髪が抜けてくる

遠い雲もくせい匂う思慕つのる

淋しい日老姑のたばこを喫ってみる

八卦目の家族の不幸を見てしまい

羽曳野市 佐野 白水

妻病臥今日から僕の味で出来

通院の妻の歩幅で付き添うて

完全主義がこんな病気になる診断

神經を抑える藥で昼眠る

おせっかいが瓢箪のこと教えに来

島根県

松本文子

振り向けばいくつもあつた水たまり

曇のち雨ざりげなく日記閉す

墓地を買う話が又も出ては消え

母の愛六〇円の暖かさ

塾通い一番星にそつば向く

西宮市

津山冬子

デートする歩幅を合わす嘘ひとつ

萩の風揺れてる其処に亡母が居る

安樂死したいと思う曼珠沙華

言い訳を持って訣れた雪の道

蛇口から一滴すつは母の詩

松原市

佐藤藤子

地下街を抜けて芭蕉の句碑と会う

故里の訛りに情けかけすぎる

千六本切の大根の母の味

熱演のテレビを前に栗をむく

一匹の蝶追いかけて迷い道

松原市

本多洋子

髪ひとすじ野菜サラダを淫にす

蛇口一杯あけてくやしさを流す

金木犀の薫りと指切りしておこう

むじなが言うあてこすりなら聞いてやろ

赤いスコップが一つ砂場も暮れました

大阪市

山根いつを

つっぱねて実のさき思う鳳仙花

連れ添うて日に日に惜しい陽が沈む

グラビヤの裸婦がまぶしい病み上り

おみくじも嘘言いなさる年の暮れ

はめられた手相はたいて除夜の鐘

大阪市

鈴木節子

無欲でも空の蒼さにはずみ出す

この舌が家族を満足させている

いつか心も体も小さくなってゆく齡

お世辞のなぐさめより言葉のない方がよい

お通じをバロメーターにして生きる

大阪市

杉本智慧子

始皇帝の偉さを偲ぶ兵馬俑

帆船が来る大阪にロマン来る

キンモクセイ村の祭の招待状

待ち合わせ心浮き浮き菊花展

親離れとつくに出来ていた乳房

河内長野市

井上喜酔

でしゃばりですぐに噂へ巻き込まれ

しきたりが祭りの言訳いやな顔

公園で時を忘れた孫の守

税務署に目を付けられた寺の苔

水苔へ別れを惜しむ夫婦鮎

高槻市

田崎あき子

二転三転女リアルに揺れ動く

実の入らぬ読書心の渴く日日
嫁強し最後は別居盾にして
プライドの高きを或る日持て余す
しおらしい顔に説教騙される

東大阪市

奥山 弥山人

伝統の火は絶やすまい黒子着る
おはやしの囀になった阿波おどり
転勤の紳士にあつたスキャンダル
雨やどり妻のバチンコつきはじめ
紳士にも方言が出る縄のれん

松江市

竹内 すみ子

大空に未だ許されぬ昼の月
縄をなう男の的は風の中
海の蒼空の青さを盗む秋
青空に吸われた父の古帽子
あの娘が欲しい人買船の主となる

豊中市

田中正坊

注連縄に貫禄示す大社（出雲路）
何つづるペンをかたどる記念塔（戦歿学徒記念塔）

ペンダコが支えた妻と二人の子
鍵かかる部屋で非行の芽が育ち
深海魚お前もそんなに憂うつか

尼崎市

西村 かすみ

おり紙の小さい指に夢がある
母の手を引く雑踏を憚らず
天使ではいられぬナース旗をふり

激論の相手がくれたタバコの火
半巾の帯に女の業を秘め

島根県

木村 はじめ

妻老いて悲しと思う吾も老い
寿命のび福祉は縮む秋淋し
ふとんの隅たたいて呉れる祖母達者
振り出しに戻れば慌てることなし
芸術の名にアッサリと下着脱ぐ

岸和田市

芳地 狸村

合掌をするとやさしさ湧いてくる
手のひらの厚さがくらし知っている
年金のくらしに妻も肩並べ
毛皮ショー女平和のあるくらし
欠点を個性で生かす美顔術

島根県

岸本 輝水

臥たきりの母の耳は起きている
光年の星が差し込む敬老日
トンネルに出口が見えぬ落ちこぼれ
人の目が消えると空缶がころげ出し
還暦をぬるい番茶の差し向い

米子市

澤田 千春

無我夢中生きてきづけば白い髪
かぎつ子の砂場へ夕陽仲間入り
亡母の樹に語って今日も安堵する
運動のあとさわやかな風に逢う
どこまでも仲間が続く蟻の列

西宮市 奥田 みつ子
物差しを変えると壁が低くなる

台風に姑気散じに昼寝する

大阪弁山手線でもよく喋り

草木染燃える心に秋を着る

壺に塩満たして秋の夜が更ける

和歌山県 富上 光代

貫けばわたし独りが停っていた

壊された夢捨て切れず持ち歩く

趣味豊か輝く余生送るとや

決つて腹はむやみと開かない

解ける日を待つて弁解口にせず

和歌山県 坂部 紀久子

生活のリズムを変えたためぐり逢い

鳴き止まぬこおろぎお前も眠れぬか

水虫の痒さへ電話上の空

癌らしい友へ友情のありつたけ

眠つてゐる時が一番正直だ

奈良県 宮川 古都路

酔々氏を悼む

浄土まで船がこぎ出す酒の海

裏鬼門忘れた頃に花が咲き

湿度計降る前ぶれが偏頭痛

五重の塔秋の影絵に陽はにぶく

まあまあと言っただけ言つてサツと逃げ

岡山県 岩道 博友

面白いニュースが取れたと決めて来る

伝統に光る古美術雨が洩り

義理にした返札らしい添え手紙

空白を用意して待つ友が居て

兵庫県 河原 みのる

冷戦の今度は深い海の底

白鳥よおまえは何ンにも知らんけど

作文の朗読国会飽きあきし

秋了る今度は猪が食われる身

兵庫県 梅谿庵 朝翁

晴姿やるのがおいしい我が娘

次の日を待つてますと指と指

サービスはお金次第とソツポ向き

君がやる僕も負けじとコッブ酒

倉吉市 渡辺 苦句

文学的孤独で遊ぶ素寒貧

小休止山へ紫煙を吹きつける

みたくない世をじつと見る蟬

耳ほどの月と内緒話する

鳥取県 金川 満春

山菜の味は矢張り祖母のもの

匙吹いて吹いて与える離乳食

若竹の伸びに似てほし孫五人

年上の家内よく舞う夫婦独楽

大阪府 坂口 公子

彼岸花明日を待てない色で咲き

美しく年をとりたい種子を播く
ライバルを避けてとつてる一人相撲
今聞く花を待てない切り鉄

尼崎市 奥山美智子

あたふたと大人が走る十二月
めし茶碗ぬくい絆に触れてくる
新婚のまぶしい愛に当てられる
アリの列わたしの入る隙がない

岡山市 行吉照路

灰皿に男のはけ口押しつける
赦免状地獄の鬼につき出され
秋茄子天とう虫がへばりつき
恍惚のバスポートには手をつけず

境港市 細木歳栄

霜柱直立不動で陽をむかえ
移転補償無縁仏に主ができ
大山を冬がじわじわ降りてくる
せんりようまんりよう植えて不況に立ち向い

大阪市 鍛原千里

倅せな朝はレモンの黄色から
黙々とただ黙々と古時計
無い袖を振って妻の土俵ぎわ
ポツカリと穴あけて子は巢立ち

島根県 石田清泉

粗大ゴミ出番はついに来ないまま
台本に無かった妻の背が曲り

寝た振りの妻の日課のメロドラマ
お隣の新築わが家を見下ろされ

島根県 松本はるみ

一本の花を選んで責められる
紅型に防人たちの血が混じり
オフサイド今日一日をもてあます
瞳をとじて口もつぐんでやりすこす

島根県 藤原鈴江

病室へ稍々身がまえて仲間入り(入院)
一刻を平和粧う病室の風
秋活けて花にいのちを託す夜
乱れんとする気を洗う秋の天

西宮市 西口いわゑ

夕焼けの雲に向って散歩する
くずの葉が風にゆれてる散歩道
スイッチオン今日のドラマの幕が開く
セコンドのこんなに大きい一人の夜

尼崎市 角野かず子

裏切った味方が見せた丸い背な
銀行の風船無欲な子がもらう
日曆に言葉をもらう朝の風
枯葉踏む音が別れを辛くする

尼崎市 伊藤春子

仲よしで思い思いの彩をもち
いたわりへ耐えた涙があふれだし
人生のスタートだった四畳半
その先が気になる本へ窓あかり

自選集

水粉千翁

腰伸せば平櫛田中さんが居り
曇り後晴れの笑顔を振り撒かん
一步二歩三步見上げる試歩の天
髪撫でてこころ嬉しき孫なるぞ
枯れてよし奔る願いの筆を持ち

金井文秋

晩年のリズムを想うアンダンテ
呆けるのを趣味で支えているつもり
マイペース捻子はいつもの通り巻く
酒断っておれば助かってたいのち

酔々氏を悼む

スィースイのさわやかな声もう聞けず

(前月分)

十数年歴史を戻す亡妻の夢

スマートで若くなつた夢の亡妻

夢の中会話たしかに亡妻の声

グータラママでよいから夢にまたおいで

極楽へ行つたか苦悩の陰もなし

市場没食子

妻も喜寿老人の日に金一封

娘の頃が嘘と思える程肥り

とてつもない席へ遅れて座らされ

茶碗蒸し師走も後が透けて来た

隆の里優勝

賜杯手に記録づくりの場所終る

新岡回天子

もう一つ笑ってくすくす川柳展

あの人にどきつとする句川柳展

どきつとする句もあり心臓川柳展

教えられる何かを胸に川柳展
ぐちやぐちやの頭も一瞬川柳展

月原宵明

よい腕をもって朝から酒がいり
潮騒のリズムに眠り深くなる
パチンコ屋悟りの顔となつて出る
ブラジャーの売場へ男迷い込み
古壺の私語をきく日の秋深し

本田恵二朗

愛の鞭大きな音ほど痛くない
表敬訪問だよと旧友ふいを衝く
さすがなり妥協のチャンス見逃さず
なにげなく風向き変える枝を持ち
方向音痴へ都会は迷路ばかりなり

黒川紫香

悲しさよ津和野の朝に聞く訃報
野外ミサ ハラハラ朝の葉が動く
たたずむところにも泳ぐ鯉の群れ
ここだけは稲成と書いた太鼓谷
静かさも勉強室にあるあかり

正本水客

(鷗外旧居)

上州の湯

ブナ林のなかに文字通り湖畔の湯
野天の湯新芽の萌える音を聞く
タヌキの宿の提灯がうれしい露天の湯
一番のぜいたく時を無駄にするお湯で
階段のしたに檜の湯が二つ

若柳潮花

道路鏡山は紅葉の彩に映え
雑踏をさけて相合橋で待ち
十六夜の月を呼び込む窓を開け
怨念の裂け目へ男落ちんとす
男郎花秋は裾から深くなる

尼緑之助

虫すだく生きる証しに秋深く
コンバインがたがた叫ぶコシヒカリ
変幻が多くて飛んだ流れ星
高原の大地に沙婆がいやになる
政局の裏で図太いけものみち

河村日満

悼 香川醉々君

酔々の呼名が下界までびびく

あがいてもベッドの幅の人形か

二時間の点滴へ出る腰の駄々

悠々自適の文字がおかしい十二月

言うもんやおまへん悔いを繰り返し

工藤甲吉

医療費の負担長寿の芯を止め

お隣はホクホクの月十二月

秋灯の下に集まる酒の虫

初霞石焼芋の笛が鳴る

気のついたときには馬鹿に大がつき

大矢十郎

面接へ切らしや良かった長い髪

パチンコのここでは見えぬ笑い顔

ストローの音四、五人に振り向かれ

争いへ理ありテレビを消しに立つ

宿命という坊さんの数珠の音

野村太茂津

振り返る回顧趣味ではない悟り

初めから遣りなおす気の貞繰る

割腹の作法は知らぬ方がよい

あの手には乗らぬこれから生地で舞う

幸せはまだ余白あり原稿紙

山内静水

命名の裏面に墨す祖父静水

限りなく幸せお乳の匂う孫だいて

掌のひらにはいるおつむの目鼻だち

鬼の手の中で仏の子の寝顔

正信偈妻との呼吸まだあわぬ

藤井明朗

実る秋ひとつひとつの荷が出来る

健康の献立対話の中の知恵

雑談の中に真実伏せて置く

内から外から油断のならぬ音がする

男と女上手なうそに酔うている

橘高薫風

生き方を青から赤に替えるなり

孫抱いてこの小さきもの大きなもの

初心 産湯の光ることしか

大阪築城四〇〇年まつり

案内してこれが五回目兵馬俑

土居耕花さんへ

句碑もまた紅葉に負けず燃えるなり

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

阿部 柳太

保険屋の言う万一が気にさわり

「言う万一が」という言葉に大きな重みを感じさせます。

「マンネリ」ということは、おそろしいこととであります。

使いたれた用語をついつかり使うものです。職場はもちろん、普段にお使いになる言葉にも、もっとと細かい気をくばりたいものであると思います。

発言がたたり役職背負こみ

奥谷 弘朗

句全体が、たいへんスマートにできていてよう整えられております。

「たたり役職を」がよく効いていて、句をひきしめており、見事であります。

働けば税金ばかり取られそう

児島 与呂志

「税金ばかり」と言い切ったところが、こ

の句の生命になっております。

石川啄木がなげき「働けど働けど」の詩を残しておりますが、その現代の川柳版とみてよいと思います。

正論をはくくせ出世また逃し

原田 明春

「また逃し」が、正論と対照的になっていて、作品をより高度な確かなものにしております。

直言、苦言、提言などの正論者の住みにくい社会になっております。どこの国でも同じでしょうか。

風向きてホームランにもなる凡打

藤田 泰子

「風向きで」とは名言であります。

世の多くの人々は、これを「ツキ」と呼び「好運」にあやかうと必死であります。しかし凡打でも打力がないことには、お話にはならないでしょう。

「やはり努力をつねに忘れないで」とこの句は私たちに教えていることを読みとらねばなりません。

兵の墓ありし日のごと整列す

田中 正坊

「整列す」この三文字に、日本男子だけでなく国民全体が、どれだけ涙をしたかも知れません。没後まで整列をする軍人墓地が目の前にうかぶようです。

私はこの句をみているうちに、新兵時代の内務班内に貼られていた「整理整頓」の大書した文字を思い出しました。戦争ついで

すね。

先頭を泳ぐ目高のボスらしい

斉藤 三十四

小さなメダカにもボスがいるとみた川柳眼は素晴らしいものがあります。

最後の「らしい」とトボケた味も見逃がすことはできません。非凡なものを持っておられて、うらやましい限りです。

べんちゃらの種がないので大を褒め

中川 幸一

「種がないので」によって訪問先の家の構えや応接間なり庭にいたるまで、その簡素さが伺えてたのしい。ほめた犬まで雑種犬のように思えてならないのは句の力である。

助平な話せんよになってボケ

市場 没食子

性欲の旺盛な若ものたちは、案外日な話をしないものでして、むしろ性欲減退の「きざし」のみえた人々に多いということは、男女共通したものであると申されております。

私の知人に日話の上手がおりましたが、最近あまりしなくなった、とたん句のようになつてしまいました。

真実の句は、強いつくづく考えさせられます。

「助平」という平易な言葉で「せんよになつて」という大阪弁でソフトに包み、淡々として日さを少しも伺わせないで、人生の哀歓をまとめあげた大作であると思います。

川柳太平記 (67)

川柳の群像

川上日車

東野 大八

日車（ひくるま）というのは向日葵（ひまわり）の別称である。黄色の炎の如きこの大輪の花は、逞しくけんらんと面もそむけず太陽を追い求めてやまぬ。それは仏教という輪廻にも通じているのだが、川上日車にとって太陽とは川柳だった。

本名卯次郎。明治二十年九月大阪市船場に生れ、十五歳から川柳に憑かれ柳樽から年を逐って新川柳の軌跡をたどり、川柳革新という太陽を追って幾多の柳誌の遍歴を続けた。

川柳開眼への同志の筆頭は小島六厘坊で、彼より一つ齢上もあって当初の柳号は七厘坊——六厘坊は生家が既製服商で、その商品陳列所が心齋橋筋にあった。ここを根城に同年輩の麻生路郎や、木村半文銭、斎藤松窓らと暇

さえあればたむろして柳談に明け暮れた。日車の父は実直な商人だけに、息子の川柳道楽が眼に余り六厘坊や路郎との交際を極度に嫌いだ。そのため七厘坊を日車と変えてみたが効果はなかった。

「葉柳」誌に挿入された日車の写真をみると歌舞伎の稚児かお小姓にも見まがう程の美少年ぶりで、大いに女にもてたらしく相当の道楽もしたようだ。その一挿話に「葉柳」編集会議を南地のお茶屋で開き、芸妓をなんと十数人も侍らして盛んな柳論に輪をかけたというが、この艶かしい会議の発案者は日車だったという。

傲岸不羈で天才六厘坊と自他共に許す六厘坊とは、よく柳論で激突し、二度も絶交を宣

言しているが、その度に仲に入ったのが路郎や松窓、当百だったという。六厘坊に劣らぬ相だなきかん気の頭脳派だったらしい。

六厘坊、日車、路郎、半文銭らの往時二十歳台の、血の気の多いこの若手川柳家から畏敬されていた松村柳珍堂は、大正八年四〇歳の若さで夭折するのだが、その臨終の床で日車を戒めた言葉に

「日車はそのグループ中でも一等よい素質を持った人物だが、惜しい事に己惚れ心がつよく、野心家で少々軽はずみのところがあるこの点をよくよく胆に銘じて貰いたい」とある。（前稿柳珍堂の稿参照）痛烈な日車評ともいえる。

大正二年一月番傘川柳社から「番傘」が発刊された。しかし伝統と革新の呉越同舟からその二年後には日車、路郎、半文銭、緑天、松窓らの革新派が「雪」を創刊したのを機に番傘を離れて独立した。

「古川柳独特の味わいと響きをもって私達はその揺籃期を過したが、少年期に『紅い』と映ったものは伝承的。『紅い』であって自己の発見した『紅い』ではなかった。その少年期と青年期の間の曲り角に出たのが、路郎と私が出した『雪』であった」（日車）

この「紅い」という論旨は青年期の日車得意の持論で「雪」「土団子」にも日車がその巻頭言で主張している。すなわち日車のいう新しい「紅い」ものは言うまでもなく革新川柳を指向したものである。

日車は路郎、半文銭らと共に「新編柳摺」「葉柳」「番傘」「雪」「土団子」「後の葉柳」と歩いた川柳遍歴は、ついに日車と半文銭による革新川柳を掲げた「小康」(大正12年2月)によって、路郎、緑天とも袂を別つことになる。

日車らの「小康」が出たのと前後して、東京では「大正川柳」で革新を宣言し、北海道では田中五呂八が「氷原」、森田二一の「新生」が誕生するなど、新興川柳は大正末期に「黎明」(村井潮三郎)、「影像」(古屋夢村)などを引き出し、反伝統の旗幟が相競つことになった。

こうした川柳革新運動に対し、旗手の役割を果たす立場におかれた日車は真向から伝統川柳を否定し、川柳における「主観的表現」「個性尊重」を掲げ、川柳家への覚醒を呼びかけ、川柳の「芸術性」「文学性」の確立を主張しつづけたのである。

いずれにしても日車の、少年期から壮年期

へかけての柳論活動は、実作上の革新ぶりを小盾に眼をみはるばかりの旺盛な筆陣ぶりによく裏づけられていた。

昭和三十一年一月「番傘川柳文庫」として「日車句集」が出た。水府がかつての「番傘」創立同人としての日車に対し、いわばその友情に報いたものと思われる。反伝統川柳打破の運動に先駆的役割を果たした日車にとって、それは思いも及ばぬ(友情)であったとも思われる。しかしこのときかかつての日の美童日車も六十九歳であった。

いずれにしてもこの「日車句集」は、文庫型の薄っぺらな小冊子でありながら、大正三年から昭和三十年までの日車の作品を収めたものだが、収録された日車の句はたった百十九句しかない。本来なら彼の四十年間の作品は膨大なものであるべきはすのものが、これはまた一体どうしたことであろうか。その序文に彼はこう記している。

「人生の果てに辿りついた私は、これでもにもすることはない。ただ峻烈な世上の批判は、やがて一句も遺さず削ってくれるであらう——(以下略)日車 昭和三十年十一月」

日車はこの句集が出た三年後の昭和三十四年十一月九日、実妹小野豊さん一人にみとら

れながら寂しく七十二年の生涯を終ったのである。法名釈行雲。

日車のその晩年は実妹の住む滋賀県近江八幡市の片ほとりの家で過したが、昭和三十三年中風を病み筆がとれなくなった。それまでは町史「太湖」「八幡商工五十年史」の編纂に当たっていたというが、川柳とはおよそかけはなれた孤独な仕事であったと思われる。

川柳での最後の筆は「川柳雑誌・麻生路郎古稀特集号」がおそらくそれであつたろうが「春雨やもの書かぬ身の哀れなる 蕪村の句を引用しているのが、一抹の哀愁をそそっている。

——南無日車さよならとも言わなんだ 路郎
青年期の盟友日車に対するこれが路郎の悼句であつた。最後に「日車句集」から。

——いつ来てもおんなじ着物きてる恋(大3)

——思はじと椿の花を火に焙べて (大5)

——手鏡の裏を返せば浪がある (大9)

——錫 鉛 銀 (大12)

——盗む 死ぬ 仏の前 (昭3)

——狂った一頁を追いつ 初秋となる(昭20)

——死灰のぬくみ これが吾子の喉仏(昭30)

■ 次回は「小林茗八」

誹風柳多留廿六篇研究 (十四丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎

八木敬一・鈴木黄・石田晋一

南得二・小野真孝・多田光

故岡田甫

215 数ならぬとハむつかしい時鳥

本多 本句は「ノウセ」に初出した北野天満宮の時鳥の絵馬にまつわる故事を詠んだ句である。句意は、たった一声と鳴き声を限られたので、かえって時鳥も鳴きにくくなったであらうとの穿ちであらう。

八木 『徒然草』百七段をもとにした句であらう。「龜山院の御時、しれたる女房ども、わかき男達のまゐらるゝ毎に、『郭公や聞き給へる』と問ひてこゝろみられけるに、なにがしの大納言とかやは、『数ならぬ身はえき、候はず』と答へられけり」

女の問い掛け、男の返事、「ホトトギスの

声を聞いたか聞かないか」という、ただそれだけのことなのだが、「数ならぬ身」だとか、何とか、むつかしいことだとの句意。

多田 八木氏説賛。

岡田 同。よくお見つけになりました。

216 喰物の小言も孔子いつて置き

本多 『論語』十郷党に「食ハ精ヲ厭ハズ」以下酒食についての教えがある。本句はこれを詠んだ句である。「小言」というのが、いかにも川柳らしい洒落である。

喰ものにかけてハ孔子むづかしい 八・25

多田 賛。

岡田 同。

217 氏神ハ八幡と綱申上ケ

本多 頼光四天王の一人渡辺綱は武蔵国箕田（現在の港区三田）の生まれという。その箕田の総鎮守が三田八幡で、その神体は渡辺綱の守護神といわれる。

氏神も一人ハ知れた四天王 二七・17

主題句は、頼光から出生について問われた折に、「氏神は三田八幡にてご座候」と綱が答えたとの意である。

石田成 賛。

ひぢり坂近所となハ申上ケ 安九・桜2

鈴木〓賛 八木氏も私も共に三田の近くに住んでゐる。蛇足だが身近かに感じる句。

つわもののまじわり一人江戸なまり

一〇六・37

多田〓賛。

岡田〓同。

218 功なり名とけて鱸やんく

本多〓「功なり名とけて」は『老子』の文句取り。「スズキ」は出世魚の一つで幼魚をセイゴ、少し成長したものをフッコという。中国の名産で、漢名を松江魚という。

本句、越王勾踐の臣范蠡が、魚屋に化けて獄中の勾踐を励した故事をよんだ句である。会稽山の戦いに敗れ、姑蘇台の獄に囚われた勾踐の許へ、范蠡は魚屋に化け、魚の腹へ密書を入れて勾踐を勇気づけた。

釣り出す気密書を魚の腹に入り

一五四・5

大屋〓この句、平清盛だと思つていました。

清盛が安芸守の時分、熊野権現へ参詣の途中伊勢の海上で大きな「スズキ」が船中におどりを入ったのを、熊野権現の御利生で栄える前兆だとして自ら調理し、家の子郎党にも食わ

せたが、果して太政大臣になったということ

が『平家物語』に見えます。

南〓礎橋に賛。

一一・6

の句は、范蠡が魚屋に化けた時の句であり、右の例句に基いて「すずきやん」は、魚屋の呼声で范蠡の故事を示しているものと思われ

ます。

多田〓同右。

岡田〓同。五湖に引退した後は、魚でも売っ

ていたかとの想像句。

219 譽られるぬすみ相子かころけ落

本多〓二十四孝の一、陸績の故事。

まだ六歳の頃、袁術という人の許に行き、橘を貰った。陸績は之を三つ取って袖に入れ帰りに礼をするとして袂から落した。幼き者に似合わぬ事をすると袁術が思つて、その訳を尋ねると、余り見事なので、家に帰り母に与えようと思つたのだと答えた。

その孝心によつて、盗みの汚名から逃れたばかりか、二十四孝子の一人として、後世まで賛えられることとなつたわけで、袂から柑子がころけ落ちたことによつてその孝心が知

れたのだから、まさに譽られる盛みであるとの意である。

袂から落ぬと孝の名ハ立す

五五・2

橘の香をなつかしみ孝へ入れ

五八・24

多田〓賛。

岡田〓同。

220 江戸橋で道外を一人リツ、かゝえ

本多〓「江戸橋」は「日本橋の東にありて、伊勢町より本材木町へ行く間に架す」(『江戸名所図会』)橋で、この江戸橋の南詰の広小路、日本橋との間にある四日市で、三河万才の太夫の相手である才藏を雇うため、年の暮に才藏市が開かれた。この情景を詠んだ句である。

「道外」はおどけ、滑稽、あるいはそれをなす人を言う。

大屋〓賛。

三河から江戸ばしへ来て供をかい

安四・梅3

四ヶ市目出度イ人をうつところ

明三・礼4

多田〓賛。

岡田〓同。

水煙砂

黒川 紫香選

藤井寺市 赤木和子

西宮市 紀市郁栄

新しい世界が見えるドアを押す

肩の手が温みふた夜を過ぎてなお

あなたの瞳のなかの私に恥じらいぬ

枯葉舞う小径二人だけの秋

父と居て父と語らぬ置炬燵

米子市 林 荒介

八尾市 高杉千歩

踵から爪先までのドレミファよ

拝殿でなくしてしまったネクタイピン

一枚の葉書に踊る靴の先

慰めの言葉は要らぬ冬木立

大きな獲物をつれて神詣でをする

今治市 矢野佳雲

尼崎市 丹下玉子

順番に來ても慌てる十二月

また逆になるのが怖い砂時計

お祭りの先頭に行く面白さ

新しい医者へためしに妻をやり

人柄を言わず定年線を引き

こんなにも豊かな乳房で子が産めぬ
美しい角度で女が拗ねている

血のかよう言葉で弔辞読みあげる

風に崩れる愛はことさら罪深い

人妻を誘えば素直についてくる

贅沢も中の下余命ある限り

どの恋も風化十二月の御堂筋

まず妻の所為にしてから探しもの

おたのしみ袋は軽い方貰う

古地図へ視力限りの放浪記

竿の先じつと見つめる秋日和

道楽の末に摺んだ人間味

人正の枯野が見えて鉦たたく

深くふかく火種を残している夫婦

齒車の合わぬ日もあり風の音

名古屋市 越村 枯梢

飄飄と歩く落葉の並木道
胃下垂の胃袋重し秋の風
左手で握手をしよう人嫌い
甘党でいつも円周から外れ
年金の重み一片のパン重くなる

名古屋市 関口 幸子

ペンキ屋の詛りを聞いてお茶にする
帯軽くしめて電話の主に逢う
新硬貨出回った頃嫌われる
暦では今年はいいい年だったはず
雨乞いのつもり私は旅に出る

名古屋市 田中 晴子

誘われて枯葉も旅する山の駅
猫の尾を踏んで華や留守の部屋
男なら一度は下車して賭けてみる
飛んでとんで風船海の青を知る
振り向けば味方は自分の影ばかり

京都府 木本 如洲

火遊びへおんな疲れて傘たたむ
明日は明日軽い財布を持ち歩く
少年の答えに海をもっている
一本の傘坂みちは軽くなる
ふりむけば橋から消える虹の彩

鳥取県 森山 盛桜

職の無い背中を天に叱られる

紙屑の愚痴を屑かご聞かされる
足組んだつま先までも隙が無い
主義の無い絵が落書きに見えて来る
人を恋う目が人形にいつも有る

鳥取県 羽津川 公乃

赤い糸やっと思つて縁結ぶ
焼き芋の値段庶民を遠ざける
老夫婦健康器具と共に住み
シヨッピング本屋の中も一回り
星影のワルツ栄転胸を張る

和歌山市 中尾 まゆみ

一枚の絵葉書にある温み抱く
快適な歩道で人情うすくなり
丸い輪の中にも父の位置がある
真っ赤な花いけてみようか冬の部屋
嘘ついた顔を鏡に責められる

伊丹市 桎谷 郁子

故郷はやっぱり近い方がいい
故郷を一杯詰めた紙袋
老いてなお白寿までもと欲を持ち
秋深く札束を読むむなしさよ
銭の顔憎いけれども又愛し

名古屋市 藤井 高子

冬ぐもり昆布とろとろ炊きしめる
壺一つ据えて女の吹きだまり
皮下脂肪おんな真冬をしたたかに

親だから必死に子の嘘買っている

豊中市 満仲 きく子

生きてれば母も着ている秋袷

乱れてもコスモス自己を失わず

舞い込んだ蝶を逃がしてやる小窓

向かい合う心ほのぼの栗こはん

西条市 片上 明水

青い鳥旋回ばかりして降りず

花があり木があり秋の廻り道

老夫婦干し場は白と黒いもの

心持ち軽いシューズでひとり旅

東予市 小山 悠泉

面会謝絶廊下を気兼ねして歩き

牛を追う声高原の朝が明け

金あると見たか女が別れない

母逝って歳月思う彼岸花

熊本市 有働 芳仙

金婚式相性が良かったことにする

我が恋もドラマチックになって熟れ

へそくりを抱かせた本を見失い

どれもこれも人の恋しい秋の花

和歌山市 福井 桂子

清濁を併せ呑む胃が疼き出す

皮肉言う血液型のせいにして

一言を詫びて見上げる丸い月

形見分け毛皮のチョッキもろてくる

富山市 舟渡 杏花

父代り兄の大きなめし茶碗

ポケットベル朝食抜きを走らせる

ジャズダンス紙のおむつが売り切れる

初心者マーク法規が右往左往する

鳥取県 中原 諷人

放って置く柿はどんどん熟れ過ぎる

点と線つなぐ身障者のふたり

電気スタンド君は私を知り過ぎる

カラオケの歌詞へ妻の名入れておく

鳴門市 八木 芳水

ちよつと甘い便りに心踊らされ

愚痴言わぬ妻には月が相手する

ネジ一本ゆるんだ答出してくる

生活の知恵に女のおしゃべりか

岐阜市 市川 鱗魚

部屋の隅埴輪に似てる父の顔

とても平和な灯り梅酒と老夫婦

火消壺のぞけば母が喋り出す

モザイクは平和風からもう彩

尼崎市 吉永 伊三郎

ドラマも済んでお隣の窓静か

サントリーニッカに酔うて口説いてる

大正の男はなぜか枯れすすき

古い二人静かにまつり聴いている

京都市 松川芳子

ずけずけと叱言を言うてばけ知らず

もう木曽路木の香漂う大丸太

黒四の旅に組まれたフルコース

這松の雪に耐えてる姿して

高槻市 竹内花代子

美しく産んだばかりに親を捨て

髪染めてみても昔は返らない

輪を書いて中に沈んで居たいとも

言訳に誘うコーヒーは遠慮する

熊本市 大川幸子

バリユウムの流れを祈る瞳で見つめ

変声期お子様ランチ氣にいらぬ

最後の玉でチュウリップが開く

五六ヶは鳥に残して柿をもぐ

熊本市 宇野昭代

ロボットの或る日ハートがほしくなり

それくらいとは他人だから言え

胸の奥のぞかれそうなレントゲン

使い込む度胸ないから金庫番

唐津市 前田広幸

コンピューター漢字不要にして終い

立ち退きを拒み道路へさらし首

妻帰宅急にお腹が空いてくる

日曜の子のおはようが弾んでる

高石市 浅野房子

行きづまり女の浅知恵借りに来る

日がな一日なす事もなし秋日和

先ずコーヒーこれが私のセレモニー

散歩道コスモス咲いて平和です

米子市 足立由美子

評論をする口だけは達者です

太陽の下で結論老える

秋晴れに私の悩み干して見る

老化です注意なさいと骨が鳴る

寝屋川市 平松かすみ

チラシ見てお金儲けをしたくなり

残金のわずかへサツと自動ドア

サンマなら太目を選ぶ娘さん

全快をお祈りします靴みがき

大洲市 米沢暁明

人並みと思う女が少なすぎ

似つかわしいろり端には大マツチ

歩道橋金かけたほど渡らない

妻連れて妻への土産いらぬ旅

大阪市 藤森小雅子

止り木へ独り異端の瓶ビール

時々逢つてるらしいイヤリング

おしん見て涙を拭いて靴を履き

すれ違う風が師走の貌にする

寝屋川市 堀江光子

夕焼けはもう消えたのにからす瓜

生涯を重くはないか甲虫

書くにつれだんだん長くなる便り

何事もない顔つきの執刀医

尼崎市 山田保蔵

あの虹にクレヨンにない彩がある

図書券を買って本屋に來たものの

金次第どんな戒名もつけます

真ん中で威張る社長にヒゲがある

西宮市 材木光子

遠い日の母のまじない真似てみる

失意の日妻の笑顔に救われる

帰省子に老いの厨の灯は消えず

五百羅漢姉妹でさがす父の顔

尼崎市 春城武庫坊

酔々先生を偲んで(二句)

温泉で裸の柳話もう聞けず

すすいと極楽行はちと早い

火消壺中に歴史がつまってる

不器用のままで過したまむし指

島根県 福岡芳枝

台風もよし來客のない読書

野地藏に孫も祈りを口ごもる

減反をすすき津波が追つて来る
後継ぎの宿命活字の恋をする

八尾市 宮崎シマ子

古都奈良の駅にすすきが活けてあり

栗拾い今日バス値上りの事ばかり

十二月それでも妻は稽古事

銀の箸妻の料理にはいらぬ

唐津市 浜本ちよ

嫁に留守預け感謝のフルムーン

名物を供えて旅の無事を告げ

方弁の嘘もためらうお人好し

わが城主ビールでこ気嫌高軒

宝塚市 丸山よし津

青年が地に並べ売るアクセサリ

貸出本に見知らぬ人の文字に遇う

栗の籠松茸一つが鎮座する

保険満期孫の祝に包む幸

唐津市 神崎紫泉

妻病んで庭の雑草いばり出し

面白くない日が続く秋の雨

帯めめた柄が溶けあう秋の彩

サン格拉斯民芸館を覗きおり

大阪市 堀口欣一

この秋も松茸うどん食べただけ

官舎にも住み馴れ菊も作り馴れ

虚子の句を味わいながら秋の旅
鉛筆で母の意見の葉書来る

尼崎市 児玉歌子

昨日来たベンチで後悔しはじめる
もう嫌い火の燃え方がちぐはぐで
確実に二度目の変は打算的
開け閉めで姑の気分を知らされる

近江八幡市 前川千賀子

子を連れてときめきもなし旅袍
白鷺の一羽で足りる秋の景
旅信などしたためてみる宿の雨
街の悲話袋小路へ吹き溜まる

尼崎市 矢萩貞子

乗り越しを払って駅を出たけれど
バス待ちに孫の絵本を買い求め
看護婦の笑顔にホッと息を抜く
日記には無事に暮れたと書いて置く

滋賀県 安田志津

掴んでも掌からこぼれる愛の砂
天辺に柿を残して秋がゆく
引き出しを片づけている秋夜長
畔道に案山子ころけて秋終る

姫路市 人見翠記

プレゼントオーデコロンの部屋にする
旅先で本場物買う賑やかさ

ある別れ手のぬくもりがまだ残り
口々に鯉を指さす津和野かな

寝屋川市 岸野あやめ

目薬のかすみに沁みる冬の夜
老夫婦仏頂面で連れ歩き
ふるさとはあまりに遠し眼鏡拭く

益田市 里本たかし

印鑑を丁寧に掃除して耐える
マネキンの女体を全部視てしまふ
台風一過蛇口を冷えた水通る

大阪市 萩谷まさ

絵画展眩いばかり裸婦の像
運動会早く来てネと孫の声
萩こぼれ虫も葉蔭で一休み

高槻市 笠嶋恵美子

桃源郷を信じ峠を越える蟻
踏みはずす足が老化を訴える
午後三時ちよつと道草楽しんで

富田林市 植松慶子

寝静まる夜長独りのティータイム
友の花道は夫に言わず置く
強がりの涙時々真珠色

熊本市 北川一進

安定所靴底だけをへらしに來
生花もお茶も習って日も近い

小銭だけ残しデートも無事に済み

大阪市 古川 美津枝

水煙る鞍馬の樹々に夕日さす

秋嬉し今日初めての待ち合せ

方言のメモもとび出す宅急便

高知県 曾我部 裕

気にくわぬだけで素っ飛ぶ雑魚の首

負け犬の視野に広がる冬の海

道聞けばいい人ばかり祖谷の里

唐津市 松 高 多々子

零囲気も味に生かした腕の冴え

山清水湧くかたわらの竹びしゃく

芒穂を挿して家中秋が来る

兵庫県 森 脇 和 子

箒目のあと追いかける三輪車

道づれの友から生い立ち聞かされる

自画像に紅塗ってみる雨の午後

大阪府 上 田 柳 影

般若心経いよいよ小さく妻老ゆる

動き出しゆとりこさえる満員車

助産婦の免許も荷にして嫁が来る

守口市 結 城 君 子

鈴虫よ育ての親は私なの

大輪を誇れば種を頼まれる

インターホン段々弾む声になり

西宮市 朝 山 千世子

かつて住みし六甲遙か散歩道

長雨に走り松茸顔を出し

ポツクリ寺まじない程度でお詣りし

熊本県 高 野 宵 草

真面目ロボット使い捨てとも知らず

竹藪が騒いだ程の風でなし

犬だけが喜ぶ家に帰りつき

羽曳野市 麻 野 幽 玄

湯の町の散策下駄の音楽し

禁酒さす医師へお酒のお歳暮

巣を護る蜂です戦は仕掛けません

岡山県 土 居 耕 花

まむし屋へ廻る男のスケジュール

肛門を看た看護婦に又出会い

自叙伝の裏で遊んだいい女

和歌山市 後 藤 正 子

ストライクゾーンがとて大きい父の胸

片想いばかりの秋が深くなる

水枕しても台所指図する

藤井寺市 前 山 美恵子

十二月煙突そうじしておこう

妻よりも母である日が多過ぎる

青い鳥探しておくれカラスたち

箕面市 坪 田 紅 葉

手を振れば止るバスあり彼岸花
どちらにも勝たせたい草野球
お吸ものだけ松茸買ってくる

島根県

森山英子

テレビ体操曲りなりにもした気持
ペリカン便託してゆつくり昼寝する
硝子張りにしても税吏の目が光り

枚方市

二宮山久

食卓にテレビのメニュー添えてある
地図広げ生れ故郷の近いこと

記念樹も伸びて子供とする対話

出雲市

落合正江

慰めるやさしい夫がそばに居る
停年の花道拍手で送られる
白い皿小さなむすび孫二人

和歌山市

神平狂虎

無器用な男に赤い風が吹く
歯車のひとつが詩を持っている
本当の僕がグラスに浮いている

吹田市

西岡豊

会うたびに女の甘え撥ね上がり
断わりがすんなりできて秋の風
只今と叩けば妻はバリケード

鳥取市

武田帆雀

雨ポツリポツリ碁仇考える

花名刺酒に汚れている別れ
背信の抵抗従業員が辞め

岸和田市

奥礼子

雑草も抜くには惜しい花をつけ
出揃った中年層で盆踊り
新調の雨具へ雨を待つ子供

大阪市

権安達一郎

旅人の心とらえた萩の道
妻という名前におしん負けなんだ
哲学の道を歩いた嫉妬心

吹田市

茂見よ志子

み仏に切る初咲きの庭の菊
それぞれに理由があつてしらん顔
長き夜を湯につかり聴く虫の声

芦屋市

上田佳秋

御堂筋線だけは間違えずに来れる
早朝の説教聴きに北御堂
バーゲンの靴を大岡町で買う

吹田市

栗谷春子

この子にはまだまじないが効くらしい
孫のものを洗って干して留守たのし
何十年まだスイッチを間違える

泉南市

坂根流水

鐘の音に霽も比叡を這いのぼる
峰の灯は夜明けの空にただ光り

歓楽の雄琴を朝の霧つつむ

新潟県 高野不二

スーパで聞きなれた名を買うて来る

パーマあて風のあたため席探す

宇口市 森川春子

晩酌というには量が多すぎる

赤ちゃんの泣き声聞かす電話口
くどくどと年金手続き聞いており

あの時の津波とテレビまだ見せる

羽曳野市 天崎只士

大阪府 北山悟郎

殿りが好きで走ってばかり居る

嘘つきは自分の嘘も忘れてる
雑踏の街にストレス捨てにいく

一円の賽銭神がうろたえる

お見舞がお悔みとなる間の悪さ

付添いが病人よりも瘦せて居る

尼崎市 佐藤美代子

島根県 北川民子

古寺の仁王の足に萩こぼれ

花道のライトが消えた無の世界
石女が八頭身で旅をする

おにやんま残暑の庭へまぎれこみ

貝割れを頭上で作る町のビル

鼻の穴たしかに秋を吸いこめり

大阪市 日阪秋子

竹原市 石原淑子

さりげなく心をほぐす夫の徳

新調を老いの齡がふと迷い
物産展さほどお国が匂わない

子の喜び夫の喜びだけに生き

愚痴捨てに女二人の喫茶店

アルバイト主婦より外の生きがい

広島県 望月晴彦

島根県 田中ゆきさとう

三輪車自転車自動車母の夢

蛍光灯もう切れますと点滅す

思い出すように手近に置くくすり
真黒な補欠意外に打ちまくる

枯れすすきの歌になりそう給料日

西宮市 草刈墮駄

東大阪府 小林勇人

ナポレオン枕に女いびきかく

野仏のお供え箸が添えてあり
幻想の色とりどりのシャボン玉

ダイヤルをして注文の名が出ない
はみだした孫の塗り絵が目にしみる

西宮市 松本一郎

昼食を御馳走になり愚痴を聞き

罪深き男十字を背負う日日

この孫とあと何年をふと思う

守口市

岸野キミ

夏休み孫の背丈がうんと伸び

二人の日夫婦でなくて親子です

「ノックしてお入り下さい」孫の貼紙

大阪市

山本 炉 齊

タイガース今年も冴えず秋の風

子守唄天満の市が懐しく

賀茂川に白鳥かえり京冷える

和歌山市

桜井 千 秀

秋深し本を枕にテレビ見る

八十の祖母にも実家ある強味

蒸発してから美人と認められ

大和高田市

岸 本 豊平次

夏ばてを鰻一匹分けて食べ

竜安寺コースの次は映画村

眼鏡まで出す程でない社会面

尼崎市

大江 かね子

お祭りで賽銭箱も重くなり

ふるさとのみやげ重たいものばかり

叱られて割れたお皿をついで見る

藤井寺市

前 山 とみえ

爆発の子知逸れ日本一の富士

すれちがう衣擦れ足袋が真っ白い

同居していてもやっぱり戸籍別

守口市

森 川 まさお

もう秋になった鉄道弘済会

ちよつと肩に手を置き話上手なり

展覧会見るのにお供つれている

寝屋川市

立 床 晴 風

ままごとの野菜高いと言う買手

草花の誇りへ箒目癖けて掃き

自転車が羽振りを利かす五、十払い

大阪市

朝 倉 利 義

飢え知らぬ母子がパンの耳落とす

長屋でもピアノも車もございます

家康を読んで耐えます受診待ち

米子市

大 田 みさと

小銭さん愛の泉で冷たそう

この枕爺ちゃんのと嗅いでる孫

還暦に何故か少女の日の夢を見る

島根県

堀 江 百 代

垣根ごし見えるとなりの柿うれる

さまざまな出会いあるだろ空晴れる

三宅島この世の地獄見るような

山口県

高 崎 雀 声

上品な女も乱す俄雨

ポスターに笑いかけられ買わされる

思い出をしかとカメラに写し込み

島根県

岩佐富子

カーテンをひくのが惜しい丸い月
八分目の俵せて日々満足し
風に散る葉桜をいく並木道

大洲市

横田放人

構えたらカメラへ子等のVサイン
訪ねたらちよつと店番頼まれる
コスモスにはほえみくれる秋の風

大阪市

稲本凡子

日曜も同じリズムで暮れてゆく
紅うすく六十なりの身だしなみ
雲へ月ちよつと隠れて浮気する

吹田市

井上照子

芳名録恵筆恥じる書道展
境内の鯉に餌を持ち散歩する
シヤム猫が嘲笑うよに窓に居る

吹田市

園田文子

菊師にもふるさと偲ぶ茶の香り
牛の市別れ惜しんで背をなでる
ふろふきの夕餉の窓にくつの音

高槻市

上原逸

雑踏の駅で久しい人に逢い
茸がりを約束したが雨となり
七五三親が気をもむ石の路

一筋に老舗の味を保ちつづけ

大阪市

今西静子

達磨の額にかけて弱気叱咤する
千羽鶴孫の祈りが届けられ

岡山県

小林妻子

網走のここにも同じ朝日さす
長万部カニ鍋の味忘れまい
地獄谷昨日の悪を捨ててくる

岡山県

藤瀬比沙子

グラバー亭観光風が吹きすさび
栗飯や恙なき夜の虫の声
秋晴れや運動靴が枝に成り

大阪市

渡部さと美

子が成人してもおもちゃを見てあるき
荒磯に抱かれて生きる海女の村
いか焼きの匂いにむせる東尋坊

高知県

山下登舟

この人も寡婦か彼岸の墓参り
孫等去に二人の庭に法師蟬
モルモットの様に毎日医薬変り

出雲市

河原恵美子

がまんしてがまんしてついに鳳仙花
きのうよりまたさみしくて秋の雨
膝こぞう秋を知ってかもの申し

米子市

本吉宗則

ミサイルがまだ飛ばぬ空秋を刈る
ことさらに本場と書かぬそばの味
組込まれ企業という名思い知り

諫早市

江副 二牛

祭り囃子列島秋の風物詩

空巢からねらわれていた非常口

残業を口実にしてにぎる牌

出雲市

竹 治 ちかし

敬老の日には素直に年をとり

見ぬ振りが出来ぬ男の勇み足

多数決小さな正義を一つ消し

水戸市

上鈴木 春 枝

今日の嘘そーつと流す仕舞い風呂

ご近所と子を仲介にお付き合い

二人きりもう急がない夫婦坂

愛媛県

八 塚 三五島

顔顔みんな生きてる歩いてる

娘一人一直線に歩いて来

間食を忘れ冷蔵庫で腐り

大阪市

松 尾 柳右子

惜しむ夏蟻の休暇は豪邸で

賑わしく半額セール店じまい

どこにせよ優勝バーゲン出来るとこ

羽曳野市

田 中 隆 二

飲むだけで芸一つない父の酒

一本の酒で無口の堰が切れ
長生きへいのちのスペア欲しい年

大阪市

田 中 節 子

すだち貰いかばすも貰い秋すすむ

花道が近すぎ役者がまぶしすぎ

うしろめたさ押えて売場のお菜買かうう

守口市

結 城 敏 夫

初めての公園に来て大困り

生返事手に電卓の建売屋

フルムーン川柳になる事ばかり

島根県

高 尾 よし子

日銭追う身に夜風は冷た過ぎ

ハンドルはあなた任せの酔いきげん

老い二人言葉少なくワイン干す

鳥取県

福 田 あや子

一日が病の話亡娘の話

矢印が折れてぐるぐる廻らされ

今治市

新居田 胡頹子

溜息が投げかけている重い影

檜山の鬼火が老いを攻めにくる

泉佐野市

真 崎 浪速子

久方に虹呼ぶ雨の一走り

松茸を迎えて鍋の豪華版

大阪市

板 東 倫 子

名月に領空侵犯などはなし

大衆へ大銀行がもみ手する

岡山県

石黒若恵

落書帳の顔が笑っている安堵

童心にかえれば手毬よく弾む

樺原市

西本保夫

定年へグチをこぼさぬ意地がある

定年へボクの意見は聞いていず

島根県

園山世似

百歳が居て敬老祝賀総拍手

草角力やはり勝つのは大男

鳥取市

若林一止

満腹が乳首囁えたまま寝入り

減反を嘆く農婦が朝のパン

八戸市

島田昭治

レントゲン心の検査もしておくれ

眼が合った女何かを言いたげに

和歌山県

西村重彦

徳川方の家紋石出る大阪城

よい作を抜いてくれない人憎し

大阪市

山脇正之

耳学を得意に話すパーマダム

退官の花道飾る名講義

兵庫県

円増貞子

着られない晴着の裾が派手に舞う

宅急便旅の思い出つめて来る

大阪市

野田君枝

大阪城夏冬にない陣が出来
秋刀魚焼きながら三宅島憶う

八尾市

葛幸子

良きにつけ悪しきにつけて手を合わせ
神主の今日も持つて竹箒

和歌山県

森三枝子

御供物を蟻がお先に味見する
祭壇もお金次第とする展示

高知県

小沢幸泉

カクテルというには乏し夜の酒
しょうもないテレビ正座で子ども観る

大阪市

平井露芳

二十一世紀動かすなにわの心意気
関さんも地下で喜ぶ御堂筋

大阪市

塩田新一郎

絵団扇に細指映えて庭花火
洋装の舞妓と出会う瓦町

西宮市

飯森泰世

今日からは新居はすかし妻の位置
朝帰り妻の姿がまぶしくて

八尾市

椎尾公子

縄のれん過去の噂が肴なり
この人は暗示に弱して易者見る

弘前市

真喜内實

岩木嶺の雲慌しきに稲刈らる

漫画ばかり見てる病室の古つわもの

指宿市

渡 辺 伊津志

見届けて欲しとて落花音を立て

継ぎ剥ぎをしたように咲く海紅豊(鹿児島県花)

泉佐野市

大 工 静 子

同色は好きで相手は賢婦人

身の避で宿の電気も一つ消し

和歌山県

寺 田 裕 美

大声で柘榴が笑う秋の空

うそつきの本当へ耳が痒くなる

青森県

波 た だ お

風がないのに魚群か波を立て

シャンデリア入れてわが家も派手になり

島根県

岩 田 三 和

樹皮さける音に目覚める秋夜長

天才で下手な文字を気にかかけず

岡山県

山 本 玉 恵

鳳仙花はじけた様に恋はずむ

銃口が火を吹きたがる北の空

西宮市

松 尾 志 保

味つけが妻と似ている赤のれん

老妻をやつと説き伏せフルムーン

神戸市

岸 脩 二

おはようと宵の明星厚化粧

逝く時も一人でござるでは来世

泣きながら打った柱をたたく孫

お世辞とは反対の事を妻すばり

蓄めたのかチョッピリ角が取れてきた

顔色はもう読み取っている乳児

食膳に三猿いつも坐らせる

青蜜柑ハウスのものに黠し色

眼がきつい警察官に間違われ

魚籠持って子等が先行く日曜日

楽天家の妻には明日の風が吹く

花道を設け社長の座を下す

井に受ける雨漏り良い音で

たこ焼のたこの数だけ愛してる

冬枯れの人生せめて趣味に生き

夕暮れの独りをテレビに救われる

嫁えらびあれならまあと親は言い

理想像崩れてただの泥人形

大阪市 松 本 た だ し

兵庫県 脇 田 米 朝

和歌山県 北 浜 二 郎

唐津市 山 口 高 明

吐 田 公 一

大阪府 染 道 佳 南 子

田辺市

島根県 大 浦 ふ み

大阪府 宮 川 木 々

守口市 長谷川 司

約束を夕日がしかと見とどける

歯切良いゲソで治めてトロでめ

大阪市 服部 頼一

本立ての辞書がへそくり擁護する

寄付をして温い気分の二、三日

河内長野市 糸谷 春草

久し振り便り寄こせば無心なり

宮島の秋を歩けば鹿が来る

和歌山県 山田 久子

咳ばらいナツメロ一曲口ずさむ

同病か同じ顔して待つて居る

高知市 北川 竹萌

平でいる心は何時も平和なり

電柱の蔭にかたより信号待ち

千葉県 中村 有人

会計簿を見せられるのも月末で

かりん糖美味く食つてゐる歯が丈夫

島根県 田中 ヒデ子

吹く風をすべて吸いたし昼休み

里芋の露でむかえた天の川

島根県 東原 福子

秋の蝶彼岸参りへ連立ちて

かみしもを付けてどんぐりころころと

倉敷市 吉備 桃太郎

故里の川へ悩みを捨てに行く

揭示板歸りの道は宙に浮く

大和郡山市 岡田 すみれ

この夏はああしんどかつた幾度か

気がかりの用事すませて心安し

米子市 宮本 佳女男

飛翔する運鈍根が欲しいのに

土壇場に追い詰められて出す度胸

岡山県 池田 半仙

婆ちゃんの膝叱られた児の砦

快心の作も没句となるショック

富田林市 福田 きぬ

生き様を変えるすべない新生姜

親の道たどつて通る蝸牛

竹原市 佐藤 令子

一休みしてから頂上遠くなり

藤井寺市 楠 昭子

執念で歩いた靴が謎を解き

兵庫県 浜田 雅子

今もまだ理想の人を慕いつつ

選者よりお願い

少数投句の方は規定の十句か、少く共それに近い
数を投句して下さい。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

白岩 文衛

不器用な男に貸した膝枕

堀江 光子

不器用な夫だからいいのです。小器用で、立ち回りのうまい男なんか、すぐ飽きが来ます。句もまた、小器用なのはいいやです。あなたのこの句など、オースドックスで、どっしりしていて、飽きの来ない句ですね。

悪友をワンクツションにして和み

前川 千賀子

あまり善友ばかりいると退屈してしまふ。ちよっぴり悪の匂いのある奴を一枚中にはさむと、グルーブが却って一層睦みくなるから不思議です。

子らはみな慈なしか赤とんぼ

満伸きく子

農薬のかげんかすっかり影を消していた赤とんぼが、この二、三年、私のところにも、ぼつぼつ戻って来はじめました。その赤トンボがスイスイ飛ぶ空を見ると、離れ住む

子供のことが思い出されるから不思議です。二章一句の構成になさったのも、この句の内容にとってもよくマッチしていて巧みです。

ドレミファソおいでおいでと萩のうた

河原恵美子

しゃちこばった、力んだ句の多い中で、こんな句に接すると、ほっとして、ひとりでにほえみが浮びます。人生だ、文芸だ、と深刻ぶって、しかめつらばかりしていたら、却って、川柳を文芸から遠ざける恐れも出てくるんじゃないでしょうか。

六十がまだ恥ずかしい夢を見る

若林 一止

人生五十年と昔から言われますが、私が前に昭和十年の統計を調べたら、日本人の男の平均寿命は四十七歳でした。それが今年の統計では七十四歳になっています。もしタイムトンネルを通して、戦前（昭和十年）に戻ったとしたら、七十四歳の人は、そこでは四十七歳に若返っています。六十歳は、とコンビユータに聞いてみたら、キミハサンジュウハツサイと答えました。

一止さん、あなたは三十八歳ですぞ。あなたも、私も、まだまだ男盛りですぞ。

妻も出て見ないか犬が二足居る

土居 耕花

むずかしい理屈も、主張も、この句にはありません。取るに足らぬと思われる身辺些事を淡々と詠っているにすぎません。しかし、どこか恍けたような味の、ほほえましい句ですね。そして、ほほえんでいると、妻の古い

へのいたわりを包みこむ作者自身の老いの哀しみが、霧のようにしのび寄ってくる。そんなベールを、この句に感じませんか。

十一月十三日、近所の人が総出で祝つてくれる中で、この作者の句碑が建ちました。

次の世があったら妻よまた逢おう 耕花
洗濯機我が家の起床ラッパなり

小林 妻子

雅号を見て、だれしも作者を女性と決めがちだが、ツマゴさんは、太平洋で幾多の海戦をたたかい抜いた、帝国海軍生き残りの勇士、堂々たる日本男児である。彼の家の朝は早い。おばあちゃんの洗濯機の回り出す音を起床ラッパに、ツマゴさんも、子も、孫も、一せいにとび起きる。そして、月月火水木金の艦隊勤務に走り出す。

健康な笑顔が絶えない働き者一家です。

王様がいののでうちが平和です

小野 風章

長谷川紫光さんのお話を伺った。家庭教育の真髄は、母が母、父が父たることだそう。一家のお母さんは、赤く、丸く、柔らかく、おいしいいちごに、お父さんは、もぐさの権威をもつて一家を統率すべし、というお話で近ごろは、これが逆さまの家が多くてね、と歎いておられた。ママゴンの耳ささ痛かろうと、女性が大多数の聴衆の中で思った。

逢う文を小雨がそつと邪魔をする

山本 玉恵

逢うだけなのに、という女心が可憐で、応援してあげたくなる。「丈」は仮名にした。

愛染帖

橘高薫風選

仲秋の月と絵になる竜馬像
孤に生きる女で帯はきついに

今治市 月原 宵明

梵鐘の余韻に金木犀が散る
よく売れる自販機海を向いている

米子市 青戸 田鶴

耐えている友へ目礼して帰り
虫鳴いて花野の中も不安がり

平田市 久家 代仕男

道化師の塗る白粉を溶く泪
人を指す指が己をさしている

岡山県 白岩 文衛

定年のまだ繫がれるカレンダー
ネクタイも古び私の秋深む

和歌山市 浦野 和子

岩波をバッグ替りに持った日も
吾亦紅この里隠れ切支丹

京都市 都倉 求芽

漱石の当て字は誰もなじらない
野の地蔵すんべらぼうの顔に慈悲

高槻市 田崎 あき子

この街と生きる銀杏の実がたわわ
子は夢を限り無く書く白い紙

吹田市 西川 景子

名を呼べば起き出しそなたスマスク
赴任地へ予告もなしに妻がくる

山口県 高崎 雀声

他人には悪妻と言う愛妻家
ライバルの健康少し腹が立ち

米子市 政岡 日枝子

千手観音に仲間外れはぶらさがる

はぐれ鳥樹のふところにきつと来る

日塚市 天行 千代

菊人形鈴の部分は白い菊
澄み渡る空に夫と姉の星

八尾市 高橋 夕花

ケセラ・セラ私に空と水があり
やさしさを少し下さい冬の雨

高槻市 笠嶋 恵美子

さざ波の如きときめき忍び逢い
笹舟の行き着く先の恋の果て

藤井寺市 赤木 和子

確かめてみたくて砂山を登る
秋ひと夜母とおんなを語り合う

和歌山市 中尾 まゆみ

枝わかれわたしが居るの系統樹
ひとこまが消えぬ少女の走馬灯

和歌山市 松原 寿子

ザルでみず掬う慕情と知りながら
残り毛糸もきつと貴方を偲んでる

大阪市 古川 美津枝

約束の共に白髪になりました
いろいろに雨がささやく佗び住まい

大阪市 市場 没食子

金運のある耳でなし鼻でなし
尻尾振る一つ違えば逃げる気で

兵庫県 脇田 米朝

ヒューマニスト一言言えばそれで済み
秋風に蟻よ休んで話そうよ

守口市 岸野 キミ

富田林市 藤田 泰子

愛染帖

橘高薫風選

戦々競々今日も生かされて夕日
人間の上澄みすくく慈喜鍋

名古屋 越村 枯梢

ごつごつの指に馴染んだ握り飯
もう俺も逝くさと友の墓おがむ

笠岡市 木山 遠二

神様のおん計らいと泣けば済む
一円玉へつい混ってた百円貨

青森市 工藤 甲吉

サラサラと連帯の無い砂悲し
戯画に似るくらしは哀しまた佗し

米子市 林 荒介

菩提樹を探した靴が干してある
真向から父の大地に杭を打つ

伊丹市 榎谷 寿馬

兎の耳に告げ口をして安らぎぬ
箸二本あるのがとても無駄に見え

指宿市 渡辺 伊津志

動乱の世界を愁う合歓の花
祖母の織りくれし浴衣は手で洗う

高知県 赤川 菊野

例えればカンナの赤と死人花

米子市

八木千代

もつ一度神さまに逢う滝のみち

和歌山市

西山幸

大声で亡父母を呼ぶ暗い海

大阪市

布施サチコ

逃げ道を確保するため略す主語

西宮市

草薙墮駄

おべっかと傲慢さとは裏表

島根県

藤田軒太楼

駒の出ぬ瓢箪磨く老いの日々

米子市

小西雄々

英雄もきつと死水ほしかろう

岡山県

嘉数兆代賀

甘言へ傾きやすき母の舟

松前市

真喜内實

花見てるそよ風となりそよいでる

浜田市

佐々木裕

独り言鏃に力を入れて振る

富田林市

植松慶子

時々雨にもお礼言つけれど

大阪市

朝倉利義

子と語るふらはめるめにしてももう

今治市

矢野勘一

すぐ出来る合鍵信用できますか

水戸市

上鈴木春枝

美化された私が生きる過去の中

曹津市

仁部四郎

新曲の三番うた向こう見ず

曹津市

久保正敏

嘘多き世に今日からの角隠し

夫がいる只それ丈の事なれど

唐津市

田口虹汀

耳朵の大きな人の高笑い

奈良県

村上春巳

人恋し文箱に青いペンを置く

島根県

林瑞枝

両の手を洗い決断一つ成る

名古屋

藤井高子

君の身じろぎに木屋の香がする

萩屋川市

岸野あやめ

紅葉にポテトチップはそっぽ向く

島根県

松本文子

後列が廻れ右して敵味方

唐津市

浜本久仁於

風鈴を避けて通れぬ秋の風

和歌山市

福本英子

ふくらんでしぼんで希望という蕾

岡山市

川端柳子

佗びしさを誘い青柿落ちつづく

島根県

榎原秀子

手の中に命あずけている小鳥

松原市

佐藤藤子

夕空に柿の青さがとれてくる

益田市

里本たかし

花器の薔薇枯れずに戻る主婦の旅

近江八幡市

前川千賀子

寺で飲む折目正しきコーヒなり

富田林市

岩田美代

好奇心溢れて脱げた赤い靴

泉南郡

坂口公子

鉢植えも大樹の夢は捨てぬまま

西宮市

奥田

オートバイ背なの子供のヘルメット

島根県

小砂

喪服着てよほど嬉しき大揚羽

島根県

堀江

一隅に夢とばそつとランプ買う

萩屋川市

堀江光子

雑草も活けて楽しむ老いの日々

兵庫県

奥野テル

覚悟した電話他人のよつに聞き

愛媛県

八塚三五島

歳事記も歳時記もよし秋が澄み

守口市

羽原静歩

拾台詞気前よく吐き負けとする

和歌山市

桜井千秀

時来るを待つばかりはない柘榴の実

島根県

武田帆雀

浪人は油の抜けた髪でくる

八尾市

山下みつる

綿の花亡母の乳房の匂いする

島根県

堀江芳子

喜びも涙も沁みた家を越す

島根県

堀江正朗

天高き秋だ新居の風吹つて

唐津市

神崎紫泉

サン格拉斯民芸館を覗きおり

吹田市

井上照子

グラス干す他に慰めないように

島根県

清水一保

主義主張イデオロギーに愛がない

鳥取市 森田熊生

岡山県 池田半仙

岡山県 山本玉恵

岡山県 遠雷は切ない恋の別れ唄

岸和田市 原さよ子

大阪市 中兼治郎

堺市 高橋千万里

高石市 牛尾緑良

兵庫県 野々口ゆう也

豊中市 田中正坊

吹田市 栗谷春子

大阪府 萩谷まさ

高知県 曽我部裕

羽咋市 三宅ろ亭

吹田市 西岡豊

正論の一端に部下まるくなる

米子市 菅井とも子

米子市 野坂なみ

亡夫の忌を重ね何時しか秋に付つ

兵庫県 仲井素水

西宮市 津山冬子

和泉市 西岡洛醉

京都市 松川杜的

妻とチャンポンの自画像でも書こうかな

高知県 松岡三吉

はほえみであなたと呼んだのは昔

大阪市 藤森小雅子

ばい捨ての吸殻他人が踏んで行く

大阪市 神夏磯道子

淋しくはないに淋しくさす枯葉

和歌山市 神平狂虎

明日からの手紙はやはり大切に

羽曳野市 天崎只士

窓際が人間変える恐ろしさ

羽曳野市 吉川寿美

もう独りのわたしがきれいな嘘をつく

米子市 澤田千春

武原はん傘寿の芸にゆるぎなし

西宮市 朝山千世子

内孫に筆まめ一人誰に似る

大阪市 上江洲勝子

通り雨遠い波紋が近くなる

高石市 浅野房子

喪の服もアクセサリーに凝る他人さま

宝塚市 丸山よし津

又一つ喜びを買う古い茶器

西宮市 松本一郎

グランドは静か生徒は旅行中

田辺市 染道佳南子

数珠くりの念仏の声黄金色

神戸市 岸脩二

投句先 千560

豊中市中桜塚3-13-15

★ 橘高薫風宛(ハガキに三句宛)

NHK川柳募集

課題「頑固」選者 橘高薫風

締切 12月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局 老後をたのしく係

発表 12月25日(日)ラジオ第一放送

午前10時から



河村日満氏を悼む

昭和58年10月31日歿
告別式・11月2日

梨と酒

東野 大八

薫風さんから「日満さんが亡くなられました」という連絡をうけたとき、率直にいつて私の反応はにぶかったのである。なぜなら、（あんな体軀堂々たる人間が、そう簡単に死ぬものではない）という確然たるかねてからの思い込みが作用してのことであつたと今思ふのである。しかし、床に就いてからにわかには涙が止めどなく溢れ出して困つた。

ぶつさらばうで野放図で、いつもワッハッハと大笑した跡のような笑顔を絶やさなかつた彼。川柳大陸同窓会の参加常連で、何をお

いても真つ先に馳せつけ、私にあうなり痛い握手をぶんぶんやって、死ぬまでこの会合には必ずくるぜ、と脅すようにきめつける。その彼はもういない。忽然と去つた。その潔さを私は感じるだけに、私は独り涙の床の中でむせび続けたのである。

河村日満との出会いは、大陸同窓会の何回目だったか、その集りの資料をついさきごろの水禍で流失し、さぐりようもないが、私の戦前関係した「月刊満州」という雑誌や「川柳大陸」誌上ではつとにおなじみだった。なかなかの達吟家で、いかにも茫洋とした大陸人らしい句を吐いた。戦後は専ら「川柳雑誌」だったが、一体彼が大陸のどこで何をやっていたかは今もってかにもくわからない。

「やあ、あんたが河村日満子か」

「そうや、今は子はないが子供はいるよ」
それだけだった出会いで知つたのは、その時点で鳥取市議だときかされて、（ほう）そう感心したのでおしまい。彼の場合、それだけでコトがすむのだから世話はなかった。

昨年四月川柳塔の祝賀会で、果、薫風、形水正副理事長と彼と私の五人が飲んだのが最後だが、いつに変わらぬその豪酒ぶりに、この人物は先行き相当長生きをするにちがいないと私は酒気活達な彼の貌をたのしそつに眺め入りながらそう確信したことだが、この酒席が私と彼の最後になろうとは……。

「鳥取は梨がうまいよ、そのうち送るぜ」

そういつて別れたあと、梨の季節だと気づいたとたん、ソフトボール程のつかい梨がどかんときた。「柄は大きいが根はやさしい人ね」と老妻が、手に余るその梨をむきながらつぶやいた。今年の第18回大陸同窓会は、「病気で来られん」と当日になって連絡が入った。ナアーニ大したことないよ、とタカをくくった私であった。しかし、悼句を贈ろうとは。

去る人が凍夜に残す梨と酒 大八

日満さんの死を悼む

小林 由多香

遅い夕食をしていた十月三十一日の八時過ぎ、息子さんから訃報を聞いた。

皮肉なことに当日届いたばかりの川柳塔誌の「柳界展望欄」に載っていた「照る日曇る日と同じで、一喜一憂でも少しずつ快くなっていることは確実、まだふらふらする時があります、字が書ける様になりました。」との日満さんの便りを読んだばかりのところであった。

九月中旬に見舞ったのが最後となったが、ベッドにすわって川柳の話ができるまで回復

されている姿に、まさかこれが今生のお別れになろうとは思わぬまま、ひたすら早い再起を祈りつづけていたところである。

戦時中勤務されていた大阪で、麻生路郎師に川柳を教わり、昭和二十年出生地である鳥取にUターンされたと聞いている。

それから日満さんの鳥取での川柳活動が始まっている。二十八年頃、鳥取市内の画廊で月一回開かれていた鳥取川柳会の例会に、森田茗人氏に誘われ出席したのが私と日満さんの出会いである。

不朽洞会員を中心にしたそうそうたる顔ぶれの中で、日満さんの大阪弁での披露に心ひかれたものである。

句会の後は必ずネオン街を飲み歩き、日満、茗人の柳論を聞かされ、川柳を教えられた思ひ出は深い。

川柳をよく研究された日満さんは、県内はもとより県外にも知られており、県内外で開催された記念句会、大会で、十二年間勤められた鳥取市議会議員での経験でもあろうか、

甲 吟

悲しみは砂丘の砂に埋めておく

潮花

朗々とした説得力のある話振りで、川柳の啓蒙発展に力を注がれていた。

その最後となったのが、今年六月五日鳥取県鹿野町で開催された、みか月川柳会結成三周年記念大会での「LG川柳から」である。昭和二十九年九月から三十六年八月までの七年間NHKのラジオを通じて川柳の普及に努められたお話であった。

日本川柳協合理事、川柳塔社参事、鳥取県川柳作家協会会長として鳥取県の川柳会の代表、顔となり、日本全国に鳥取県の川柳を紹介された功績は実に大きなものであり、深いものである。

日満さんの作品は、人間味あふれる温かな句であり、人をうならせるような鋭いものは見当らない。それだけに最近「今頃の句にはついて行けない」と洩らしておられた。

病床からも作句は続けられ、川柳に対する執念が人々に伝えられて涙を誘う。

胃カメラに疲れ果てたよ歳なるか
切られるは覚悟の上のカメラのむ
真夜中の蘇生に妻の顔がある

死にかけていてもジョークは忘れない
一喜一憂妻に無言の日がつづく

鳥取県川柳界の大きな柱を失ってしまったが、来年六月には米子市で日本川柳協会主催

の全国川柳大会が開催されることになってい
る。

日満さん、全国川柳大会はきつときつと大
成功させます。安らかに眠り下さい。

遺族から発表された日満さんの最後の句
みなさらばさらばが聞こえないらしい

日満さんのおとむらい

八 木 千 代

私たちの鳥取県は、また大切なたいせつな
灯を失ってしまった。「川柳は一つ」という
信条のもとに、生前の白柳さんのように、県
下の各柳社の会に顔を出して石を積んで歩か
れたのは茗人さんであった。その間、日満さ

んは実に謙虚に背後を支えていられる感じだ
った。今、県下では柳社のちがいを対抗意識
として持つ川柳家は少ない。日満会長という
広い大きな傘の下で親しみ合うことをくあ
たりまゝとして、その素晴らしいことにすら気

付くものも少ない。日満スマイルと呼ばれて
いた人懐っこい笑顔、おおらかな人柄、時候
見舞の葉書一枚にさえ几帳面な早い返事、前
向きで大筋を立てながら一人ひとりへの細や
かな心くばり、義理がたい性格、まさに大樹

であった。

十一月二日鳥取市叶の旧国道沿いのお宅で
行われた葬儀には、全県の柳人の殆んどが集
まった。かけがえのない人を失ったという哀
惜を全身にあらわして集ってきた。日満さん
のハーモニカの音を耳の底に抱きしめ、日満
さんの笑顔を眼の底にしまいこんでいる姿は
かりであった。昔からのしきたり通りの葬式
「まいそつ」の鉦（なぜそう言うのか私は知ら
ない）いま、ほとけとなろうとする魂が、こ
の廻り鉦の音にみちびかれてこの世の別れを
村中にしてあるのだろうか。それとも、あ
の世へ向う魂を迷いのないように引きかえせ
ないように、目くらましするための鉦であろ
うか。いずれにしても平安な旅路を祈る情け
だと思ふ。

本社をはじめ生前の交誼の幅を語る供花が
いっぱい、の玄関から古式通りの「せん」のつな
（禪の綱と書くのかも知れぬ）に曳かれて、
柩は秋風の中に運び出されてきた。

おとむらいとは、このような葬をいうので
はないだろうか。全国の川柳作家から寄せら
れた夥しい弔吟弔電の数は万巻の経にもまし
て、日満さんの昇天を悲しみ悼み、鎮魂歌と
なつて日満さんといっしょに雲の峰へ吸われ
て行くようだった。

湯豆腐がいきなり崩れ雨になる 千代

田中好啓古希祝賀

記念川柳大会

日時 昭和58年12月11日(日) 12時開場
会場 倉敷市労働会館

倉敷市桶町5-38

TEL 0864-25-0873

兼題と選者

好き(謝選)

田中 好啓
(未定)

亀

紙

耳

月日

紫

各題2句・締切午後1時

賞

記念品

賞費

懇親宴

終了後(5時頃より)

昼食は各自おすませ下さい。

主催

会費

主催

かすみ川柳会

沖の石川柳社

好啓古希祝賀実行委員会

賞品

賞費

懇親宴

終了後(5時頃より)

師走の思い出

布施 サチコ

「さあさあお買いやす。今年も最後の運だめし、たったの二十円で一等なら千円当たるスピードくじどっせ」

くじ売りのおばさんがとなっていた。

時は昭和二十四年の十二月、所は京都の新京極、師走の風が冷たく吹き抜ける繁華街の街頭である。通行人たちは足を止め、三角形のくじを買い求めているその場で開いて見ているが、簡単に当たりそうにないことは、そのあたり一帯に散乱する空くじの数でわかる。

「姉さん、十円ずつ出しあってスピードくじ買おうな。当たったら半分っこしよう」

中学二年だった弟が言った。

「嫌や。当たらんから止めときよし」

高校二年だった私は、みすみす損をするのが惜しかった。

その日、私と弟は久しぶりに映画を見に行く途中だった。学校は冬休みに入り、大人たちの気忙しさとは縁のないのかな一日だった。ただ懐はさみしくて、嵯峨野の家から四

条大宮までの往復電車賃、映画代を払えば小遣いは何ほども残らない。四条大宮から新京極まで歩くには半時間ほどしかかるのだが、電車賃を浮かすため、てくてくやってきたのである。だのに十円捨てるようなことはしたくない。

「そやけど、誰かに当たるはずやんか。スカでもチューインガムをくれるんやし」

「ガムって、たったの一枚え。あんたが食べるつもりやろ。あはらし」

と言ったものの、弟の懇望もだしがたく、私はしぶしぶながら大枚十円を出したのである。

「当たりイー、大当たりや」

おばさんの大声に驚いた私たちは、たちまち野次馬連に囲まれてしまった。

「このお子たちに一等が当たりましたでえ」千円札は高くかざされ、当たりくじのPRが一しきりなされてから、弟の手に渡った。

「わあ、もつけよったなあ」

「当たる者もあるんやなあ、チキショー」大勢にじろじろ眺められ、私は怖くなってきた。弟も青ざめて「帰ろうよ」と言う。せっかくなにやっつけてきた映画を諦めて、私たちは急ぎ足で帰路についてた。

「そっやったんか。けど、運のええことや」

NHKテレビ全国放映

「初春川柳合戦(仮題)」

昭和五十九年一月一日午前十一時から
の番組で、今回の題(テーマ)は「おとこ・おんな」と決まりました。ふるって電話でご応募下さい。ご協力の程をお願い致します。

前回と同じに句集も発行されます。

橘 高 薫 風

ふだん気難しい父が、私たちの話を聞くと珍しく相好を崩した。そして「実はお父さんもな」と、居間の額の裏から何やら出してきた。貯金通帳だった。

「特別手当をたくさん貰うてな」

「まあ、内緒でへそくりですか」

抗議する母へ、父は頭をかきながら、

「余分やから何かの用意に貯金したんや」と笑った。年の暮れにお金が転がりこむ、ほんまに結構な話やと家中で笑ったのだが、その笑声の背後に、不幸がひそんでいようとは誰も気づくはずがなかった。

無類の働き者だった父が倒れ、手遅れのガ

ンとわかったのはそれから間なしかった。そうして翌年の初夏、四十代で不遇な一生を閉じたのである。

禍福はあざなえる縄の如し、というが僥倖のもたらす恐ろしさといった思いを拭い切れずに過ごしてきた。

他人様は知らず、私の場合は、労して得た相応の報酬だけが本物だという気がする。銀行員の弟は「他人の札束は金に見えない」と言うが、やはり私に似た気持だろう。

あれから三十数年経て、私も父の行年を越した。つましくとも一家が健康で年の瀬を越せますように、達者で又来年も暮らせますように、と何よりも念じている。

切り抜けた日を手繰りつつ第九聴く
気がつけば父の遺影の若いこと

湖北の秋

栗谷春子

今年の秋、私達兄弟とその配偶者、合計十一人のグループで、湖北の十一面観音さまを巡りました。訪れたのは渡岸寺、石道寺、雞足寺、医王寺の四つの御堂でした。

井上靖氏の「星と祭り」を読んですっかり魅せられ、数年前にも同じ道順を少人数で巡りました。

こんな所まで変りはないと思っていた里の小径にも僅かながら風情が変り、仏様にお変りはなくても安置されているお堂が変わっていたり、村の人の説明をと思っていたのがテープになったりで淋しく感じたこともありました。それでも観音さまの美しさ、さわやかに新たな心を打たれました。

その夜は水上勉氏の「湖の琴」の余呉湖畔に夢を結びました。

霧に煙って水墨画のような余呉湖の全景の見える部屋で、まったりした美味の地酒「七本槍」に、最年少が還暦、最年長（会長）が喜寿という年齢層がみんな何十歳も若くなつて、よくはしやぎ、よく笑いました。

はしやぎながらの序に会長に、

「兄さんは最後まで残つてみんなを見とどけて下さいね」と言いますと、

「そんな事、ようわかつとる」と力強い言葉が返つて来たので私はとても嬉しくなつてしまいました。

喜寿でなお聴診器を握っている兄なのです。今年の楽しみの終る頃、もう皆で来年の行先の相談がはじまっていました。

川柳塔社常任理事会(11月1日)

出席者・葉・薫風・柳宏子・水客・紫

香・潮花・太茂津・鬼遊・岳人・吸江・

天笑・凡九郎・寿馬・笛生・史好

《議事並に報告事項》

★河村日満氏が10月31日亡くなられた。悲報相次ぐ秋である。

★句集完成を目前にして亡くなった香川酔々氏の遺志をつぎ、有志の手で句集「光背」が発刊の運びとなった。(来年2月刊行予定)ご期待を乞う。

★59年1月15日の新春おめでとう会は表紙裏掲載の如く決定。

★59年2月川柳塔は誌寿60年、めでたく還暦を迎える。これを記念して同人・誌友総参加の句集を発刊することになった。詳細は逐次発表。

★米沢晩明氏(大洲市)の同人を承認。同氏には参事として活躍願うこととなつた。

■12月の常任理事会は1日(木)

花 道

川口弘生選

花道で一笑させて幕があく 豊

花道を来る人待つプレゼント 赤木和子

花道を勝った力士の無愛想 達一郎

花道で足早になる負力士 素身郎

花道を金星肩で風を切り 一正

七三へ来て馳落ちはふり返り 静子

花道を足早に行く敵役 武庫坊

花道の縞の合羽は振り向かず 本蔭棒

花道を端役黙って通り抜け 佳雲

花道へみんな振り向く下駄の音 兼治郎

花道の台詞が涙またさそう 照子

花道の芸を生かしている奈落 規不風

花道に役者の汗の染みの跡 公一

惜しまれて花道を去るちびた靴 里風

花道が一つもあつた天下り 雅風

退官の花道飾る名講義 正之

父ちゃんに花道はない農守の 悠泉

花道を歩いたけれど馬の脚 幸一

定退の花道せまし平社員 星斗

花道に涙の壺をおいておく 年代

花道に赤信号がついてある 勝美

花道を通るきれいな恋が欲し 文彦

花道を大きな花束泣いている 天彦

花道に賭ける男の出世欲 多賀子

男なら六方踏める場が欲しい だし

肩書きがとれて花道欲しくなり 山久

引退の花道他人の手は借りず 利義

花道を抜けるとカツラ重くなり 三吉

拍手沸く花道なれば胸を張り 素石

花道で拍手の嵐に背を押され 七面山

惜しまれて去る花道を踏める幸 胡顔子

花道のまん中辺りでたたら踏む 枯梢

ど忘れを事もあろうに花道で 景子

負け犬となる花道を走り抜け 代仕男

花道へ妻が一人でする拍手 文平

花道の拍手は妻に捧げよう 寿美

花道が涙でかすむ黄授章 御前

恋車はずんで花道それてゆく 公子

人生の花道子も連れ孫も連れ 与呂志

戦死した子へ花道を引返す 可住

花道のなかつた母の忌の香華 右近

花道は畑にもあるネギ坊主 耕花

句碑除幕男の花道かも知らず 弘朗

花道を降りると迷路へ突き当る 雄々

花道の向う檜山雪が降り 宵明

妻の手を取ろう花道へかかるとき 満津子

花道で味方が一人去って行く 重人

花道に母の拍手がいつまでも 道子

軸

あんたまでしてらんかなど花道で

妻

河内月子選

花屋から妻へ電話がよくかかり 明水

新聞とチラシと分けて妻と見る 不二

里帰り中も電話で起す妻 やすお

老妻をやつと説き伏せフルムン 志保

浴衣着た妻を探して地蔵盆 三千代

はおずきが真赤にうれて妻となる ゆきとし

妻の爪いつも短く切つてある 恵美子

どこからか芽が出る妻の庭がある 保夫

隅々に妻の重石は効いていた 久仁於

甘えてるふりで見るとこ見ている妻 佳雲

女僕とも言わせた妻も丸く老い 冬子

妻と来た日のパチンコが這入らない 耕花

妻といてだまつたままの日曜日 不二

正直な鏡と喋べる妻の皺 カズエ

妻という字がそんなに重いとは 年代

妻よりも母の部分で生きた女 倫子

左遷にも心の杖となつた妻 テルミ

人妻の世話をしすぎて叱られる 弘朗

とりかえてみたいと妻も思つてゐる 四郎

妻だけは僕の味方でいてほしい 実男

女旅ビールがうまいと妻電話はじめ

年金のくらしに妻も肩並べ
愛妻が運んでくれる四季の風
妻の目は夫の死角によくとき
助手席に乗る妻何時も何か喰べ
妻の座にあこがれていた頃もあり
振り向けばいつでも妻が居る安堵
今日も妻空気のように傍にいる
「ハイ、ハイ」と二つ返事の妻多忙
恐妻を旗じるしとして飲んでい
仏壇の妻は笑ってばかりいる
四十年添うた妻でも知らぬこと
妻の留守結局何もせず終り
柔順な妻にいつしか飼育され
玄関でわざとネクタイ触わる妻
やがて止む風と妻は馴れている

住

妻といく櫓山までの地図を描く
くたびれた妻の寝息の早い秋
出来すぎた夫に翳んでみたり妻
ヘッドホン妻の愚痴からうまく逃げ
味噌汁にねぎが浮んで妻がいて

人

夫には大きな保険かけている
老妻とナンバあたりで待ち合わせ
妻素顔大きな口でたべている
焼き芋とラジオが好き妻の午後

地

満津子
重人
三吉

天

軸

狸村
道子
墮駄
よ志子
泰子
右近
ふみ
多賀子
晴彦
幸一
千秀
胡頼子
明水
ゆう也

測る

浜野奇童選

男手で測ると米が早よう切れ
深測が読めぬスケール短こうて
メモ通り測って味の気に入らず
コツコツの努力主観で測られる
それとなく背の高さを測って来
領海を測ると火薬の匂いする
抱きついてバストを測る洋服屋
愛情を測る女の及び腰
腕組んで返事の間合い測ってる
推測がお門違いの的を射る
測られているとも知らずよく喋り
ライバルの憶測背なで音を立て
どう測っても我が家の庭は一坪で
憶測が尾を引いている日の誤算
掌のひらで測り秤で確かめる
一滴もこぼさず測るコップ酒
愛情を測るボールを立てて見る
目測が半分それた眼鏡拭く
目分量ちよつとちよつと測り足す
計量のミス体重を軽く記す
一步二歩歩幅を嬉しく測る試歩
胸の内女は芝居して測り
変る世を測り損ねた老いの尺

可住
虹汀
三吉
保夫
伊津志
武水
一止
浪速子
正坊
代仕男
はじめ
森脇和子
重人
玉恵
カズエ
雄々
木魚
天彦
裕
文子
優
胡頼子
ゆう也

体
重
計
乙
女
心
も
測
っ
て
る
久
子
武
庫
坊
ど
ん
く
晴
彦
七
面
山
兼
治
郎
素
石
壽
美
与
呂
志
佳
雲
か
す
み
景
子
泰
子

計測の範囲の中に住む不安
人の土地暗算してみる測量士
手に乗せて金の真偽がはかられる
測られて測って夫婦の無事な日々
億劫な血圧測る午下り
ライバルの家の広さを目で測り
頃合いを測って母の助け舟
義理測るように祝儀を積み重ね
頃合いを測り仲人座を外し
ヘルメーターこわごわのぞく秋です
何くわぬ顔で深さを石一つ
伸び縮みする物差で測ってる

住

測量の杭へ荒地の値が跳ねる
測られている眼へ座布団片付ける
老人の咳が測った夜の深さ
目測の距離で女豹は身構える
灯を消して海の深さをたしかめる
流れ矢の距離を測っている他人
ネオン川深さ測れぬまま溺れ
一步だけ測ったように師をたてる
子に目盛見せて一匙だけ加え

人

本蔭棒
文平
宵明
久仁於
御前
佳雲
里風
与呂志

地

天

軸

久子
武庫坊
どんく
晴彦
七面山
兼治郎
素石
壽美
与呂志
佳雲
かすみ
景子
泰子

— 63 —

初歩教室

題 — 反 省 —

本田恵二朗

反省した窓へ俄雨零 たちし

(反省の窓へ雨垂れりズミカル)

反省した子供部屋の一輪差し 同

(反省した子の部屋一輪差しやり)

反省の聲で湯かけん聞いている 歌子

ファッションに初めて反省するボディ 同

(ファッションショ)

反省させるボディライン 脩二

(反省の色ありありと庭の石)

(反省の色庭石に見つめられ)

反省をしすぎて進むこと忘れ 同

(反省をしすぎて二の足踏むばかり)

(反省が堂々巡りばかりして)

反省の境地さわやか嫁姑 サワ子

(さわやかに反省し合う嫁姑)

反省を重ねて今は楽隠居 同

(反省を重ねた余生の青い空)

言い過ぎて後でひそかに臍を噛む 志津

(言い過ぎた後味苦く噛みしめる)

反省の材料に事欠かず古稀 同

(反省材料どっさり背負って古稀の坂)

一日を湯舟の中で反省し 吉子

(一日の反省湯舟に浮かばせる)

反省にいつか亡き母呼んでいる 同

(反省をする時そこに亡母がいる)

反省の色ないそぶりに手をあげる よし津

(反省の色まだ現れずじらされる)

反省はするが実行出来ませぬ 同

(反省へ実行力がついて来ず)

反省の色なく酒を欲しがる胃 照子

(反省の色なく酒を欲しがる胃)

(反省の窓覗き込むなまけ癖)

反省の時を与える母やさし ふみ

(反省のチャンスつかます母性愛)

子の非行反省するのは両親か 同

(子の非行へ反省すべきは親の方)

反省の反省が要るお人好し ちよ

(反省を繰返しつつ年重ね)

反省を重ね年輪円くなり 琴柱

(他言して反省の色顔に出る)

(誘惑に負けて反省身にしみる)

誘惑に勝てず反省にせめられる まさ

(誘惑に勝てず反省にせめられる)

反省の裏に住んでる自己嫌悪 同

(反省の裏でうごめく自己嫌悪)

反省の言葉ですぐに騙される キミ

(反省の言葉にまんまと騙される)

反省が重なり合って円くなり 同

(反省の風反省しつづ涙冷たし)

(反省の涙へ秋の冷えまさる) 兼治郎

お互いに反省のない離婚沙汰

(反省を知らぬ同士の離婚劇)

再入院してからベッドで反省し 同

(再入院して反省に突き当り)

反省はおなかの中へ忘れたな みつる

(反省をおなかの中に置き忘れ)

角柴に反省の二字送りたい 同

反省の色が読めない厚化粧

反省へ同じ台詞でかたをつけ 春枝

(反省をさせる台詞を飽きられる)

反省がもう間に合わぬ社の規則 保夫

(反省は充分見られるという示談)

官判部下を信じて押した悔い 昭治

生きざまを振返つたら悔いだらけ

(振返って見れば生きざま悔いだらけ)

ガミガミと反省の機を失わせ あや子

終い風呂反省の垢すり落す

反省の垢すり落すしまい風呂 同

反省は三日坊主のまとも酔い 一止

(三日坊主の反省が酔いつぶれ)

反省会敗因微に入り細に入り 同

(反省会敗因根掘り葉掘りする)

反省をしてからファイト湧いてくる 山久

(反省をした後ファイト盛り上り)

反省をしてから先が見え始め 同

(反省の瞼に希望の光りさす)

反省を息子に代って母がする 忠広

反省を素直にさせる褒め言葉

同

(すらすらと反省させた褒め言葉)

反省が感謝に変わり光り出す

柳右子

(反省が感謝に変わって光りそめ)

反省を忘れた日の三りんば

同

(反省をつい忘れてた三りんば)

反省をさせる余裕をちよつとやり

芳水

(反省をさせる余裕を添えてやり)

反省もしてますちよつとふてくされ

同

(ちゃんと反省してますわよとふてくされ)

反抗期反省の色なく背を向ける

貞子

(言い過ぎを別の私に責められる)

敗戦の反省薄れてまた軍備

やすお

角栄の辞書に反省の二字が無い

同

反省をすれば脇道だとわかり

紀久子

(反省がこは脇道だと見つけ)

反省を母はじつと待っている

同

(母なればこそ反省を飽きす待ち)

反省がまだまだ足りぬ砂時計

同

反省を日記にだけはしかと書き

柳五郎

反省の余地も与えずつるしあげ

同

反省の声張り上げる常習者

幸泉

災害のあとから反省つて来る

同

カレンダーに残る反省多き日

美津枝

(カレンダーめくれば反省が追いかける)

夕食時さらつと反省語り合う

同

(反省をし合う夕餉の円い膳)

反省の中に我執を閉じ込める

寿美

反省をたつぷり詰めた旅靴

同

灯を消して今日一日を振り返る

同

反省の辛さがフアイトかき立てる

同

反省はする度特殊な味がする

同

(反省は噛めば噛むほど味が湧く)

反省のおかげで過去が生きて来る

同

名目は反省会という飲み仲間

軒太楼

(建前は反省会 本音は一杯会)

反省へ無言の妻の手内職

同

(反省へ妻は黙々手内職)

反省へ誰も閑魔にはなれぬ

武水

反省の過ぎた卑屈へ愛の鞭

同

反省をせぬから反省強いられる

同

反省の手紙に小さな字を詰める

同

反省の色は何色塗りましよう

同

(反省の色を静かに選るしじま)

大小をとわず反省の日である

久子

事起きて後の反省がかしこく

同

(事件後の反省やたらにがなり立て)

反省会人の顔色読んでいる

勝美

(反省会互いに顔色読み合つて)

反省がはつきり出て来た棒グラフ

同

反省があすへ飛躍の糧となり

同

反省の子がさわやかな朝にする

同

反省の心を閉さすうしろ指

同

そつとして反省を待つ反抗期

同

(反抗期へそつと反省待ってやり)

言い過ぎた言葉が夜を眠らせぬ

同

(コップ酒の底に反省置き忘れ)

反省の悔いといかりを繰り返し

玉恵

廻れ右すれば反省またも逃げ

同

反省の手応えしかとつぶらな瞳

同

反省も早いと忘れるのも早い

同

反省を重ねて一皮脱いでゆく

同

(脱皮するように反省繰り返す)

反省のそこに安らぐ着い海

寿子

反省の答ひとます貝になる

同

反省の中に一途な愛を抱き

同

(恵二朗短信)

拙著『川柳談話室』を発行しまして二カ月で、予定の部数が出払ってしまいました。温かい支援へ心から感謝申し上げます。

題 運 12月20日締切(2月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四

⑦七一 本 田 恵 二 朗

「夜市川柳」募集

第七回 「的」 墨 作二郎 選

締切 12月31日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方 堺川柳会

柳界展望

集録・板尾岳人

が発行された。

★来春1月1日11時から、

『初春川柳合戦』を企画中。

茶の間とスタジオを結んで

日本列島に川柳旋風をまき

おこす計画。12月中旬に、

テレビ、ラジオで課題を発

表する予定。

▽お便り△

■「川柳新聞」九月号は、

紙面の三分の一に論評を載

せてはいたが、五十分間空

廻りNHK放送の「川柳天

国」の見出しの、五十分空

廻りとは、言葉が過ぎては

いないだろうか。一人では

何も出来ないし、腕組みを

していても何も出来ないの

では。

（山内静水）

■秋の信州を旅行して山男

のメッカ上高地から白骨温

泉を廻り川柳材料を得る。

白骨の湯をキャンバスに舞

う紅葉

（内海幸生）

■表通りから松土手まで土

地が五五米、一往復で百米

部屋も六畳が四間、八畳が

六間あり、正朗も大分馴れ

ましたが、とても爽やかで

す。（堀江芳子）

■拙著「六塵」をご紹介頂

きまして有難く御礼申上げ

ます。本を出すときは一人

でも多くの方に読んで貰い

たいのは本を作る者の本音

です。（丸山弓削平）

■おかげさまで被災後二十

日を迎え新しいタタミを

入れ、落ちたカベを補修し

古カーテンで囲んでいます。

土建家が建てかえるより建

てた方が安上りといいますが、

来春アレハブでも建

てかえようかと考えていま

す。塔の皆さんの絶大なる

御支援に感謝いたします。

（東野大八）

■湖西めぐり吟行をすばら

しい受賞会にして頂きま

して感謝、わたし達も充実

した気持ちで帰阪いたしました。

（神夏磯道子）

■新子百句集順調に進んで

います。（時実新子）

■川口弘生先生受賞句会の

湖西めぐり吟行、大へん有

意義な一日でした。長命寺

にて、八百段無事で嬉しい

ごあいさつ

9・28の木曽川氾濫の被災に際しましては、
真心こもるあたたかな御侠援を賜りました皆
様方に対し、ここにこころかなる謝意を表
する次第です。ありがとうございました。

東野大八

お賽銭。(本間満津子)

が元気です。

■川柳界も色色とさわがし

くなりました。

うかうかと人を教した花の

辻

(前田美巳代)

■12月の小生の祝賀句会に

東京の日川協会長も駆けつ

けて下さることなので茶六

さんを囲む前夜祭を計画致

して居ります。塔の方々も

多数御参加下さることをお

待ちしております。

妻ひとり愛し通してきた指

紋

(田中好啓)

■トルコはやはり遠い国で

す。これからエーゲ海に出

発の予定で。食事が口に

合わずチョッピリ不満です

礼申し上げます。

新同人紹介

米

沢 暁

明

——大八・栗・薫風推薦

——薫風・弘生・鬼遊・岳人推薦

(原 独仙)

■ほんとうにありがたうござ

いました。あなたの面影

を涙腺に描きながら衷心か

ら厚く御礼申し上げます。

(尼 緑之助)

■その後も尼主幹元氣にて

川柳に東奔西走続けており

ますので御安心下さい。

(久家代仕男)

■酔々先生の御不幸あまり

のご急逝にびっくりいたし

ております。つくづくと命

のはかなさを感じます。

(大道美乙女)

■酔々さん亡き後、一層皆

様の御仕事が増えて大変な

事と存じます。何んの手伝

いも出来ませす心苦しく想

っております。

(内芝登志代)

■妻にねこまれてまして、も

う大体快くなりましたが、

私の方が疲れきりまして、

本社句会や川柳大会にも欠

席目重しております。

(若宮武雄)

■酔々さんを失い痛恨の極

みです。私も過去幾度か酔

々さんから文通の中であ

いろ教えられました。明晰

で大変ロジカルな分析をさ

れ、学究肌でこよなく酒を

愛でられた才人であられた

と思います。感無量です。

(中村ゆきを)

■私のような暢気者はい

までもはびこっております

が、酔々さんの早逝は甚だ

惜しまれます。

(傍島静馬)

▽句会案内△

■菜の花句会(香川酔々追

悼句会)

時・12月10日(土)夕6時

所・西郷会館

兼題「針」「まっすぐ」

「帽子」「都会」「他人」

■南大阪川柳会

時・12月19日(月)午後6時

所・寺田町高松会館

兼題「厄介」「忙しい」

「湯」「援助」

■東大阪川柳会

時・12月15日(木)午後6時

所・南海会館

兼題「助役」「寺」「味」

川柳折々のうた

『なにわ川柳この一句』

中 尾 藻 介

寝ぼけ眼で電話に出ると、薫風さんの声だ。「遅いのにすんません……堺の刑務所の桜は有名らしいけど、どこに咲いてますのや」そんな電話には馴れっこなので慌てない。正門前の小公園で、それは美事なものだと教えてあげる。そして、ハハアなにわ川柳「この一句」のための取材だと分る。

昭和五十五年七月一日から、朝日新聞朝刊（大阪版）の片隅に、鑑賞文を添えて、代表的な川柳作品が連日紹介されるようになったとき、やっと川柳が桧舞台に登ったと感じなかつた大阪の川柳人は皆無だろう。かの定金冬二ですら朝日新聞に購読を替えたと聞く。朝日新聞の一面には大分以前から詩人大岡信執筆の「折々のうた」が連載され、もちろん愛読しているのだが、どうしてかそこに川柳作品は姿を現わさない。川柳は卑俗なもの

とるに足りないもの——の先入感が、この大詩人の博識にすらフタをしているのであろうか。なにわ川柳「この一句」は、川柳人のこの歎きが神に通じ、朝日新聞社を動かしたとすら思った位である。

「名句とされる川柳」「歴史的価値を持つ川柳」「好作家とされたわたれた人たちの代表的作品」が次々と掲載された。有名無名を問わず、川柳ならではの表現し得ない珠玉の作品が連日のように妍を競った。

それらは、川柳を作ろうとしない人にも、「ホホウ」と声に出して読まれた朝がある苦である。そして、三年間はまたたく間に経った。

執筆者橘高薫風が、自分で選び出し、自分で鑑賞文を添えた五百句を、一冊の書にまとめようと考えたのは、当然というより必然の道というべきであらう。

朝日カルチャーセンター刊・橘高薫風 著
《なにわ川柳・この一句》は、装いも新たに今、私の目の前に置かれている。

好きだった人に再会する気持ちで頁を開く。新聞紙面掲載のときと違って、活字もずっと大きく、一頁三句建てで読みよい。

読み返すのはゆっくりでよいので、パラパラと頁を繰ってゆく。さすがに師麻生路郎の

句が多い。葭乃夫人の句も影に沿うように出てくる。岸本水府の句は当然大阪代表の顔で随所に現われる。豆萩の先に豆萩なく、豆萩のあとに豆萩なし（これは私が言うのだが）の須崎豆萩の句が名句総ざらえのように私をよここばす。その辺りが句の数では四天王に思えるが、五百句もあるのだから、あの人も、この人もと神経休まらぬ感じ。よくもここまで、鳥瞰的に人と作品を配置し得たものだと最後に感心して終う。人の句をよく読んでいること。一べん頭に入れたら、いつでも抽斗から引出せることの二つに尽きるのだろうか。ここまで感想を書いて来て、最も大切な鑑賞文の素晴らしさにまだ触れてないのに気付いた。ここに一つだけ載せる。

悪人の遠い記憶にある絵本

石川 勝

《幼い頃に読んだ明るく純粋な絵本の一こまが、現在置かれている暗い環境の脳裏に想起される。この明暗、善悪の対照は、トンネルの闇から出口の小さな光明を望む形をしいて温かだ。本が人に与える不思議な影響力と、作者自身の善が句の裏に存在する。》

一句、一句の底にあるものを心をこめて説く姿は、まるで求道者の姿だ。

今度は、どんな電話がかかってくるのだろう。

香川酔々追悼

本社 十一月句会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

酔々さんが亡くなり、その涙も乾かぬ内、鳥取から河村日満さん死去の悲報来る。全員黙禱を捧げる。未亡人香川美代子さんから挨拶があり、今日のおはなしは柳宏子氏の「酔々君の思い出」。

彼の思い出の第一は、頭の切れる人、そしてフアイトに満ちた人だったこと。あの独特の呼名はあまりにも有名だが、スイースイと呼名するときの目の光にお気づきの方があるだろうか。私には今もその輝きが臉に焼きついている。恐らくあれは彼の勝関だったに違いない。誰とでも肩をたき、酒をくみかわし、やさしい笑顔ではあったが、心の中ではたえず相手にフアイトを燃やしライバル視していたのではなかろうか。

彼の麻雀は、負けもしない代り勝ちもしない。

い。専門が数学で計算に明るすぎたからではないかと思うが、下手な私がいまだに負けることがなかったのは、そんな彼のおかげかもしれない。

今月の初出席は清水康恵さん（大阪市）、杉本和子さん（大阪市）。

今月の月間賞は小出智子さんが獲得。

（史好記）

（受付—与呂志・重人）

（進行—岳人）（記録—射月芳・健司）

出席者—与呂志・兼治郎・薫風・寿馬・勝美・只士・寿美・滋雀・三男・蕉露・庸佑・紫香・潮花・水客・郁榮・幸・きみ・保・柳宏子・金太・満津子・道子・英子・敏・柳伸山久・重人・右近・登志代・光代・喜風・智子・智慧子・柳太・夕花・比呂志・凡九郎・鬼遊・柳右子・冬葉・月子・翠公・春江・はつ絵・狸村・花村・武助・悦郎・規不風・春蘭・吸江・幸雄・美幸・浩一郎・勝晴・甘平トメ子・栞・史好・柳影・みつ子・泰子・萬的・楓葉・一二三・たつお・三十四・風童・洋子・藤子・静歩・頂留子・杉本和子・寿子・射月芳・景子・健司・康恵・度・雀踊子・吐来・文秋・岳人・美智子・鎮彦

席題「声」

中田 たつお 選

もう聞けぬあの声耳の底にあり
逆転の一聲声も出ぬベンチ
電話での声はやっぱり親子です
濁流に吞まれる声が聞きとれず
声に出すと色褪せてゆく愛の文字
子言者の声は素直に聞いておく
罪ひとつ声なき声が聞こえ出す
禁酒禁煙かけ声だけの父の靴
泣いている声ではないと鼻をかむ
善人の怒り大声出している
立志伝呱呱の声から書き下ろし
小声でも聞こえてきます良い噂
秒読みの声が聞こえてくるあせり
言い分けをするには地声大きすぎ
ギキブリへ声も出さない妻が居て
虫の声さびれて母の冬支度
自信もつ男静かにものを言う
おい戦友声をかけた兵馬備
難聴へ内緒話をもつてくる
期待するもう一と声が掛からない
個性のある声でばち売れる歌手
新しい夜明けの音がするデイスコ
身に覚えあるので声がつきささる
督促の声があたりへ気を遣い
声がわりしてから母を遠ざける

光代 柳影 武助 紫香 みつ子 英子 みつ子 冬葉 文秋 吐来 健司 藤子 登志代 郁榮 太茂津 勝美 翠公 文秋 寿馬 満津子 一二三 夕花

たかぶった声で善人訴える

本当の声は出せない風見鶏

やさしさがはしばしにある母の声

温かい声から逃げる雪女

せめてもの歌が遺っているテープ

怒鳴りちらして虚しい風があるばかり

猫なで声を出しているのはユタだろう

やさしいときはばかりではない妻の声

糸電話声が届かぬ日の焦り

声のない声におびえている悪夢

父の声大きくなって来る不安

母想うどこかで母の声がする

声に出ぬ怒りを妻が持っていた

雄兵の声を集めた旗をふる

一喝してから父の目が和こむ

声の遺書残すテープへあらたまる

席題「仲間」

大路美幸選

仲間から仲間へ仲間の計の知らせ

その笑顔仲間と判る温さもつ

悪者の役をいつでも買う仲間

まああの仲間で嘘も我慢する

生きてゆく心が仲間になせないか

できの良い仲間が笛を吹いている

牽制球投げる仲間が居てくれる

みんな良い仲間て花が大好きで

浩一郎

登志代

美幸

泰子

滋雀

郁栄

幸

智子

藤子

吸江

与呂志

鬼遊

雀踊子

雀踊子

規不風

たつお

白鳥もあひるの仲間として育ち

ラッキョウの好きな仲間とカレー食う

この笛を吹けば仲間が寄ってくる

喜びの日も悲しみの日も居る仲間

父母よりも秘密を知っている仲間

叱られるときは仲間の気が揃う

善段着の仲間どうしはよく喋る

仲間には心配ばかりさせている

火星からやがて仲間がやってくる

仲間からひととき強い拍手受け

二次会へ仲間とちらもでかい声

税務署の戻りに仲間とクダを巻き

仲間達あつさりズバリ物を言う

兵馬桶古ーい仲間が甦える

失敗を笑って許すのも仲間

底辺の仲間で強い絆持つ

ポケットの中まで知っている仲間

生きてゆく勇氣仲間からもらう

偏差値の違う仲間が一人いる

よろこびを何十倍にもする仲間

光る星仲間のなかに生き続け

銭のない仲間て遠吠えばかりする

どんぐりの仲間て背比べばかりする

小銭入れ仲間に入れてもらえない

偏差値が動いて仲間はすされる

仲間にはなれぬ男にある尻尾

幸生

景子

度

射月芳

道子

郁栄

夕花

智子

英子

比呂志

萬的

勝晴

敏

太茂津

みつ子

右近

幸生

道子

美智子

智子

寿子

柳太

滋雀

健司

郁栄

雀踊子

楽しげな仲間に向けた背が痛む

一步退く心へ叛いてくる仲間

良い仲間スーブのさめぬ距離に居る

遠吠えに素早く駆けて来る仲間

先頭の顔知らぬまゝ、従いてゆく

このまんまあひるの仲間て終りそう

その辻を曲れば仲間待っている

兼題「昇る」

飯田悦郎選

さいころを振ると絵になる昇り龍

噂になりそつな煙が昇りかけ

いつの間に昇らはったか昼の月

天に昇る夢見つづける天の邪鬼

落選のダルマの上に陽が昇る

よその社の美人と乗った昇降機

機に乗じ上昇気流という杜運

エレベーター昇る不安は持つてない

太陽が昇ると消えていた噂

昇天の友々焼けの雁になる

一筋の煙が昇る秋の天

赤い風船昇つて赤い星となる

昇給の辞令は妻に見せられぬ

昇給をコンピューターは無表情

朝ごはん昇る湯気が今日が明け

死刑因に今日も無慈悲な陽が昇る

風の糸天まで昇る夢がある

光代

悦郎

射月芳

泰子

一三三

洋子

美幸

幸

失名

滋雀

幸生

萬的

敏

紫香

景子

健司

浩一郎

美幸

甘平

智恵子

英子

藤子

幸生

幸生

雀踊子

昇給をしても変らぬ妻の愚痴

吸江

何事もなかったように陽が昇る

射月芳

金があろうとなかろうと陽が昇る

浩一郎

きりん草天まで昇る夢を見る

度

落葉燃す孤独が白く立ち昇る

はつ絵

陽はまさに昇らんとするカメラアイ

武助

太陽が昇ると街が動き出す

潮花

上昇気流に乗ると自分を見失なう

楓楽

破産した朝も明るい陽が昇る

郁榮

悲しみの家にも同じ陽が昇る

満津子

事故事件みんな包んで陽が昇る

柳宏子

天国へ昇りジェット機帰らない

只士

陽が昇るまでが勝負の魚市場

三男

日が昇るたしかに動いている地球

健司

合掌の手よりもれて陽が昇る

三男

瓢々と雲の峯ゆくベレー帽

柳宏子

昇天の霊よ安かれ此の盛会

右近

月昇る浮かんで消えたベレー帽

みつ子

昇天の階段までも酒が好き

英子

呼名が昇る酔々の声雲の峰

太茂津

逆昇る天国哀しいなり運命

悦郎

兼題「酔う」

塩満敏選

酔々と美声が今も耳残る

トメ子

大和路に酔々もうなく秋の風

登志代

酔々の酒は酔うたら冴えてくる

甘平

ライバルが先に浄土で酒に酔う

只士

酔々の句を味わうと酔うてくる

只士

戦争に未だ酔う国が西と北

幸泉

貧に馴れ啄木の詩集に酔っている

優

酔うとすぐおやじの海を歌う父

隆二

下町の玉三郎に酔うもよし

鬼遊

一本の扇子で松鶴酔いつぶれ

たつお

あれこれと迷いミンクに酔うている

英子

途中下車出来ぬ雲海で酔うている

柳影

札束に酔ってレールを踏みはずし

登志代

美術展夫は裸婦に酔うている

道子

ベテン師の言葉にすっかり酔うた欲

景子

アクティ大阪女を酔わす風がある

寿美

スピードに酔って命の無駄づかい

山久

ピオロンに響きにも酔う秋の彩

柳伸

秋の夜を好きな歌手の歌に酔い

美智子

得た椅子に酔えば消えそう道しるべ

寿子

木屋の香に酔う今日の老いたのし

春蘭

逆転のドラマにどっと酔い痴れる

郁榮

愛無限母の情け酔うて秋

美幸

角栄に腹立てすぎた二日酔

史好

酔いかたがとても上手な風見鶏

浩一郎

酔っている女へ蛇が目をさます

鬼遊

バカスとすぐに仲良くなるお人

みつ子

まだ酔わぬ敵へ負けたなとおもっ

春江

酔眼でみるときれいな花名刺

泰子

酔ってても領収証は忘れない

三男

酔い給え君喜びの酒ならば

満津子

酔った夜の電車は座らぬことにする

吸江

庶民酔う可愛いスーちゃんまだ抱いて

与呂志

嫁ぐ娘に父はむつり酔うている

吸江

遣伝子を組みかえたくて酔いつぶれ

度

甘酒に酔う人だから信じよう

柳影

酔うたふりしても此の膝貸しませぬ

潮花

八の字に歩いておれは酔うてない

頂留子

あなたが美人に見えるから酔っている

赤木和子

美女酔うて男が小さく見えてきた

重人

枰酒の角から男酔うて来る

潮花

酔っている酔うていますと酔うていす

柳宏子

酔うているときの天下は俺のもの

智子

酔うた酔うたポストよお前なぜ赤い

史好

美女つれて花見の酒に酔うてきた

敏

兼題「川」

高杉鬼遊選

スイースイ三途の川から聞えぞう

景子

渡る前三途の川で酒を飲む

只士

戦争も恋も流してしまふ川

洋子

流れ流れて母なる川の丸い石

メ女

楮洗う川の水から冬になる

はつ絵

向う岸までは行けない恋と知り

赤木和子

石三つ積んで三途の川とする

寿馬

四面楚歌川の流れを見てるだけ
 ふるさとの川を忘れぬ鮭の鼻
 川向こうのおとき話を聞きにゆく
 農業の以前はこも川魚
 華やかな噂を流す春の川
 流し離川は悲しい顔になる
 六法の割れ目に罪の川がある
 川の字にやすらぎがある鳩時計
 川の底濁れて訃報をまたも聞く
 川やがて海へ出る日の遺書を書く
 川の名が變つて海が近くなる
 逢うたびに川が汚れる深情け
 川のある街で何度も恋をする
 ライバルが川を渡ってくる気配
 ダムは無粋やおもしろない川や
 川に浮く魚の目せめて天を向く
 川海に入る広さで人を寄せつけず
 川口になるころ石も丸くなる
 浮草も無口になった冬の川
 川は流れて一掬を繰り返す
 川も男も流れにはさからえぬ
 川下に住んで斜めに渡る川
 川幅の真中にある国境
 せせらぎへふと立ち止まる秋の耳
 川底の石が生きてる動いてる
 川澄んで悪人などは居ない町

健 司 紫 香 康 恵 雅 風 浩 一郎 潮 花 蕉 露 柳 右子 史 好
 幸 子 英 子 智 子 み つ 子 太 茂 津 花 村 水 客 は つ 絵 幸 度 幸 一

もう一度山が見たいと川思ふ
 鶴匠一代川のこころを知りつくす
 一雫その内川になつてやる
 心にもないことを言う夜の川
 川流れ今日いちにちは何を得し
 君はもう川の彼方に秋の酒
 川上の人を信じるはかはなし
 下町の色に染まつた川の水
 兼題「香」 西 尾 葉 選
 菊の香にむせて遺影のベレー帽
 香簾は酒を供えた方がよい
 菖蒲湯の香りよくぞ日本に生れたる
 波風を鎮めるように香を焚く
 ライバルの香りが鼻につきまとう
 冷戦の夫婦に庭の菊香る
 木屋の香りスラムの夜の救い
 落としたコトコト揺れて亡母の香に
 はうじ茶の香り寡黙の権爺と
 ひとり住む負けそうになるひとりの香
 亡母の香に触れなくなつて着る形見
 パラ園の香りに負ける老夫婦
 さわやかな香りも妻の風呂帰り
 一すじの心香炉の前に坐す
 にこり酒の香り飛驒路に冬が来る
 ふるさとの香が方言からこぼれ

水 客 た つ お 智 子 美 幸 弘 生 智 子 鬼 遊 金 太 太 茂 津 吸 江 道 子 三 男 勝 晴 柳 影 み つ 子 は つ 絵 重 人 武 助 道 子 兼 治 郎 智 恵 子 萬 的 美 幸

金木屋の香にさよならを言いそびれ
 菊が香るとははの法事がやってくる
 香水を変えて童話を追う女
 新妻の香いをもつて里帰り
 菊香う庭でローンの苦を忘れ
 移り香に秋思の詩情湧く任地
 香水は嫌ひ私が消えるから
 香りなき石榴は割れてそつと咲き
 菊の香に歩みを停めた白い杖
 香なりとせめて焚きたい四面楚歌
 残り香にまた鳴り出した胸の鈴
 香りたかい女を僕の妻にする
 ラッシュユから隣り女の香を貰う
 移り香を忍ぶすがのないう別れ
 香焚いておんなの日々を散華する
 磯の香を宅急便で母送り
 磯の香へ女が過去を捨ててにくる
 お見舞いの女香水匂いすぎ
 自意識が過剰で香水ふりすぎる
 試歩一歩一歩土の香確かめる
 落葉焼く香りも嵯峨の奥の寺
 多情心宇野千代香るものを持つ
 ジャスミンの香りを移すしのび逢い
 菊捨てて菊の香りが手に残る
 香煙縷々としてライバルが近く

洋 子 一 二 三 失 名 春 江 優 弘 生 正 坊 墮 駄 一 二 三 静 歩 楓 楽 只 士 滋 雀 潮 花 幸 兼 治 郎 浩 一 郎 史 好 楓 楽 洋 子 萬 的 水 客 た つ お 智 子 槲 杵 (清記・楓楽)

老也樹堂

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

翠洋会

中西兼治郎報

豊作の黄金の稲の低うたれ
霧深く何所に立つのか道しるべ
姥すての夢をみながら今日歩く
へいへいと辞を低うして財を成し
お互いの癖溶け合って共白髪
お別れの心ゆさぶる低い声
色眼鏡かけず自画像描けるかな
悲しみの深さが人をよせつけず
秀吉のはかない夢となった城
うたた寝にとりためのない夢ばかり
低い鼻氣になりません大恋愛
深い仲といわれて火のつく恋心
秘めか川柳とれば何がある
私から川柳とれば何がある

富柳会

藤田

泰子報

住み慣れて鬼も仏も知る素足
翹ぶすべも知らぬ素足の座りだこ
靴の足大地から愛される
つり橋を渡る素足は冬になる
鉢植の鬼灯光るきれいごと

兼治郎
いつを
風童
登志美
景子
照子
光子
宏子
あき子
泰子
恵正
綾子
みづ子
薫風
維久子
澄子
森子
花子
泰子

人買いに鬼灯青いま買われ
蝸牛ひるねも出来ぬ秋日和
蝸牛の背にのり旅をする
甘酒と生姜の様な味な仲
蝸牛涙は殻の中で拭く
絵にならぬ男のはなし昔をのせ
真剣な恋を悪戯で片付ける
悪戯が飯より好きなビカソの目
亡き人が近づいてくる鬼灯市
ふりむくと素足の妻がついてくる
悪戯な風は女性が好きとみえ
風船の軽さを笑う蝸牛

川柳大阪

田中

笑風報

こぼれ落ちそう屋上のピヤホール
雨蛙ホースの水へ鳴いてみせ
盆踊り踊るアホールになってみる
この頃の大黒柱弱くなり
爆弾を抱く氣は男持っている
サラリローン即決にある落し穴
台風が外れて朝顔はつとする
クラーも弱に秋立つ大文字
大地踏む靴に仕事の頃があり
貰っても買う程につくお中元
芋の葉に水玉のせて里の朝
高校の娘浴衣はもう大人
若者を採用職場は若返り
天皇へ総理中元贈るかも
何やかや一口乗れば熨斗袋
盛り塩が今日も上客おいでませ
中元で贈った同じ品届く
行先のメモは文句を言わさない

慶子
千代
きぬ
美佐子
美房
美代
柳太
美緒
勇
冬二
喜醉
岳人
君枝
みつ
キミ
和世
重人
まさ
喜醉
雅巢
洛醉
末坊
金太
三十四
謙翠
与呂志
司
敏
徳松
笑風

女房の浴衣姿に惚れ直し
客去んで又ひっそりと老夫婦
客筋は落ちるが安く飲ます店
もの言わぬお客お盆の仏さま
肩書がとれて中元来ず出さず
コンクリート造りで築城四〇〇年
川柳塔まっつえ
小林孤呂二報
立ち読みの癖貧乏抜けきれず
踵からじわじわ秋が這い上る
慰めの言葉も嘘に聞こえる日
同居人窓辺に小さくシャツを干す
同居人澄ました顔で出掛けだす
慰めるワイングラスがうたい出す
紅緒の下駄踵はみだすほど育ち
同居して鮎が金魚の真似をする
ひかえめな踵踏み絵を踏む氣なし
世代の差同居の中に思い知る
口下手の慰めだから効いてくる
負けボスの痛手をいやす母子猿
立ち読みへうるさく響くレジの音
精一杯背伸びするのは男たち
立ち読みも増えて読書の秋に入り
欠点も長所も同居してわかり
一本の踵ですなた弥次郎兵衛
慰めの言葉が撰れず手を握る
立ち読みで昨日の続き見る頁
慰めの言葉無用と冬木立
一杯ですまぬ梯子の癖をもち
雑兵の踵が冬にひび割れる
ふり向かぬおんな踵を返すとき

天平
道子
本蔭棒
伸子
鉄心
比呂志
鶴丸
寿美子
秀子
満江
春子
芳子
文子
正朗
敏雄
きみえ
鳳人
壯樹
登美也
孤呂二
愚童
昭二
由郎
多賀子
舞吉
荒介
邁児
瑞枝
代仕男

慰めの言葉サハリンでは出せぬ
同居して一つの風船ふくらまず
立ち読みは秋陽はいつか腰の線

菜の花句会

高杉

鬼遊報

判決を待つピーナツに儼がはえ

秋美

浮浪者の明日は明日のボリ袋

覚然坊

街は積木で崩れだす日が近い

冬葉

羽根ふとんの中で情死して見たい

悦郎

種袋未来の地図を秘めている

右近

青い目の客ですし屋の繁昌記

茂雄

給水の水うまかった三宅島

千歩

草いきれ廃墟の町を人や知る

三男

天狗ではないがピノキオの鼻ぐらい

夕花

雑草が生えなくなった日の恐さ

雀踊子

街の中象も私も疲れてる

美幸

借り傘の情に少しぬれてくる

勝美

大胆になってすし屋を出る二人

糸葉

雑草に囲まれ野菊負けてない

鬼遊

街へ行く五十は五十のおしゃれして

幸生

群みちを情けが笑いながら来る

寿馬

そつとしておけば毒草などでない

栗

秋草は萩のみでよし萩の寺

早苗報

へのへものにも鼻のあるものを

西村

にた川柳会

孝華

自信ないのか肩を張る虚勢

登美也

妻うまく貧乏舟の舵をとる

きみえ

壁に耳あり小耳あなどれず

独仙

変り榮えせぬ顔衣替えても

多賀子

涙腺の涸れた女が懇切む

宗則

にぎにぎにバイバイ孫も生きている

幸一

にぎにぎにバイバイ孫も生きている

幸一

にぎにぎにバイバイ孫も生きている

幸一

にぎにぎにバイバイ孫も生きている

幸一

にぎにぎにバイバイ孫も生きている

幸一

にぎにぎにバイバイ孫も生きている

幸一

さあ喰えとザクロ真赤な口を裂き
くやしきの涙は一人になってから
ロケットの本音を聞いた流れ星

米一粒を拾う老農鎌を研ぐ

親を見る条件なく秋の冷え

湯豆腐に一本欲しい秋の音

すすきの穂秋の顔して秋の音

貧乏はしても礼儀の厚い奴

野辺送り血の涙かも彼岸花

男好きする鼻筋へ風が舞う

貧しさを父にせめるのはよそ

誘われたことに言い訳して帰宅

川柳高知

また今日も同じ台詞で朝を出る

高笑い残して去った見舞客

熱帯夜池では鯉のダイビング

皆去んでやっと身内へひざ崩す

四五日を癌の誤診が振り廻し

裏庭で話の続くにちに草

魚屋の釣り銭魚が匂うてる

市場龍刺身が腐る程裸り

淋しさが悪い誘いを断われず

後釜をねらう笑顔の低姿勢

母病んで母の笑顔が欲しいなり

勝利者の笑顔に白い歯がこぼれ

鍵つ子が一人残ったかくれんぼ

鍵穴の向うに見えたあるドラマ

洗濯機の中に玄関の鍵がある

空ピンをよんでる妻の目と出合い

川柳後案

亡き父の忘れ形見の温かさ

井上柳五郎報

和夫

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

夢酔

年とって忘れ物だけ達者すぎ
一步出て忘却の詩囃みしめる
愛の鞭大きな拳忘れたい

懸命なおしやれを誰も振り向かず

お洒落して奇麗に化けた夜の蝶

おしやれする寡婦を男がほっとかず

おしやれする女オシヤレなベツト飼う

ナイーブな光りにおしやれ浮き上り

包丁の手さばきプロがもつリズム

千本の針に耐え抜くプロの道

金のためプロは労る詩を持たず

読みとれぬ前衛プロの書道展

ワンカップ一気飲みはす勤務明け

一滴を惜んで開くワンカップ

団体の旅ワンカップがよく喋り

尼崎いくしま川柳会

この先で金の力がものをいう

絵ハガキに幸せですと娘の便り

健康食品買えと昼寝を起こされる

盆栽に少しの嘘を見抜かれる

先頭の旗手に優越感がある

とまり木の先客すでに酔っている

釣竿の先を見つめる秋日和

右へ做えうしうしょうも味

駅前の立喰いそばも旅の味

再婚がもしも出来たら敵とる

秋の虫タクト振るのがいるらしい

流れ雲にはやる心を押さえられ

頂上の根雪が汚れている不満

一枚のはがきでなごむ昼さがり

さざ波のおもてに確かな秋が来る

年

博一

元友

年

元友

博一

健平

定一

桃風

秋風

照路

柳五郎

哲郎

青銅

宏太

玉水

恒洋

番茶

歌子

佳秋

かす子

伊三郎

郁榮

かね子

玉子

晴子

牧郎

保藏

かすみ

美智子

定人

君代

年

代

年

代

年

桜貝耳にあてると波の音
狭い道大きな犬とすれ違ふ

十月のクーラー肌にやさしくて
会釈して思い出せないあの笑顔

秋風に乘つて祭りがやってきた
親も子も夏ぶとりして秋になる

先をゆく白い杖までも盲導犬
お袋のハガキは稲の出来不出来

メロドラマこの先子供に見せられぬ
深夜の靴音コンクリートに響する

袈裟とれば色即是空色が好き
別れの涙知りながら逢いにゆく

秋の雲見てると旅に出たくなる
YFC川柳会

あいづちを打ちつつ握るシャリ加減
お雛子のリズムで煽ぐすしごはん

寿司出前客が帰ったあとで来る
鮎好きにうまい鮎屋を教えられ

寿司折を手土産にして借りて去に
夏祭また鱧すしの値が上がる

あなごすし嫁のお産の病室へ
寝たきりを看取る嫁あり鮎を買ふ

巻すしを巻く手が天気予報聞き
歳の市大丸で遭い福寿しで遇い

川柳だけはら 森井 蒼居報

はいくしよのブルでかおをつけたまはるみ
バツシャンバツシャンうきわでおよいだよ

流水ブルみんなでおよくとおもしろい
夏休み水泳きうくのびました

水泳をしたいがちよつとあつくない
おはようところさわや朝やけに

小西 亜貴子
小六 千恵子
小二 方 昭

女 紫香

貞子

春子

敏信

幸子

寅之助

良征

札子

美代子

墮駄

伊升

一郎

翠報

節子

絹子

たき子

翠記

房子

幸太郎

たす子

よし津

忍

栗

蒼居報

はるみ

あきみ

純平

千恵子

亜貴子

方 昭

合宿のキャンブファイヤー天高し
サマライフやつと見つけた虹の橋

電話口また母さんに間違われ
生きざまを句帳に止めて悔がない

熱帯夜寝つきの良さをうらやまれ
家計簿は知ってる愛に病んでいる

もうて来たオルガン誰もよう弾かす
伴奏せはせわしく暮れる男坂

ひよつとこの面がとつとつ喋り出す
高原の朝ウグイスに起こされる

節目節目を子供に支えられ
三歳の熱弁相つちいそがしい

熱帯夜星の数でもかぞえよう
へそくりの術を姑に教えられ

屑鉄の山が燃えてる昼下がりに
わが胸の血に似る彩で彼岸花

父のカタキを打ちに出る父に似て
川柳ささやま

喝采の嵐の中にいる涙
喪が明けて女嵐を意識する

嵐にもニコニコ顔の地蔵様
いつか子は親の仕草を見て習い

草種を蒔いて始まる愛の水
雑草に似てかめつたにへこたれす

乾し草の匂いが残る父の背な
伝説のたたりが怖いブルドーザ

伝説のエレジー蟬まで泣きを添え
伝説の松も虫には勝てず枯れ

伝説の池も沼でも家が建ち
気分転換写経の筆の先をなめ

立ち直る気慨せめても髪洗う
河原みのる報

米朝

文平

きし

法斎

エキ

貞子

和子

宗子

越山

素水

くに

ひか

テル

仁 昭

紀 愛

静水

房子

令子

蘭幸

菁居

節夫

笑子

貞子

比呂

舟

鈍

淑子

一路

シゲ

カツ

朝

平

斎

斎

子

子

子

子

子

子

子

子

気分転換しても日歩利は付きまとい
美しい嘘で気分を変えさせる
川柳わかやま 堀端 三男報

真直ぐに来るあの人を避けられず
都市沙漠避けて律義な土に生き

襟立てて人眼を避けている謀反
ライバルを避けてとつて一人相撲

野の花を避けて床しい靴の跡
人間を避けててどない生きますの

何も彼も赦した余波を避けている
風当たり避ける小さな嘘もつき

雑音を避けて思案の道を選ぶ
歓声へ日本一が泣いている

歓声がやんで自分をとりもどす
佳句地10選 (前月号から) 恒松町紅選

木を伐ると山がかなしい顔をする
ボケットに男はみんな嘘を持ち

黄昏が少女を無口にしてしまう
置き石が殺し文句を考える

吊皮のひとつひとつにドラマゆれ
温もりを一枚葉書からもらう

背のまるい案山子はきつと父だろ
月の暈あしたは逢えるかも知れぬ

秋の陽が傾きそうに旅に出る
よい事があるのか妻が髪洗う

千夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

みのる

ゆう也

栄美子

登志代

狂虎

公子

秀雄

凡九郎

太茂津

三男

克子

天彦

武太

秋

女

富美子

多賀子

美乙女

楓

信治

寿美子

なみ

千夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

歓声の聞こえなかつたチャンピオン

歓声を遙かに聞いてお茶の席

歓声の増塙の中にあるドラマ

歓声に夢覚まされた天の邪鬼

歓声に答える男の顔になる

挨拶の声歓声の渦に消え

種を播くやさしい土のあるかぎり

孫切る目のやさしさを知っている

蟻の巣を残して落葉掃き寄せる

毒舌へやさしいものを伏せておく

嘘でいいやさしい言葉欲しい古い

合掌をするとやさしさ湧いてくる

番大だやさしい顔でつとまらぬ

やさしいがつめたい瞳に怖さ知る

子をあやすとき横綱の顔でなし

なくさめはやさしく肩に触れただけ

野良帽を脱げばやさしい妻の顔

駄目駄目と言う度子供が欠ける

だましよい母に結局すくわれる

十月のやさしさ紅葉の肌ざわり

岸和田川柳会

植山

武助報

好調な目に爽やかな虹の色

二ツツ趣味を増やして一人住む

宝石はなくては光る妻の指

吉日の滞りなく式次第

逆境に選んだ友と棄てた友

信楽の狸出揃い待っている

身に沁みる忠告今日の僕がある

都会でも頑張り抜いた国訛り

電力もビールも下り汗終る

正博

英子

光代

武助

雀踊子

凡太

桂子

和子

紀美女

紀久子

照幸

照子

狸村

武雄

庄平

白光子

正子

誠一

信子

弘生

きみ

甘平

武助

白光子

射月芳

浪速子

狸村

世界人

希久志

ゆづる

出揃った舞台へ主役の名セリフ

秋の山松の緑を濃くする

ボナスへあれやこれやとたつ子算

秋深み和服の似合う亡母思ふ

調子よい言葉の裏にある墓穴

なんとなく袖を選ぶ齡となり

老人の主張少しはたよりすぎ

川柳大原

白岩

子ら去んで夫婦へ柿の実が落ちる

カマキリが草刈る僕の真似をする

太ったねえと石段に笑われる

快方へだんだん金が惜しうなり

人形になりたくない日の爪を研ぐ

人形はいいな腰痛などなくて

人形じゃあないと保育器背伸びする

もの思ふ夜は人形の目も渴き

長針と短針デートして別れ

極楽はよいとこらしい便もない

もの忘れ防く薬のないものか

母の部屋薬局ほどもあるくすり

病院の古参が薬の講義する

酒を呑み胃薬をのみ身をけする

薬づけ検査づけして医者肥り

薬代払える齡をつらやまれ

飼主の足音牛舎が聞きわけける

気の弱い俺に野良大何を媚び

ハワイ川柳ウイロー社

市岡

心配をすく男の上まぶた

心配をすくより一夜寝て忘れ

ミサイルの優勢争い気にかかる

無心状心配そくに話しかけ

加代子

春栄

富志子

さよ子

こう

ひで

操子

文衛報

いさむ

耕花

文衛

辰江

かすこ

寛平

はるみ

寿恵子

理恵

玉恵

元江

妻子

政勝

直二

天信

やぶえ

みづい

地佳平

十吉

蒼生

夢女

一牛

心配をした程でなかつたハワイ行き

心配御無用天道さまが見てござる

明日の事心配せず今を生きて

家内にも心配かけたオブレイン

無一物心配要らぬ楽隠居

終夜心配悪夢になやまされ

心配を夫婦打ち明けさばく知恵

八の字で心配事があると知り

茶柱に心配飛んで門を出る

生きて行く限り心配ついて来る

川柳塔からつ

浜本

夫がいる只それだけのことなれど

女の金の世話にはならず活したい

犬借りてきたが小判は出てこない

長生きで遅れた分を取り戻す

おしゃべりな彼の背中の厚い肉

松茸は匂いを嗅いで元の棚

ランセル子供の声で先帰る

入念に仕切った力士アツと負け

朝顔が待っているの早く起き

竹籠に野菊我が意を得たる顔

いろいろな花道がある猿芝居

年金のくらしを子等が混ぜにくる

京都塔の会

松川

紅生姜意外に美味い熱帯夜

坪庭が淋しさを増す秋の風

出目金をつくった人は狂つてる

年老いた猫の足音重くきく

音しても屋根が邪魔する遠花火

市場薙帰った音のする厨

熟年の手の鳴る方へ行きたがり

梨花女

拝山

嗣栄

紅溪

公女

張賀

虹宵

カロ女

晩舟

万里歩

義美報

虹汀

素石

久仁於

正敏

四郎

高明

幸温

忠泉

紫泉

ちよ

多々子

義美

杜的報

英王

明代

弘生

美穂

冬子

花代子

杜的

油断すなマジックミラーまる見え

鐵火

新入社社長の言葉肝に受け

良京

笹舟の流れを遠い亡母が追つ

みど里

宝船のむこうに鬼の顔が見え
昭和史を肩寄せ合つて来た仲間
大草原の仲間たちにもある掟
台本のとりには来ぬ渡し舟
日の丸を立てる仲間がまだ残り

南大阪川柳会

中川

滋雀報

平日のリズムが狂う妻の風邪
本能の凡てが愛であつてよい
本能に勝つてきれいなまま別れ
本能を叱る理性の哀しさよ
本能の中で聞いている霧笛
本能をにくむ女のうす化粧

川柳しんぐう

川上

道子

三男

まさ子

道子

道子

道子

道子

父を画く鼻が大きいわらべ唄
ベテランの鼻をあかした日の機嫌
鼻の穴見上げて拝むるしやな仏
酒だけが生き甲斐と言う赤い鼻
園児の絵象さん鼻から書きはじめ
あぐらかいてるから安心できる鼻
ピノキオの鼻が掟を知っている

文秋

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

善信

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

勝美

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

春蘭

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

洋子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

雀踊子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

楓楽

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

柳伸

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

恒明

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

度

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

公一

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

喜風

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

慶三

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

喜美子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

蘭

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

智子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

凡九郎

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

章久

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

弘生

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

凡子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

柳宏子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

千梢

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

久子

直感に來たが明日まで抱いておく
下り坂不安な直感だけ当り
直感の牙えが悲しい縁に佇ち
直感が当ると何時も凶と出る
直感を信じ一途に遂げた恋
本心は言えぬ悲しい九官鳥

香川美代子さん(奈良県)より
亡夫酔々氏満中陰供養として
金一封

拝受致しました

川柳塔社

子の笑顔どんな苦労も忘れさせ
もう何度騙されましたあの笑顔
比沙門天以外は皆んな笑い顔
ヅカガール笑顔と足がよく揃い
恋人の笑顔女神に見えはじめ
孫の芸い子いい子の笑顔する
顔に出た内緒を妻に覗かれる
何時の間か内緒がばれてもめている
内緒ごとと罪滅ばしに子の認知
裁縫箱母の内緒が秘めてある
日記だけ知ってる内緒の片思
孫たちの内緒聞いたる象の耳
彼岸花男蝶夫に内緒する
臍くりが何時か内助の功をする
毒舌で曲りの角の石を取り
あるスリル妻に内緒でほくそ笑む
内緒ごとすこし持つていく夫婦
人形を抱いた男の内緒ごと
やりくりを買われ又もや幹事役
子育てのためのやりくりいとわな
矢印は帰道など教えない

しづ江
車楽
石花菜
喜美子
雄々
碧水
貞山
とめ子
ゆり子
あや子
松女
観洋
独歩
秋人
寿朗
満春
秋女
柳前
民風
律子

毒舌も腰折れにする毒があり
児の笑顔夫婦けんかの腰を折る
毒舌が言えぬから飼主を噛む

駒つなぎ川柳会

里

ブレイキが故障のままでもう不惑
かわり身をみせる灯りがあれば良い
延着の新幹線で出るアクビ
戦争の傷洗っても洗っても
地獄から毎月届く請求書
ブレイキの故障面白い夜となる
日に三度箸を洗っている平和
税務署を出ると地獄の絵が消える
ブレイキが効かぬ車に乗り換がる
もやもやを洗ってくれる通り雨
おんぶした思い出母の背を洗う
岐阜駅で政治家一人思い出す
八月の恋はブレイキなどきかぬ
洗っても落ちぬカルマをいくつ持つ
夕焼けが見る見る変わる西の空
父の地獄母の地獄を踏み台に
足洗う覚悟仲間がつきまとう
保護色の変化に声なし無神論
ブレイキよ君が頼りないろは坂
一匹の狼がブレイキ食べに来る
吉日の新幹線で富士を見る
ブレイキのこわれた自転車賃してくれ
死ななきや直らないとブレイキは思ふ
絵日記の新幹線は窓があき
土ふまずを洗って踏むと母眠る
暴走族のブレイキ死神待っていた
いやな人の匂い洗っても洗っても

宗則 康子 苦句 翠公 白兔 育仔 花仔 柳伸 雀踊子 邦晴 悦郎 千代三 天笑 竟然坊 幹齊 英比古 浩一郎 春蘭 美幸 萬楽 雅風 律々 醉彦 鎮彦 凡子 恒明 冬葉 規不風 萬の 史的 好

いつでも子供ではないもの洗う
新幹線風に弱いエエシの子
変化のない生活にムホン考える
良心を試す地獄の蜘蛛の糸
人間の化けた蝶々はセニを吸う
新幹線の旅へローリンの世話になる
洗いざらい話して今朝の胃が軽い
地獄まで誘う女の深なさき
2DK纏めて洗う共稼ぎ
金次第なら地獄へ行く切符

南海電鉄川柳部

広井すえお報

昨日から変わった子供が気をもたせ
忘れぐせ昨日がわからぬ日記帳
徒競走合図に真顔の幼稚園
合図した相手刑事とつい知らず
合図どおり進んでいたに事故となり
声出さず夫婦の合図眼が動く
目も耳も合図通じぬ老夫婦
まだおぼこ合図をすれど通じない
青をゆく園児合図の手を挙げて
二人だけしめし合せて置く合図
ウインクを盗んだ男は独り者
蔭口へ中の一人が咳ばらい
眼の合図踊りの輪から窓が抜け
合言葉星を信じて山登る

西宮北口川柳会

妹尾 春江報

故郷からのいが栗文に包まれて
手土産の栗饅頭に孫笑顔
栗ごはんサンマを添えて膳が出来
お使いの子へゆで栗握らせる
栗めしの栗は夜なべに皮をむき

智子 美津枝 文秋 射月芳 弘生 一三 美乙女 一步 勝美 小路 雅風 しづ子 さよ すえお 圭水 東雲 信江 いづ枝 春蘭 竟然坊 山久 勝美 花仔 悦郎 伊三郎 春蘭 光江 春江 笑女

菩提寺の栗に虚勢を見抜かれる
女子寮にふる里があり栗の皮
いが栗を絵に描きたくて二つ買う
アイロンのスイッチ駅で思い出し
道化師になるスイッチをひねられる
タイガース勝つ見込みなくスイッチ切る
スイッチは妻の掌にかり養子です
面影へ心のスイッチが切れる
憎からず心のスイッチ触れてみる
切替の出来ぬスイッチ持つ男
スイッチ切って安らぐ夜がある
スイッチもパンも生活を左右する
煩惱を消すスイッチが見当らぬ
すりむいた孫まじないで泣きやませ
まじないは詠ったままの方が好き
マイホームまじない程度保険かけ
宝くじまじないしても運つかず
人間の弱さの中にある呪文
まじないで病氣治した過去がある
まじないが祈りに変わる恋ころ
まじないが効いて命に灯がともり
まじないが効いた昔に祖母がいた
野仏かまじないの灯をとり
残り物みんないただく秋となり
猫の眼に憤懣を見た弁当空
仲間割れじつくり待っている刑事
光背の一真 秋の雲を置き
化野の仏の群れに蝶二匹
約束が流れた雨の彼岸花
菊に來て十二時を指す花時計
白小菊つましく咲きこんにちわ

郁栄 かすみ 一郎 眉水 紫香 美津子 半歩 三笑子 紀雄 義雄 隆子 いわゑ 婦美子 冬子 弘生 照子 千世子 惠 保蔵 みつ子 幸々 奈々 伸子 花村 敏夫 君子 杜的 墮駄 春子 右近 キミ

サルビアの炎となりて燃えつきぬ
幸薄い女の細いうなじ線
袋小路菊を育てる父の霸氣
金はない天衣無縫の妻がある
田卓へ出て攻めことばうろたえる
赤い靴履いた思案の日が暮れる
花かげに遠慮深げな秋の蝶
きれいごばかりが並ぶ指定席
蜘蛛の巣が顔にかかって負けがこむ
名刀の刃こぼれ泪のあとがある
少しずつ諦めが湧く地平線

城北川柳会

神夏磯道子報

気がかりの用事すませてお茶旨し
味つけが妻と似て居る赤のれん
妻が引く図面に隠居部屋は無い
妻の座で何点つくか自己反省
おろおろと客もてあます妻の留守
花道で背叩かれる勝力士
オンザロック水になつて居る話好き
紙吹雪オーブンカーに舞って居る
ゴシップをさりとて妻の二重顎
花道は宇宙を飛んだテレシコワ
追いついた途端ライバル又離れ
糟糠の妻と歩んだ五十年
妻の手を引いて古杜寺の春巡る
一田の賽銭神がうろたえる
退官の花道飾る名講義
花道に沿って歩いた風見鶏
共稼ぎコロケ続く幼な妻
慾捨てて尾花の揺れに乗って見る
菊の香や我が情念の醜さよ

恵美子 あき子 日の出 美津枝 はつ枝 文平 年代 幽香 水声 伊升 園歩

船一つなめても肥えるかと思ひ
我が家の花道妻に開けて置く
すだち貰いかばすも貰ひ秋すすむ
鏡台のピンはさかさまだ出ます
文珠にもなれず三人寄って飲む
胎動へもう通じてる糸電話
アレスケンつまずく度に強うなり
左遷にも心の杖となつた妻
親ばなれ急ぐ子供に資金出す
花道で寛美が泣かせる芝居する
妻が居て冬には冬の花咲かす
冷蔵庫妻の思いが詰めてある
白く干しノラにはなれぬ愚妻です
小菊なら這つて咲いても様になり
花道を涙こらえた顔が行く
花道の月形傘は開けない
川柳はびきの 塩満

ふみ 公一 節子 泰世 右近 登志代 テルミ 佐津乃 茂一郎 満津子 静歩 婦美子 美恵 弘生 三十四 敏報 伴子 隆 美代子 隆二 吐来 みつる 寿美 末一 阿衣 美恵子 和子 敏

減税がどうあれ値上げ目白押し
鉢の花蝶々来ない高い窓
庭掃除コオロギ三段跳んで逃げ
ゴマ塩と玉子頭の敬老会
千手観音どて手で風を受け給う
帯解いてやつとお茶漬欲しくなり
詰将棋解けぬ問題係が解き
あの頃が忘れられない恋灯り
カラオケのアンコールする河内弁
まだ解けぬ誤解のままで夜が更ける
打吹川柳会 奥谷 弘朗報

雄々 節子 経義 孝美 柳風 寿満湖 康子 笑映 高代 亮二 規子 文枝 志づ子 弘朗 紫香報

尾浜川柳会

黒川

紫香報

もう嫌ひ火の燃え方がちぐはぐで
 不知火は故郷の海にまだ残り
 胸の火を母はとくくに知っており
 旅の宿となりの音で寝つかれず
 音もなく花から花へ蝶の舞
 ラムネ呑む一口ずつの玉の音
 踊の輪炭坑節はよく揃ひ
 猪も出て来て尾振る敬老日
 花道を飾る男の汗がある
 母が逝くシャボン玉より呆気なく
 情熱がさめると旅がしたくなる
 扇風機汚れ落してご苦労さん
 半分は亡妻に供へた夜の膳
 子育てを昨日のように妻語る
 明日に生ききのうのことは夢にする
 きのう会った友のひとこ気にかかり
 昨日から待つてましたと封を切る
 きの中からナゾが解けない二日酔い
 今日もまたきのうの事で揉めてます
 昨日の分払って今日は借りて飲み
東大阪川柳同好会 **斉藤三十四報**
 同窓会校歌で唄うひげおやじ
 老いてなお校歌を聞けば血がたぎる
 グランドに響く校歌を夢に見て
 アルバムで忘れた校歌思い出す
 甲子園校歌流れて背のびする
 池高の校歌へ茶の間も合唱し
 おひらきは校歌でしめる同窓会
 優勝に泣いて校歌にまた涙
 少年の志たたえている校歌
 末席がよいとこ突いたが舌たらず

歌子 義嗣 真男 勝見 新吉 義男 清太 寧一 弘治 紫香 昌子 寅之助 藏保 貞吉 伊三郎 牧郎 すみ秋 佳秋 白屯 かずを 千代子 柳影 光水 美子 慶三 良京 湖風 三十四

舌たらずながら信頼置ける弁
 友情をつなぎとめてる丸い舌
 舌三寸他人の痛みに気がつかず
 遺跡から伝説急に株を上げ
 秋風へ紅葉は恥知りかける
 コスモスへ乱数表の風となる
 話題ない夫婦が聞ける風の音
 伝説を語りついでる過疎の村
 留守番に三食昼寝ビールつき
 隙間風親子の対話消してゆく
勝山双葉川柳会 **鈴木節子報**
 珈琲カップの底に沈めた妥協性
 紹介状医者は冷たい顔で書く
 名作を寝るも忘れて読みふける
 嫁ぐ荷が傾く軒を後にして
 市場籠松茸一番上のにせ
 秋深く珈琲ロマンズ秘めている
 有力な紹介状が高くつき
 少し傾くと通してくれる道
 お荷物と知らず一途になっている
 妻も子も仕事一途を不満がり
 傾いた頃から西陽意識する
 松茸の豊作不作遠く聞く
 すき焼の松茸互いにゆずり合い
 珈琲の域からちっとも出ない恋
 傾いた愛は破局へ一直線
 松茸の価値をじっくり考える
 月が傾いている傷口が痛みだす
むらくも句会 **藤井明朗報**
 当日に備えて今日もリハサル
 雑談に処生を渡る術を知る

右近 金太 滋啓 凡九郎 度 悦郎 山久 喜風 柳宏子 節子報 寿美 哈尔子 喜美子 勝留子 いくの 好子 洋子 秋子 久子 藤子 妙子 楓子 柳伸 智子 節子 一朗 鴛生

お上手ねとほめられ満更悪くなし
 当日は欠席出来ぬまゝとめ役
 話上手へ相づち打っただけで済み
 当日へ切札そつとかくし持つ
 七人の敵へ上手に歩を合わせ
 災害へ真心こめた助け合い
 貧しくも助け合いつ強く生き
 山の幸探して歩く秋日和
 豪華より小さな親切助け合い
 助け合い遺児へ救い手を伸べる
 助けたり助けられたり丸く住み
 富有柿たわわに熟れて秋日和
 あきらめたように落葉は風に舞う
 天高くすすきり澄んで秋の風
 この足が支えくれた共白髪
 去った娘の風の便りに聞く噂
 ふる里の噂を風が連れてくる
 いたわりの二人三脚夫婦愛
 靴はけば今日の戦の風が吹く
 シャボン玉旅する命風まかせ
 山が鳴る北風吹けば雪となる
 北風がふけば重衣ふえてくる
 うんうんとじいちゃん約束忘れてる
 秋風が幸せ運ぶ縁結び
 としよりの昔を語る人がほし
 晴れ姿見送る笑顔に雨が止む
 体操をすれば六十路の肩が鳴る
 肩幅の小さくなった病み上り
 チヤンス見送り後に残る悔い
 秋日和トンボも嶽で一休み
 雑談をしていて隙のない話

秀子 孝華 文子 福子 みどり 蚊声 克子 幸子 雪路 よし美 ゆき子 清祥 はじめ 林蔵 百代 富子 喜代美 よし子 やス子 マサコ 千里 竹乃 吉野 藤子 保子 さくら 八重子 ふさえ 峰雪 明朗

● 募 集 ●

二月号発表表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘 高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「コンビ」 宮園 射月芳 選
 「歩く」 政岡 日枝子 選
 「素人」 森井 菁居 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りです。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

三月号発表表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘 高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「印象」 新谷 笑痴 選
 「残り」 藤村 め 女 選
 「耳」 野田 素身郎 選

★愛染帖課題吟へは同人・誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋をこゝ使用ください。

12月の常任理事会は1日(木)

〒545 大阪府阿倍野区三丁目二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 発行所 **川柳塔社**
 電話 (云々) 六九一四番
 振替口座大阪 8-133368番

定価 五百円 (送料50円)
 半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)
 昭和五十八年十二月二十五日印刷
 昭和五十八年十二月一日発行

本社12月句会

日時 十二月七日(水) 午後六時
 会場 なにわ会館
 天王寺区石ヶ辻町19-12
 地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
 電話 06-772-1441番
 おはなし
 兼題 「變動」 西尾 栞 選
 「墨」 中川 滋彦 選
 「禁物」 岩本 雀踊子 選
 「幕」 黒川 紫香 選
 席題 二題 当日発表
 各題三句以内厳守
 会費 五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

1月の兼題 「点減」「じわじわ」
 「頭」「表情」

1月の本社句会は7日(土)

お 願 い

誌代その他本社へのご送金は必ず左記
 会計室へお願い致します。

★郵便振替(大阪) 8-33368 川柳塔社宛
 をご利用下さるのが安くて便利です。

用紙は郵便局にあります。

〒581 八尾市中田二二〇一 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

編集後記

☆今年最終号の編集後記を日本シリーズ最終戦を見ながら書いています。本社会の日なので、家を出る時間を気にしながら。

☆とに角、今年の七戦は凄絶そのものだった。目下、六面の裏を終って二対零で巨人がリードしている。このまま巨人が覇権を握ればそれは王者の意地がそうないさしめたと言うより他はなく、西武がくつがえせば、個性的な選手をうまく使いこなした冷静な広岡監督の采配のたまものであるう。何れが勝つにしても明日からはまた新しい道が続く。それは王者の初心である。

☆西山幸さんが路頭賞を受賞されたとき、その祝詞に私は世阿弥の「花鏡」奥段にある「初心不可忘、時々初心不可忘、老後初心不可忘」に触れた。同人になられた時に初心に返り、受賞をしたらまた初心に戻る。竹の節のように初心が来るのです、と。

☆不二田一「夫さんが亡くなった時、事務所を移転した時、川柳塔は修羅の初心を迎えたが、それを乗り越えて成長した。」

☆この三年間、私も各方面でたのしい仕事をさせて頂いた。その一つ、朝日新聞の大阪版に連載の「なにわ川柳・この一句」を一冊にまとめた。中尾榮介さんに書評を書いて頂けて、心である。

☆その川柳集は、朝日カルチャーセンターの制作になるが、校正をして下さった水田恭一氏が「家に古くからあったもので、私は川柳をしないのでしあげます」と食満南北さんの横額を下さった。かつて芝居の照明に使用された「さし出し燭台」の絵に添えて「大阪の夢七三の鴈治郎」の句が独特の筆致で書かれてある。「なにわ川柳」出版の記念にふさわしい品で家宝が一つ増えた。

々々、遺物集「光背」が出版される予定である。「薫」
▼十二月は忘年会のシーズンである。宴会ともなれば歌や踊りがつきものである。最近とくにカラオケなるものが絶対不可欠の傾向にある。音痴にとつてこれが大きな悩みの種であり、それが因で偽証の理由を以って宴席を断る時もある。私もその一人であり、宴席に出ても今までは頑固に歌わないで来たが、断り切れない雰囲気の場合もある。一面馬鹿げたことであり、そのように思っているが、座の文学と謂われる川柳をやっている者として、その場を白けさすのも心ないことでもある。歌や踊りは感情の表現であり人間の本能でもある。歌いたい時も踊りたい時も出る。それが出来ないのは何か。たいていは恰好や体裁をつけていることで、なかに遠慮もある。出来れば座の雰囲気も大切にしたい。そこで考えが、食わず嫌いで音痴を決

め込むものもある。作文の成績が悪く、苦手な者が後年文章を書く時もある。芸を競う場合は別だが、やって出来ないことはない。幸いカラオケを習う機会を得て目下特訓中である。カラオケを馬鹿にして来たがその馬鹿になりきろうとしている。国家の最高機関を構成する国会議員の一部が腐敗している。あえて一部と言う。次の選挙があるまでは彼等に対する怒りを、せめてカラオケで馬鹿になって叫んでいたい。

☆眼鏡を新しくあつらえるとき一番困るのは、自分の選んだフレームが実際に似合うかどうか、イメージに合うかどうか、極めて強度の近視の僕には確認のしようがないことである。つまりフレームにレンズが入っていない段階では、30cm以上離れると鏡に映る我が顔はまるで不分明、10cm位の距離まで近づき、やっと目鼻全体が感じは掴めない。さりとてレンズを入れてからでは取替えが出来ぬ。結局、手さぐりの状態で選ぶということになる。

眼鏡店もカーペットを敷き詰めた年々豪華になつてゆく。内装に金をかけるのも結構だがオールドカメラでも常備して利用できるようにしてくれたら、随分助かるのと思う。

☆先日、ある鉄鉄の駅前でバスの待ち時間を利用して近くの書店に入った。10分ほど立読みしようと思って書棚をぶらぶら眺め歩き子供達の漫画本の棚に来て驚いた。何と全部ビニール袋に入っているではないか。この町の別の書店では子供の漫画本だけでなく、なぜか芳賀書店発行の「シネアルバム」(主に洋面スターの写真集)もビニール袋入りであった。ビニール袋といえば皆様ご存知の内容。それと同じ扱いで並んでいる姿を見ると、たとえ立読み防止策とは云え、何かやりきれない思いがする。

☆皆様、いい年をお迎え下さい。

(史)

洗練された嗜好遍歴は、
リザーブへ向かわせる。



ひと口、含んだだけで、揺ぎのない味に
触れることができる。豊潤にして毅然たる
味。リザーブを飲んだ方は、大人の洗練、
都会のエレガンスを感じることだろう。

サントリーリザーブ

標準的な小売価格3,200円 製造・販売 サントリー株式会社

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



TEL641-0551

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ